葛西善藏

PL 810 A3Z8

Sasaki, Chiyuki
Kasai Zenzō

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



葛西善藏

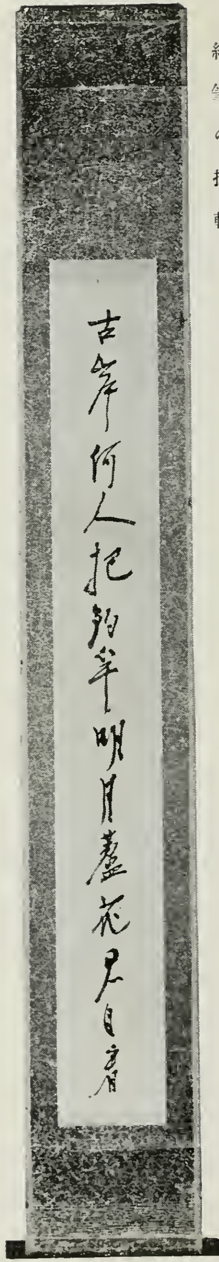
佐佐木千之著



學藝社

PL
810
A328

LIBRARY
MAR 22 1968
UNIVERSITY OF TORONTO



絶筆の掛軸

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/kasaizenzo00sasa

まへがき

これは葛西善藏の晩年を描いた小説である。臨終も間近い病床にあつて故人は「自分をモデルにした作品を書くやうに」と私に言ひのこされたが、私はせめて四十二歳になれば――故人の享年と同じ年齢に達すれば、心境的にでも故人の風貌を傳へることが出來さうに思つて、ひたすら生きた資料の醱酵を待ちに待つた。爾來十有五年、歳月は空しく過ぎて私は兎も角その年齢を數へるに到つたので、臨終の約を果すために筆を執つたのであるが、藝術に一生をささ

げた優れたる藝術家の、苦闘と精進の眞摯なる生涯と清貧の裡に飽くまで彌高を持した藝術魂の熾烈な芳香とを少しでも傳へ得たとすれば、それはすべて故人の晩年に親しく身邊にあつて、その謦咳に接したたまものといはなければならない。

同郷人としても、世に知られざる一面を深く掘り下げ、かたがた藝術家として、また社會人として、あまねく人生行路の艱難に堪へ忍んで行くためにも、葛西善藏の歩める道は多くの示唆と敎訓に富んでゐると思ふ。

時世の轉變にかかわらず、人および藝術家としての故人の風格を偲び、その業蹟を再檢討するのよすがともなれば、私はまことに幸ひである。

因に、人生の眞實なるものを生かすことを目的とし、併せて故人の僞らざる晩年を描くことを念願にしたため、敢て人物は實在の人々をしかも本名を以て登場させてもらつた。能ふかぎり歪曲を避けたつもりなので、あるひは禮を失

するの結果を招きはせぬかと、それを惧れる。尚また故人の友人諸氏の文を抄引し、幾多の資料を仰いだ向に對しては深甚の謝意を表したい。いづれもこの作をして重厚味を加へしめた力が少くないと思はれるからである。

昭和十八年四月三日　神武天皇祭

著者しるす

葛西善藏目次

装幀・棟方志功

葛西善藏

佐佐木千之

この一篇を故葛西善藏氏の靈に捧ぐ

第一章

「葛西さんと宇野さんが、まだ見えないですが、そろそろ合評會をはじめようではないですか。」

司會者の中村主幹が來會者一同を見まはしていつた。關東大震災の翌年のことで『新潮』の月例となつてゐた創作合評會の席上である。主だつた雜誌の作品が、さまざまの批評をあびる、それを二人の速記者が片隅で機械のやうに記錄にとどめたが、私は白い布におほはれた卓上に、つぎつぎとはこばれる支那

料理をながめたり、氷砂糖の沈んでゐる老酒の盃を吸ひながら、いはゆる文壇の空氣のなかに、じつと耳をすましてゐた。

私は『新潮』編輯部の一員として、合評會の雜務を擔當してゐたから、出席者がそろつて、合評會がはじまりさへすれば、閉會後の支拂まで用がなかつたのである。ただその日は、まだ二人の出席者が見えることになつてゐたから、何となく氣が落ちつかずにゐた。ひとつには葛西善藏といふ人に、まだ私は會つたことがなく、作品をとほしてではあつたが、それも同鄕の先輩として親しみを持つてゐたので、初對面の印象を心待ちにしてゐたわけであつた。

葛西善藏の名をはじめて知つたのは、處女創作集『子をつれて』が出版された時であつた。私は『新潮』の裏表紙に出たその廣告文中に、貧苦と戰ひながら精進怠りない云々といふ文字を讀み、同時に創作集といふものに少からず關心をいだいたことも事實で、私はまだ少年で、文學にあこがれを持つてゐた。

その後、雑誌の仕事にたづさはるやうなことになつて、私は葛西さんが青森縣の出身であり、かつは弘前を郷里に持つことを知つた。それとともに、たいへん酒を飲む人であることも知つたが、これはゴシップの記事によるものが多かつたやうである。

合評會は進行して、初夏の夕闇が開け放たれた片側の庭の植込にただよひはじめ、支那風の燈籠に型どつた電燈がかがやいた。偕樂園といふ支那料亭は、日本橋龜島町から、震災後に傳通院前の尾島といふ運命鑑定家の邸宅に引き移つてゐたが、日本建築に支那趣味を加へ、座敷も廊下も豪奢なものであつた。

やがて、女中の案内で、葛西氏と宇野氏があらはれたが、黑つぽいセルに袴をつけた坊主頭の葛西さんは、足がふらふらしてゐた。もみあげの長い宇野氏は、どうもといつて兩手をついて挨拶すると席に坐つた。私は醉つてゐる葛西さんのために、座蒲團を持ち歩いて席をつくつたが、ふらふらと立つてゐて、

なかなか坐らうとしないのである。

「舟木重信君の奥さんの葬式のかへりで……。いや、どうも失敬。」

酒がなくてはゐられなかつたもので、ついおくれてしまつたといふことであつた。首をちぢめて恐縮するとたんに、にやつと笑つた葛西さんの風貌を一目して、私は、まがうかたなき津輕人を見てとつた、しかも、決して國なまりのないそのことばのうちに。

その月の作品を葛西さんは、あまりよく讀んでゐなかつたやうであつたが、それでも盃をかさねてゐるうちに、次第に雄辯になり、そろそろ批評を加へ、ある作品が俎上にのぼつたときなどは、速記者がしばし鉛筆をとめて、あきれた顔つきで、私の方をふりかへつたほど、ほかの人の發言とこんがらがつてしまつた。それでも、いつから平氣で、

「僕は、だから、讀後に思はず、微々、苦々、笑々……一番、二番したのであ

ります。」

と長廣舌をむすんで、葛西さんは、それまで右手で虚空にかざしてゐた空つぽの盃を吸ひ込むと「うん」と、かろくいつて、ひとりでうなづいた。

「速記録は、どうせ後から直さなくては。」

中村主幹は、右手を五分刈頭にあてて、要點だけは落さないやうに書きとめておくやうにと、速記者に注意した。

醉ひのために、いくぶん脫線のところはあつたが、それでも葛西さんの飄々ぶりによつて、當夜の合評會は、稀れにみるにぎやかさと興味を加へたやうであつた。速記者は飜譯に少し日數がほしいといつてゐたが、各自の訂正にも時間がかかるだらうから、できるだけ早くとどけるやうにとたのんで、私は二人の速記者のために、別室で食事を用意させた。

そのあひだに、出席者一同は歸り仕度をして、嵌込の照明のついてゐる廊下

を、つれ立つて玄關の方へいつた。

急いで私はタクシイを往來から幾臺かひろつて集めたが、葛西さんは一番おくれて、沓脱のところに腰をかけ、下足の爺さんの、紺木綿の股引のうへから、股間に手をやつてからかひ、そして自分も笑つてゐた。

「葛西氏は私が送りませう。急げば九時の汽車に間にあふから。」

中村主幹は兵子帶にゆはへた標準時計を見ていつた。本郷弓町の西城館といふ下宿へまはつて、東京驛に向ふはず、中村主幹は相州の辻堂海岸へかへるのであつた。

西城館へ葛西さんを送りとどけた中村主幹が編輯室へ見えての話に、

「なかなか自動車から降りないのを、若い女のひとが出てきて、引きずるやうにして、やつと下宿の中へ入れたですよ。あれが小說に出てくるおせいさんといふのでせう。葛西氏はおもしろいけれど、醉ふから……。」

折から、合評會の速記録ができあがつてきたので、中村主幹は毛筆に赤インキをつけて、訂正しはじめた。主幹はながいことペンを持つて仕事をしたために、書痙といふ病氣にかかつて、毛筆をもつぱら用ひてゐた。そして、原稿をみづからも書いたが通俗小説の大半は談話筆記をさせた。『夜の潮』といふ、ある雜誌に匿名で連載した一篇を、私もたのまれて筆記したが、その二年間ほどは、毎月一回泊りがけで相州の海岸にある主幹の家へ出かけた。およそ三時間ほどのあひだに、三十數枚の物語が、流れるやう唇頭をついてほどばしるのを、私は、かたはらの小机にむかつて筆記し、それがすむと、主幹は黒い細紐で頸から吊した蟇口の中から、十圓札を一枚ひきぬいてわたしてくれるのが例になつてゐた。こんな仕事も、一つのきつかけとなつて、私は編輯にたづさはることができたのであつた。

速記録を持つて、私は葛西善藏氏を西城館に訪れた。古びた、ふつうの下宿

屋で、刺を通じると、色艶のあまりよくない、束髪の女がでてきて、
「さあ。」
といつた。「おせい」の名で小説に登場する女の人だなと、私は思つた。それまで鎌倉の建長寺境内の寶珠院の一室に、葛西さんはゐたが、寺の門前の茶屋の娘ときいたおせいさんは、ずつと西城館にも、いつしよにゐるのであつた。
女の人は、手に銚子を一本さげてゐたが、臺所の方へいくと、一升壜から酒をついで急いで私のあとに立つた。
「二階です。」
梯子段をのぼりつめると、酒の匂ひがあたりにただよつてゐた。私が障子の外から、
「ごめんください。」
と聲をかけると、同時に内側から障子があいた。

「ちよつと、小便してきますから。」

先夜の葛西さんと、そつくりそのままの醉ひ加減で、片手の掌を上にして、部屋の中へ招じ入れた。六疊の部屋には、小柄な客が一人ゐて、盃を手にしたまま、

「どうぞ。」

といつて、ゐずまゐを直した。牧野信一氏であつた。私たちは、顏を知つてゐたので、らくな氣持で、挨拶をすました。牧野氏は『隨筆』といふ雜誌の記者をしてゐたが、『父を賣る子』といふ小說を『新潮』に發表、その他の作品もあつて新進作家として、世に出はじめてゐたし、『人の印象』といふ記事に、牧野氏をあつかふことになつた際、數篇の原稿がみな集つてゐるのに、久米正雄氏からは、なかなか來ないので、毎日のやうにウナ電を私が打つた。それでも原稿が來なかつた。

「しめきりませう。」

待ちくたびれて、中村主幹もさういひ、ほんたうに校了にしようとしてゐると、久米氏からの電報である。

「サメテヨク　ヨフテナホヨキ　クダマキノ　チチモウレウレ　サケモノメノメ」

この電文は、はじめよく讀めなかつた。しかし、くりかへして讀むうちに、まことに洒脫な牧野信一印象記であることがわかり、私たちは、急いでこの片假名文を、そのまま原稿として追加した。久米氏のいはゆる微苦笑を禁じ得ぬ底の、含蓄ある電文は、校正する私にも微苦笑を強いた。

善藏と信一――酒の仲間に、二人ならなれるであらうと、ひそかに私は思ひながら、葛西さんを待つてゐると、

「失敬。」

さういつて、もどつてきた。手拭で、ていねいに手をふきながら、牧野氏と私とを、ひき合したが、

「知つてゐる。」

と牧野氏もいひ、私もいつたので、

「さう、ぢや一杯。」

葛西さんは自分の盃を私にさした。そこへ女の人が、猫足の客膳を一つ運んできた。

「ハナ子、それは佐佐木君の前へ。」

おせいとは作中かりそめの名、ほんたうはハナ子だといふことを私は、はじめて知つた。この女の人は、私に初對面の挨拶もしなかつたし、葛西さんも紹介しなかつた。

私は風呂敷包をほどいて、合評會の速記録を取り出し、一兩日中に筆を入れ

てほしいといつた。葛西さんは、部厚な原稿を一二枚めくると、口をへの字にむすんで、ロイド眼鏡越しに、眼をそそいだが、やがて、何か思ひ出したやうに、ちよつと笑つて、

「中村さんに、さういつてください。こんどは醉はないから、どうぞ。」

それは、なんだか、醉中のすべてを知りつくしての戯談のやうに、私には思はれたのである。はじめて訪ねた私を葛西さんは、ひきとめてはなさうとしなかつた。晝間からの酒が夜までもつづき、いつになつたら果てるものやら、見當がつかないありさまに、私は辛うじて、かへる機會をつかまへ、逃げるやうなかたちで部屋を出た。

二日ほどして、私は西城館へいつたが、そのとき、葛西さんは、酒を飲まない青年を相手に、ひとりで盃を重ねてゐた。速記録は窓ぎわによせた机の上にのつたまま、まだ少しも筆が加へられずにあつた。そばにひろげてある黄色い

罫の原稿用紙にも、一字も書かれず、しかし、きちんと蠟石の文鎭がおいてあつた。

「石坂洋次郎君、やつぱり弘前の人で、作家にならうといふんだ。」

といつて、色白の若い人を私に紹介した。

「新潮社の佐佐木君。」

ひき合されて、私たちは挨拶した。石坂洋次郎氏は、慶應を出て弘前の女學校に教師として赴任してゐたが、何かの所用で上京して西城館に立ちよつたところで、葛西さんは、若い二人を前にして、

「作が、なかなかできないで、こまりますな。」

と、机の上をずらりと見やつていつた。それから、石坂君は、音樂に趣味があつてうらやましい。自分などは無趣味なものだから、つい酒になつていかんと、いつて笑つた。

「速記錄を直して下さい。待つてゐますから、どうぞ。」
　私は用件を申し入れた。
「さう、ぢや手を入れますかな。どうもしかし、合評會といふのは、あとで讀むと、へんにこんがらかつて、直しにくいものですな。」
　葛西さんは、萬年筆にインキをつけると、一字一字に力を入れて、訂正にとりかかつた。石坂洋次郎氏は、そのあひだに、いとまをつげて、かへつてしまつた。
　そのあとで、
「創作もやるけど、石坂君のは、へんにモダンで、僕には、ピンと來ないで弱る。酒を飲んでくれるといいんだが、あの人はコーヒーかソーダ水の方なんでね。」
　葛西さんは、そんなことから、

「あなたも創作志望かも知れないが、若いうちは、いろいろと經驗しなくちや……お酒も少しは飲みなさいよ。」

といつて、おハナさんに、あらためて燗をいひつけた。

「飲めさうぢやないの。手つきも、なかなかいいやうだし……。」

いはれて、私は苦笑した。私は速記錄をこれから、よそへ持ちまはらなければならないので、なるべく盃を重ねないつもりであつたが、實にたくみに葛西さんは、酒をついで飮ませた。私は、ごくんと、ひとのみにして、なるべく醉はない工夫をしなければならなかつた。

醉狸州といふ別號を、葛西さんはみづからつけてゐたが、なぜか文壇ゴシップは、葛西さんのタヌキぶりといふことを問題にした。そして、それは、作品の中についてもいはれ、異常な化かしの術を、この作者は、身のうちに心得てゐて、いつのまにか讀者を魅きつけてしまふもののやうにも、しばしば批評さ

れた。それだけまた、この作者の描寫なり表現は眞實なものをそなへてをり、簡潔なうちにも眞に迫る巧みさがあつた。その巧みさが、知らないうちに、作者自身をあやしい魔の淵に立たせて、おのづから、あるいつはりのかたちをつくらせてしまふもののやうであつた。それを、人はタヌキぶりといひ、これを作者自身も意識してゐるらしく、だから、作品の中で、ことさらに、こつぴどく自分をたたきつけ、いたましいすがたにさせておいてあるにもかゝはらず、讀後の感銘といふものは、案外のんきな明るさとのびやかさを思はせる結果となるやうである。私には、はつきりしたものではなかつたが、私たち郷土人が、それぞれのかたちで持つてゐるところの、ひとつの夢想がロマンテイックにあらはれるのではないかと、考へられたりした。

葛西さんの、その頃の作品は、おせいといふ女の出てくるものが多く、作中でみづからを呼吸器病患者に仕立て、太へんいたましい日日の身邊を描いた

が、そして、どれもが短い片々たる分量にもかかはらず、書いてあることは眞實性を帶び、それぞれ、一篇の作品としてのまとまりを持つてゐた。一字一句をゆるがせにしない、苦舍の描寫が刻み込まれてゐたせゐでもあつたらう、いづれも珍奇な出來ばえをほめたたへられた。

貧苦と病患にさいなまれた、日日の記錄を創作しつつありながら、作者自身は毎日の酒であつた。そして、その病氣も神經痛と喘息の持病があつて、時たま、その發作があつたかも知れないが、肺病ではなかつた。

「六月の半ば、梅雨晴れの午前の光りを浴びてゐる椎の若葉の趣を、ありがたくしみじみと眺めやつた。」

といふ書き出しの『椎の若葉』といふ短篇が、その夏發表されたが、葛西さんの部屋はかはり、窓外には、椎の木が梢をいつぱいに張つてゐるのが眺められた。そして、この部屋は西日がかんかん射して、蒸し暑かつた。浴衣の袖を

ぐつと、まくりあげて、夏でもやはり日本酒を葛西さんは、ちびりちびりと傾けてゐた。

秋のはじめであつたらうか。ある日、葛西さんは、和服の着ながしで、新潮社の應接室にあらはれた。

「日光へんへ、ちよつと出かけて見ようと思ふんですが、どこか知りませんか。」

とたづねられて、私は、

「奥日光の湯本なら、知つてゐる宿屋があります。」

と答へた。

「紹介してもらへませんか。」

「よろしいです。それは湯の湖のそばにある宿で、板屋九平といふ家ですが……。」

「仕事ができるかしら。」

「あそこなら、しづかだし、できますよ。」

私は、前に行つて知つてゐる板屋の主人にあてて、紹介の手紙を書いた。いく日かして、新聞の消息欄に、葛西さんが日光湯本温泉に滞在中であるといふことが報じられた。

白根山麓の晝なほ暗い山中の湖畔に、滞在およそ二ヶ月、名作『湖畔手記』が完成されたのである。それは『改造』に發表され、これまでの片々たる心境小説にくらべて、その量において重厚、内容において、稀れにみる高峰にいたつた、いはば心境小説の絕頂を示した異色あるものとして、世の稱讃を浴びた。それだけに、作者は苦吟の日をおくり、煩悶の夜を、おそらくは酒盃を手ばなすことなく、われとわが骨を削る思ひで、なにもかも、あなたまかせの心持で一字一句、石に刻みつけるやうにしてペンを執つたにちがひない。表現の苦しみは、とりもなほさず作者自身の、いはば一つの蟬脫の修行でもあつたで

あらう。この間おハナさんも東京から往復いくたび、また雜誌の編輯にたづさはつてゐた古木鐵太郎君も、督促のために、そのころはまだガタ馬車しか通つてゐなかつた戰場ケ原を越えて、奥日光の溫泉宿までお百度をふみ、時には幾日も泊りこみでの居催促に骨を折つた。

白根山雲の海原夕燒けて妻し思へば胸いたむなり

葛西さんは寂とした晩秋の大自然の中にあつて、遠く鄕里の實家においてある、別居久しき妻子のうへに、思ひを馳せ、かへりみて身近に、何といふこともなく日ぐらしをともにしてゐる一人の女をあはれに思ひ、あれを偲びこれを思ふにつけ、そんな詠歎が、おのづから脣頭をついてほとばしつたのであらう。

秋ぐみの紅きをかめばしぶくすくタネあるもかなしおせいもかなし

さなきだに、旅は哀愁をそそり、孤獨の詩人の胸をかきむしつたかとも思はれるが、これらの歌は、歌よみならぬ葛西さんの小說の中に折りこまれ、あたか

も夕映の光をうけてかがやく木の實のやうに、いたましく際立つてゐる。
西城館に舞ひもどつた葛西さんは、醉ふと短冊に、右の歌を書いたが、改造社の社長には、そのうちの最も秀れた一つを進呈したと、みづからいつた。
讀賣新聞は、新年附錄に明治大正百人一首をつけたが、その中に、白根山の一首がえらばれて入つてゐた。
簡勁なその筆致には、巧まざる雅品と枯淡の味がおのづからあらはれてゐたやうに思はれ、私も何とか一枚を手に入れたいと考へて、
「僕にも一枚書いて下さいませんか。」
と、折を見ては懇望したのであつたが、いつも、
「いま、短冊がないから。」
さういつて、一笑に附してしまつた。ある日私は、短冊を途中でもとめると、手にさげては見られてしまふをそれがあるので、洋服の下へ、そつとかく

して葛西さんの部屋を訪れた。
飲むほどに酔ふほどに、頃あひを見はからつて、私は、
「そこで、ひとつ、おねがひがあるのですが。」
と、おもむろに胸に秘めた細長い包を引き出した。
「あれ、ほんとに買つてきたの。」
つぶやきながらも、葛西さんは自分で墨を磨りはじめた。いくらかふるへる手を、何べんもやすめながら、白根山の一首を書いたが、せつかく書きをはると、すぐに破いてしまふのであつた。それが、まことに素早いため、どうしても私の手にわたらなかつた。
一策を案じた私は、のこりの短冊いく枚かを、全部そろへて、そこにおいた。すると、葛西さんは手拭で、手の汗を拭きとつて、また書きはじめた。墨がだんだんうすくなつていつた。

そのうちに、折よく小便に立つた。默つてとるのはよくないことかも知れないが、私はそのうちの一枚を、そつと自分の坐つてゐる座蒲團の下に、かくしてしまつた。その一枚にだけ『善藏』といふ署名が入つてゐたのである。絹地のは、みな失敗して、やたらに棒をひいてしまつてあり、それは畫仙紙の短冊であつたが、それだけまた墨のにぢみもおもしろく、かすれにも味はひがただよつてゐた。

その日は、私の持つていつた短冊全部がつかはれてしまつたが、やがてみんな棄てられてしまつた。座蒲團の下のが、辛うじて私の手にのこることになり私はそれを、ふたたび胸の中にひそませて持ちかへることができた。

私は、白根山の短冊を自分の書齋の壁紙に、畫鋲で上下をとめておいた。殺風景な私の四疊半のひろさのバラック建ての洋館に、何かしら沁々したうるほひを、ただよはせてくれたやうに思つた。

「郊外に、いい家はありませんかね。」
　原稿の用事で出かけた私に、葛西さんは或る日、さうたづねるのであつた。
「世田谷なら、ないことはありません。」
　私は、友人にたのまれて、私の家の近くに三軒ばかりの貸家を見つけておいたので、おそらくまだ空いてゐるだらうと考へた。
「世田谷といふと、どこから行くの。」
「澁谷から玉川電車に乘つて四つ目の停留場に三宿といふのがあります。そこで降りて、しばらく歩きますが、まだ武藏野の名ごりのやうな雜木林ものこつてゐます。」
「これから、出かけて見ませう。見當がついてゐれば、無駄足をせずにすむだらうし……。」
　そんな話から、私は葛西さんを案内することになつた。岡村君といふ青年が

城館にゐて、葛西さんの身のまはりを世話してゐたが、この人も、いつしよで
あつた。おハナさんのすがたは見えなかつた。鎌倉の自分の家へでも行つてゐ
るのであらうと私は思つた。

「岡村君は、廣津君の藝術社にゐた人ですよ。」

葛西さんは、さういつて私に紹介した。藝術社といふのは、廣津和郎氏が震
災前に經營した出版社で『武者小路實篤全集』を刊行してゐたが、あまり上首
尾にはいかなかつたやうな風評を私も耳にしてゐた。

世田谷は震災後急に住宅がふえて、ひらけはじめた郊外で、細身のステツキ
に鳥打帽の葛西さんを先頭に、私たちは、のびりした心持で歩いたが、いくら
か風が出てきて、春のほこりを浴びた。

私の見當つけた家は、紅瓦の、文住化宅といふのには少し安つぽかつたが、
家賃も格好であつたし、書きものをする人にとつて、あたりの環境も閑靜であ

つたので、すすめたわけなのだが、
「赤い屋根ですか。」
と、葛西さんのいつた口振りでは、そのモダンぶりが、ほんたうは氣に入らないやうでもあつた。
三宿の停留場を北に折れて、しばらく歩くと山元オブラート工場といふのがあつて、そこから多聞寺橋をわたり、下流が目黑川となる上水に遡つて行くうちに、貸家の札を下げた一軒の平家が、目にとまつたのである。
それは隣りに金物店を出してゐる、實は大工の家の貸家で、せまい庭にセメントの池などある、小ぢんまりした新築三間の家であつた。近くには、原つぱもあり、新らしい安普請の家がぼつぼつ立ちかけてゐて、新開地といふ感じはまぬかれなかつたが、ここまでくると、空氣には、すがすがしいものが多分にあつた。

建てたばかりで、誰も入らないのが、葛西さんの氣に入つた。
「これに決めませうや。」
「文化住宅も、見るだけは見てもいいでせう。ここからなら近いですよ。」
「いや、これでもういいぢやないの。」
私たちの會話をきいてゐた、大工さんのおかみさんといふ人は、木の香のする雨戸をくりひろげて、日あたりのいいといふことを、說明した。
かんたんに、きまつてしまつた。
「佐佐木君の家へ、ちよつとよつてみますか。」
「どうぞ。」
そこから小さな橋をわたると、私は小高い雜木の丘を指さした。
「この上です。」
「近くていい。」

牝牛が二三頭よりゐない小さな牧場が、川のふちにあつて、その前の小松の疎林から丘をのぼるやうになつてゐた。

そこまでくると、葛西さんは、枯れすすきの草原に足をふみ入れて、小便をしながら、

「いまの家、安くていいぢやありませんか。」

私も岡村君も、うなづいた。

「それに、下宿屋ぢや學生がゐて、酒を飲むにも都合わるいし、子供がハナ子にできたとなると、まさか窓へおしめも乾せませんしね。」

白い歯を出して、葛西さんは笑つた。おハナさんが、西城館に見えないのは、鎌倉へ行つて留守なのではなく、女の子を産んだからだを、下宿の一室にやすめてゐたためであつた。家がきまれば、ともども引越してくるのだなと、私ははじめて思つた。

原つぱを斜にかけあがつて、私はわが家に葛西さんを迎へ入れた。
「お父さんはゐないの。ゐると、こまるな。津輕の先輩としての挨拶をしなくてはならないから。」
「ゐません。」
「お役所へ行つてゐるの。」
「年老つてゐますが、元氣でつとめてゐます。」
「いくつでしたかね、お父さんは。」
「六十二です。」
「それぢや、まだまだ。」
私の書齋に入ると、
「しづかな、いい部屋ぢやないの。これなら勉强できる。」
といつて、葛西さんは、本棚だの油繪の額など打ちながめてゐたが、やがて

壁紙の片隅にその眼が、ぴたりととまつた。白根山の短冊があつたからである。

「これは。」

何やら腑におちぬ面持であつた。無理もない、本人はおそらく、私に手渡したおぼえはないであらうし、ちよつと首をひねつて考へてゐたが、

「いけませんね。」

いつかの、酔ひながらこれを書いた時のことを、ひそかに想起し、何やら思ひあたる節があるといつた風である。

「…………………。」

私は、にやにや笑ふより方法がなかつた。

「こんどは、きつとうまく書くから、これは棄ててくれませんか、ほんと。」

「まあ、それはそれ、この部屋にも一枚ほしいですから。」

「こまつたなあ。」

そこへ、私の母が、ありあはせの葡萄酒を持つて入つてきた。挨拶のあとに
「文學をやつていかうとしてゐますのですが、どうぞ、よろしくおねがひいたします。」
母はそんなことまで、いつた。
「いやいや、佐佐木君などは、まだ若いから、これからですよ。勉强も經驗も……。」
グラスについだ眞紅の液のかげを、春の夕陽がレースのテーブル掛けの上に投げかけた。籐椅子などが居心持をわるくしたのか、葛西さんは、へんに落ちつかないやうすで、
「澁谷へんまで、送つてくれませんか。散歩のつもりで、それに、引越しときまれば、その前祝ひをしたいし……。」
と、私を誘つた。私の父が歸つて來ないうちに、外へ出ようとする氣配もい

く分あつたやうである。

立ちかけた葛西さんは、ふたたび壁間の短冊を右手で指さしながら、

「これは、とりませうや。」

今、かへしてしまつては、いつまた書いてもらへるかわからないので、私は

「かはりがいただけたときには、いつでもかへします。」

さういつて、客をおくり出すと、急いでドアを閉めた。そのやうすを見て、つれの岡村君は微笑をもらした。

「僕も、近々に三宿の住人になりますから、よろしく、どうか。」

かへりに、葛西さんは玄關で、私の母にそんなことをいつて、ていねいに挨拶すると、鳥打を片手に原つぱに立つた。私たちの飼つてゐるポインターのエスが尾をふつて、すでに、どこかへついて行かうと待ちかまへてゐた。川べりに下ると、借りることときめた家を、もう一度外がはから見ることにした。

貸家札がいつのまにか剝がされてあつた。

岡村君は、何か用事をいつけられて、澁谷の終點まで乘つていつた。私は葛西さんと二人、道玄坂上で下車した。酒をのむによい家を私は知らなかつたが、一二度きたことのある鳥屋の、盛り鹽をした石たゞみの上に立つて、

「こゝは、どうでせう。」

「ぎんねこ――鳥屋なら、いゝ。」

はやる家だつたが、まだ時間が早いせゐか、しづかであつた。

一本二本と銚子が卓上にならんだ。そのうちに、隣りの座敷に三味線が鳴り出した。

「若い妓のお酌も、いゝでせうな、一人よんでくれませんか。」

と、葛西さんが女中にいつた。やゝて入つてきた細面の妓の帶の間へ、葛西さんは、紙にくるんだ一枚の五十錢銀貨を無理に押しはさんだ。

「おしるこでも、食べなさいよ。」

そして、私を見て笑つたが、何のわだかまりもない、朗らかさであつた。

「これで、僕も久しぶりで一軒の家に住める。世田谷ずまゐも、いろんな意味で、道をひらくきつかけになるかも知れないな。おたがひに藝術の仕事なんか、思ふやうにはいかないもんで、どうなるか先のことなど、わかつたもんぢやないんだ。」

いつしか窓の外には、夜がしのびよつてゐた。そして酔ひもおのづから加はつていつた。

數日の後、葛西さんは、本郷の西城館を引きはらつて三宿へ引越してきた。生れたばかりのユウ子を抱いたおハナさん、それに岡村君もいつしよであつた。大正十四年四月のことである。

第二章

三宿へ移つてからの葛西さんの、その日その日は酒の連續であつた。起きると御飯前の一盞がはじまり、そのまま、ひるにつづく。雜誌記者が原稿の依賴や督促にくると、その訪客を相手に、藝術の話、人生の話がおのづから肴となつて、一本もう一本と、はてしもなくつづくのである。

客がかへつて、ひとりになると、葛西さんは北側の窓ぎわによせた机に向ふのであつたが、ひろげられた原稿紙には、冒頭の一行ぐらゐが書かれてあるき

り、いつかうに筆のすすまないまま、いく日もたつてゐる。

兩眼をしづかに閉ぢ、萬年筆を握りながら想を錬ることしばし、思ひ出したやうに、かたはらの盃を手にしてから石に刻みつけるやうにして書きはじめた。しかし、すぐにまたペンをおいてしまひ、肩をもみつつ、ふたたび想を錬るかのやうに頭をぐるぐるまはし、生れ出ることばを、しきりと摸索するのであつた。この調子で机に向かつてゐたので、電燈がともるころになつても、やつと一枚たらずより書けない日があつたわけである。

『改造』『中央公論』といふ一流の雑誌が、しかし好んで、葛西さんの遅筆を督勵しつつ、その作品をもとめた。擔當の記者は、だから三宿へくるときには、かんたんにかへれないことを覺悟してゐるらしく、みな、じつくり腰を落ちつけて、盃をうけながらの居催促に心をくだいた。酒をたしなまない記者ではものにならず、また、あまりにたしなむひとは、かへつて、ともども酔つてしま

ふので、それだけ仕事がおくれるといふ結果を招いだ。さういふ中にあつて、私も『新潮』のために、すでに早くから一篇を約束し、督促も怠つてゐないつもりであつたが、順番は容易にまはつて來なかつた。

私は出勤の途次、葛西さんをたづねて原稿を催促したが、朝から起きてゐるときには、もう酒がはじまつてゐたし、酒がはじまれば「もう一本だけ」がくりかへされて、出社にさしつかへるのでなるべくかへりに立ちよるやうにした。

女兒をおぶつたおハナさんが、豆腐を買つてきて、

「これ、どう切るんですか。」

と客の前に鍋ごと持つてくることがあつたが、

「豆腐はちやんと切つてから持つてくるもんだ。やつこならやつこのやうに。」

さういふ葛西さんは、もちろん醉ひも手つだつてはゐたが、おそろしく不機嫌で、頬にたへぬといつたかたちに見うけられた。客人のあるときは、葛西さ

んは、何かしら、ことさらに客を引きとめるために、氣をつかつてゐるところがあつて、それだけに、この家の中によどんでゐる、けはしい雲ゆきが、それとなく察しられて、客はほんたうに、落ちついて、しみじみと盃をうけることができないやうな、へだたりを感じないわけにいかなかつた。健康もすぐれなかつた。そのうへ、物質的にも樂ではなかつたやうであるが、三宿へ引越すことがきまつた晩に、澁谷の料亭で、これから道がひらけるやうになるかも知れないと、ほのかながら展開を豫想されたことが、事實はかへつて暗鬱の方向へ生活がかしいでいく結果となつた。

さういふ中での創作の仕事は、なかなか思ふやうにすすまなかつた。つい、癇癪がおこり、酒にひたるより方法がないものやうに、そして酒にひたることが、いはばこの生活の中で、ひとつの救ひの道ともなつてゐたやうである。

醒めてゐるときの、つかれも憂鬱さも、だから醉ひがほのかに全身にめぐつ

てくると、ぬぐひ消されて、潑剌とした生氣がよみがへつてきた。
私は文壇の諸作家を仕事の關係から、いくたびか訪ね、その書齋を興味ふかく見てゐたが、私の知つてゐるかぎりでは、葛西さんのやうに書齋らしいものを持たず、その藏書もほとんどないにひとしく、本箱すら所有してゐない人を知らない。下宿ずまゐの文學靑年でも、もつと本を持つてゐた。
床の間にのせた將棋盤の上に、二三の寄贈雜誌がのつてゐるだけで、机の上には原稿紙と文鎭と一本の太い萬年筆よりあがつてゐないといふ簡素ぶりであつた。
その將棋盤も、めつたにつかはれることがなかつたが、何だつてこんな道具をそろへたのか、私も奇異に思ひながらながめた。實は、それが西城館にゐたころの或る晩、葛西さんは例によつて、私をながらく引きとめて放さなかつたが、そのうちに、いつしよに歳晩の弓町の夜見世へふらりと出かけて買つたも

のであつた。道具屋の主人に向かつて、
「いいぢやないの。まけておきなさいよ。」
と、ユーモアたつぷりにいつて、たうとう値切つて買ひとることになつた。
「さあ、將棋を一番ささう。」
西城館へ引きかへすと、買つたばかりの新しい、しかしあまり上等でない駒を出した。葛西さんの將棋は、どのくらゐの腕前か知らなかつたが、駒のうごきだけ知つてゐる私よりは、はるかに上手であつた。
それつきり、私を相手にすることもなく、また私も、その將棋が持ち出されてゐるのを、つひぞ見かけなかつたのである。
そして、來る日も來る日も酒であつたが、來月こそはきつと間に合はせるといつて、のびのびにされてゐる原稿の督促に、私は或る日も立ちよつた。
すると、北窓をひらいて机をやや引いた位置に、葛西さんは、はだかで胡坐

をかき、盃を片手にしながら、口述筆記をさせてゐた。書き手は岡村君であつた。一言一句、酒盃をかたむけるあひだから、辛うじて湧いてくる文句を、これまた、とぎれとぎれに寫しとめるので、もはやよつぽど、おたがひに疲れてゐるやうに見えた。

「談話にしましたよ。これはあなたの方に、きつとあげますから。」

それは、『弱者』といふ一篇で、およそ二ケ月ほどかかつて、五十枚ほどの、この作者にとつては比較的長い作となつて出來あがつたが、これまた身邊を描いた心境小說であつた。

その間私は朝に夕に、出來た分だけもらふためと、あとの激勵のために立ちよつたが、どういふものか、私のかへつたあとの夜更けに、葛西さんは醉つては、らんぼうをしたやうである。

或る朝、出社のみぎり私が、催促のために葛西さんをたづねと、浴衣の胸を

びろげた葛西さんの兩眼は眞赤に充血してゐた。

「お茶を出したいけれど、これこのとほりの始末で、茶碗がないもので……。」

指された庭前を見れば、水の涸れたセメントの小さな池に、銚子やら盃やら茶碗やら湯呑やら皿やらが、めちやくちやに、たたきつけられて碎け散つてゐるのである。

「ハナ子、佐佐木君に氷をとつてあげたら。」

臺所にむかつて、葛西さんは、聲をかけた。

「朝から氷は、をかしいわ。」

おハナさんは、口の中で、なほぶつぶつ呟いてゐたが、下駄を突つかけて近所へ使ひにいつた。

やがて、氷イチゴが私の前に出された。

「お茶がはりに、ひとつどう。」

暑中ではあつたが、私はまだ朝の涼風が風鈴をゆるがしてゐる時刻に、すすめられるままに盛りあがつた氷の山を匙で砕いた。私の眼は、おのづから池の上にそそがれ、どんなことから、どんな風なさわぎがおこつたか知れないが、とにかくこの狼藉の跡から推して、ただならぬ情景が展開されたにちがひなかつた。わづか一夜のうちに、家中の瀨戸物がみんな粉微塵になつてしまふやうな空氣の中では、決して創作なんかできないであらうと、私は異色ある作家、郷土の先輩として葛西さんを畏敬してゐればゐるほど、氣の毒な思ひがされてならなかつた。せつかく世田谷へ家を見つけてあげても、これはかへつて妙な結果をもたらしはしまいか、何となくある一つの責めを感じた。しかし、この人にはこの人の生き方があり、暮らしの方向があるであらうし、それもこれも藝術に精進しようといふ修行のために課せられた試煉かも知れない――そんな風にも考へられた。

いつしか私の耳には、葛西さんが毎日のやうに、夜のあけ方まで酒ばかり飲んでは、どたんばたんとあばれまはるので、近所では、みんなこぼしぬいてゐるといふうわさが、次第に入るともなく入つてきた。

そんなさわぎを、物見高い近所の人たちは、いちいちとりあげて問題にしたが、また問題にするやうな人々が集つてもゐた。或る店などは、朝からカーテンをおろしたなりで、いつまでも商賣をせずに、買ひものにくる人たちに不自由をあたへたりした。夜ねむられないで困るといふことの、それが示威だつたのである。

さういふ近所近邊の中にあつて、葛西さんのためには、またと得難い味方となつた稀れに見る人があつた。それは、酒商信州屋の主人である。

信州屋は、葛西さんの家から通りを三軒ほど南にいつた角の雑貨店と店をならべてひらいてゐたが、近くでもあつたので、酒を葛西さんは、ここからとり

つけてゐた。

日にいくたび、そして夜中にも戸をたたいて酒を註文をする客の家と、信州屋の住居とは裏庭でトタンの生子板をしきりにして、隣り合つてゐた。信州屋の方では、葛西さんがどんな作風の人であるかはもちろん、文壇の名士であることなども知らなかつたにちがひないのだが、そこの主人は一癖ありさうな老人でもあつたが、ときどき裏からのぞいて、いつも机に向つては盃を干してゐる奇妙な隣人を、これはただの人ではないとでも思つたらしく、葛西さんのことばを借りれば、

「信州屋の老人も、自分が田舎で巡査をつとめたこともあり、恩給もあるしする人だけあつて、ただの酒屋ではないつもりなんでせうな。ひいては、僕のことも、善意に思つてゐるらしい。少くとも、この隣り近所の連中がいふやうには、のんべいの悪黨と思つてないやうですよ。」

そんな風なことにもなるのであつた。信州屋の主人の好意が、葛西さんに、ほつとする感じをあたへたことも事實であつたが、その結果は酒代や罐詰などの食料品の支拂をためるやうなことにもなつていつた。

突然、葛西さんは三宿から姿を消した。二三日すればもどつてくるものだと私は思ひ、日をおいて訪ねたが、やはり留守で、どこへ行つたのかわからなかつた。

「遁走かな。」

ひそかに、そんなことも私は考へた。『遁走』といふ題の作品がある如く、葛西さんは時にこの遁走を用ゐて、生活の一轉換をくわだてることがこれまでにいくたびかあつたといふことを、本人の話で知つてゐた私は、昨今の三宿のさまざまな行きかがりから、そんな風に思ひを馳せたのである。それに『弱者』

記した青年の岡村君も、瀨戶內海に臨んだ鄕里の方へかへつてしまつた。
あわただしい雜誌の仕事をしてゐた私は、夏の休みも加へて、二三日の小閑を得たので、どこかへ旅をしようと考へた。私は前年に葛西さんを紹介し「湖畔手記」といふ名作がそこで書かれた奧日光の湯元へ出かけることにした。
馬返から中禪寺湖まで徒步、そから馬車で戰場ヶ原をぬけて湯ノ湖のほとりに出た。海拔五千尺、晝なほ暗いと稱せられる白根山麓の湖畔にある溫泉旅館板屋に部屋を流したわけだが、私は葛西さんの名作にあやかつて「湖畔雜記」といふ雜文を書いて、萬朝報におくつた。その中に、およそ次のやうなことが書かれてあつた。……

硫黃が多いためであらう、すでに私の銀時計は色が變つてしまつた。さすがに靜寂である。今日は珍しく朝からの快晴、雲一つない山の溫泉は日光をあざ

やかに浴びてゐる、そこを數知れぬ赤蜻蛉が舞つてゐる。
鶯が啼く、鶺鴒が庭に來る。そして筧の水の音のみが間斷なきひびきである。
朝食後の一浴をすまして、今こそ都會をはなれて來てゐる感が深い。
ふだんなら、あの郊外電車だ。省線だ。神樂坂だ。そして忙しい雜誌社の、人との應接、原稿整理、校正、手紙――などの事務に疲れる。夜、わが家にかへつても讀みたい本は、いつまでも机の上に重なつてゐるし、書きたいと思つてゐるいろんな題材は、そのままどこかの隅に埋れてゐるといふわけなのである。それにしても都會人の生活は、何といふあわただしさのうちに今日も暮れ、明日も過ぎ去つていくことであらう。
私のゐるこの部屋は二階の一番奥で三十九番、八疊間であるが、ここが偶然にも、葛西善藏さんが去年の秋二ケ月ほども滯在してゐて、つひには血を吐いたといふ有名な「湖畔手記」を書いた部屋なのであつた。

晴洲といふのは誰であるか知らないけれど、その人の筆になる「嵐光可挹」といふ額がかかつてゐる。葛西さんは、さぞかし朝に夕に盃を手にしつつ、これを仰いでは、あの眉をよせ顔をしかめて、何事か考へるところがあつたかと思ふと、ちよつと愉快にもなつた。

宿のおやぢさんの話では、

「あの方はしかし、ずゐぶんお酒は達者ですな。ちよつと二升づつ毎晩でしたからな。」

といふのであつた。實際、かういふ仙境にきて湯にひたり、神經痛を病む葛西善藏さんは、あちこちからだをもんで、さて欄干に立てば、「白根山雲の海原夕焼けて」ゐるのだらうから、ちびりちびり盃をかさねて夜の更くるのを知らなかつたのも無理はない。白根山雲の海原夕焼けて妻し思へば胸いたむなり——この歌も、きつと、あのロイド眼鏡の底に眼をつむつたり、いくつにも折つ

た新聞紙の中に痰唾をはいたり、手の平をこすり合せなどしてゐるあひだに、忽然として唇頭をついて出たのであつたらう。

「葛西さんは、いま東京ですか。」

宿のおかみさんが私にきいた。私はしかし最近行方不明になつたといふやうな新聞記事のあつたことを告げていいかどうか迷つた。行方不明の　とは、もちろん葛西さん個人の行動ではあらうが、こんどのことについては、私も多少の關係があつた。

それは、家のことである。私はしかし、それについて、いま多くを語りたくはない。ただ葛西さんの酒が近方とうまく折り合はなかつたために、家主が、たまたま近くに住み、はじめのかけ合ひに立ちあつたといふことから、私のところへ足しげく、いろいろな苦情をいひにくるといふことだけを言はう。

だがしかし、私には葛西さんのいはれる――

「いろいろなものがあつて、それやこれやがいつしよになつて、僕を怒らすのだ。近所へ僕はいつどなり込んだか。さういふ意味では、むしろこつちが遠慮してゐるくらゐではないか。だから、交番の巡査を呼びにいかうといくまいとかまはない。交番の巡査は、僕の前で脱帽して、ていねいに口をきいたではないか。」

といふことばのうちに、ふくまれてゐる心境に、多少はうなづけるものがあるやうな氣もされるのである。

しかし、いまではもう近所の店でも、このあひだまでのやうに、夜さわがしくて眠られないからといつて、日中カーテンをおろして眠つてゐることもなくなつたであらう。

それにしても葛西善藏氏は、どこへいつてしまつたのか。上野から青森までの切符を買つたのだが、十一時の終列車に乘りおくれて、一夜上野公園のベン

チにすごしたといふところまでは、最近になつて私も耳にしてゐるけれど、さて、次の日あたり無事に北方へ向かつて旅立つたのかしら。

杳として消息がないのである。しかし、私は思ふ。たとへどこにゐようと、善藏氏は、やつぱりいつものやうに酒盞を手にしてゐるにちがひないし、いまごろは昨夜の醉ひで、まだ眼が赤いであらう。

今夜は空も晴れてゐるだらう。『湖畔手記』の間の片隅で善藏氏のために、盃をあげてその健在を祈らう。そして、善藏氏が好んで色紙に揮毫した古人の詩句――を

好是山堂無月夜

一天星斗闌干墜

とでも微吟したら!

ところで、當の葛西さんは、その頃は郷里の弘前に滯在してゐて、それが夏から秋のはじめへかけて、二ケ月以上におよんだのであつた。

旅に出た葛西さんが、弘前の女學校に教師をしてゐた石坂洋次郎氏の家に、ひよつくり鳥打帽のすがたをあらはしたことから、故郷での日ぐらしがはじまつた。それからは齋吉（さいきち）といふ一流の旅館の一室を宿にして、大菜（だいな）の漬物を肴に日に二升づつの酒をのむ日がつづくことになつたが、ほとんど毎日のやうに石坂氏も宿をたづね、またよび出されたりして會つた。

「葛西さんはひどく元氣がなかつた。」と石坂氏は『故郷に於ける葛西善藏氏』といふ短文の中でいつてゐる。「東京の生活がいきづまつたので、郷里の子供さん達や風景によつて、回復蘇生するつもりで試みた、いはばこれが最後の『遁走』であつたらしい。が結果はかへつていけなかつた。二た月以上もの間、宿の一室で酒ばかり飲んで暮すやうなことになつた。葛西さん自身が多少投げ出

した氣味もあり、いろんな事情も葛西さんを焦立せ、疲らせる風にばかり動いて行つた。葛西さんだけでなく、私までが、その二た月の間に強い神經衰弱にとりつかれてしまつた。結局、この二た月の間の目にみえる收穫といつては、
『われと遊ぶ子』といふ作品の題を得たにすぎなかつた。」
それから弘前での善藏氏のスナップを、つぎのやうに描いてゐる。

その滯在中のある夜、十二時頃だつたらう、街の散歩の途中、車をひろつて公園に駛らせたことがあつた。岩木山をみたいといふのだ。涼しい晩だつた。本丸の廣場で車から降りた葛西さんは、醉つた足どりでヒョコヒョコ前の方へ歩き出し、私がたつてる所から、白浴衣が朧ろげに見える邊でシャンと立ちどまつた。そして、背伸びをしたり、首を右左にかしげたり、さうかと思ふと腰を折つてなにかを覗くやうな恰好で、晴れわたつて夜空の中にくつきりとみえ

る岩木山を眺めた。

「ふーん。ふーん。はあ。……」

一人でしきりにうなづいてゐた。こんな山の觀方つてないなあ、と私は思はず微笑して、寒いので身體を縮めながらしやがんで待つてゐた。車やたちもけげんさうにみてゐた。右へ五歩ぐらゐ歩いて、位置を變へて眺めたり、またもとの所へかへつたり、そんなことを二三回やつて、

「もういい……」

と、私達の所にかへつてきた。……

その翌日宿へ訪ねると、

「岩木山の歌をつくりましたよ」

とホクホクいつてみせてくれたのは、岩木山はきれいな山だ、がそれはあたりに大きな山がないからで、よくみるとつまらない山だ、といふ意味の恐ろし

く理窟つぽい下手糞な歌だつた。葛西さんの說明だと、そのうらには、津輕人も岩木山同樣一寸見にはちやんとしてゐるが、大きな所がないといふ意味を諷したものださうで、私はきいてゐる間にウフウフ吹き出してしまつた。

その歌よりも、いま私の目に殘つてゐるのは、洗つてまだかわかない髮をかきあげしながら、岩木山を眺めてゐる葛西さんの後姿だ。鳥打帽子をもつた片手を兵古帶の間に挾みながら。——

やはり「遁走」の故鄕行であつたのである。しかし、葛西さんは、おそらく最初に豫期したやうな轉換の效果をもたらさないで、ふるさとの日日は、まことに味氣ないものとなつてしまつた。故鄕の山河も人情も、いらだたしい作家の蝕んだ胸をいたはつてはくれなかつた。

弘前から五里ほど離れた碇ケ關村が、ほんたうは葛西さんの鄕里であつた。

また、久しく別々にくらしてゐる妻子は浪岡にゐるのであつた。かうして、妻子のゐる田舍町から、ほど遠からぬ城下町の一流の旅館を根城として、酒につぐに酒をもつてするやうな佗しい旅の疲れのまま、葛西さんは空しく三宿の家へ舞ひもどつてきたのである。しかも、赤ん坊をおぶつて、はるばる弘前まで追ひかけていつたおハナさんをつれて……。

机の上の原稿紙には『われと遊ぶ子』といふ題だけが、インクの色も黒く古びて、埃を浴びてゐた。

「結局のところ、この、われと遊ぶ子――といふ題目だけでしたね。こんどの遁走は、へんなものにはなつてしまつたが、しかし、僕としては、ああしなくては、をさまらなかつたんだ。」

疲れてゐたが、それでも元氣を見せて、そんな話をした。また

「豫言者は故鄉にいれられず――ほんとにさうだ。故鄉はまるで僕を闖入者あ

つか　にするんで弱りましたな。それでも洋次郎君は、ちやんとやつてくれたし、ずゐぶん迷惑もかけたやうなことになるんでせうが、故郷といふものは、こまつたものだ。まあ、僕なんかは、すべてが變則で、流儀もちつとはちがふんで、やむを得ないとしても、あの弘前の平穩無事といはうか、保守姑息のしきたりには、かなはんですよ。君なんかも同じ弘前人だらうが、それでもあなたなどは、弘前が本籍といふだけで、札幌や青森にそだつたから、同鄕人のおたがひに、かみあふ妙なものを知らずにすむんだ。」

葛西さんは、酒盃のあひだに、さうも語り、朝日に火をつけた。聞くところによれば、鄕里では、葛西さんのことをあまりよく知らないやうであつた。それは久しく東京に住んでゐるせゐもあつたらうが、何んといつても、講演をするでなし、人とつきあひも好きでないし、創作に骨身を打ちくだくことと、酒ばかりに浸つてゐるかたちの葛西さんであつたから、それも無理からぬことと

もいへよう。

「同郷人だから、同郷人だからといふのは、僕ほんとはきらひでしてね。なんだかヤバッイ(きたない)ものが、そのなかにあるやうな氣がされるんで……。」

所詮、故郷がなつかしいといふことなども、頭の中だけの話で、その實は灰色の霧につつまれた、眠つたやうな生活しかくりひろげてゐないふるさとの人人を、葛西さんは、むしろ、いとはしい、つまらないものに感じてゐたのであらう。

「石をもて追はるる——そんな結果になつてしまふんですね。」

と醉眼をしばたたいて、葛西さんはよくいつたが、內心では、それほどに鄉里といふものに執着を抱いてゐるわけではなかつた。

何はともあれ、葛西さんが世田谷の家へかへつてきてくれたことで、私はほつと安堵の胸をなでおろした。たとへ、それからまた、家の引越をしなければ

ならないやうな、小さなさわぎがもちあがることになりはしたとしても……。
それに、私には早く葛西さんに歸京してもらひたい、一つの理由があつた。それは、私の處女作である長篇小說が新潮社から出版されることになり、發賣の日も迫つてをり、かたがた出版記念會が先輩友人諸氏によつて近々のうちに催されることになつてゐたし、發起人の一人に、鄕土出身の先輩として葛西善藏の名も列ねられてあつたからである。
そして私は、葛西さんが若し弘前からかへつて來ないあひだに、會があつたのでは、何かしら肝心な杭の一本足りないもどかしさを感じてゐた。それほどに、私は葛西さんに、何かとかばつてもらひたかつた。
「出版記念會は、いつになつたの。」
葛西さんも、かねてその日は、きつと出席させてもらふといつてゐただけに、身を入れて、さうたづねた。

「今月の十三日に決まりました。會場は傳通院前の偕樂園です。」

「それはいい。會費は一人いくらといふことに……。」

「それが七圓といふのですから、僕らがけ出しのものには、分にすぎた贅澤のやうに思へますし、集つてくれる人數にも影響しやしないかと考へてゐます。」

「幹事の人たちが、いろいろ相談して、さうなつたとすれば、七圓でもいいぢやありませんか。」

「はじめ、僕は一圓か二圓くらゐで、どこかおでん屋の二階あたりでやつてはどうですかと幹事の方に、さう申したのですが、中村武羅夫氏が、殘暑の折で日本料理は腸チフスにでもなると危險だといはれ、洋食は腰かけるので落ちつかない、支那料理がよいと主張したので、ほかの方も、それもさうだといふことで、決まつたのです。」

「武羅夫さんのいひさうなことですね。しかし、どうせ作家としての第一歩を

ふみだす晴れの祝宴なら、豪華な方がおたがひに氣持がのびやかで、いいぢやありませんか。僕もそれに賛成だ。」

さういつて葛西さんは、なぜかしきりと私の服裝をながめまはしてゐたが、

「ところで、弱つたことがあるんだ。それは、實のところ、あなたの一世一代の晴れの處女作出版記念會に着ていく着物がないんで……。」

「べつに、四角ばつた會ではないのですから、そのままで、どうぞ。」

私としても、物々しいさわぎはすべきでないと思つてゐた。すると、葛西さんは、しきりと考へこんでゐたが、

「それでは、かういふ風にしてくれませんか。あなたのいま着てゐる、その鐵無地の單衣羽織を僕に貸してくれて、あなたは洋服なり紋附を着るといふことでは、どうかな。」

「こんなもので、いいでせうか。」

「いや、上等だ。着物はセルならあるんだから、それに袴でも穿きませうや。」
「僕は紋附にしませうか。」
「それはその方が、ぴんとくる感じですね。佐佐木家の紋……多分四ッ目でせうが、それを着なくちや、恰好がつきますまい。おーい、ハナ子、千之君が羽織を貸してくれることに決まつたよ。もう着物も心配はいらないよ。それより早くお酒を取つて來ないか。信州屋がくずくずいふのなら、三河屋でもどこでもかまはない。近所の人の、くだらない井戸端會議に氣をくさらしても、しようがないぢやないか。」
「僕は、もうかへりますから……。」
「いや、どうせ僕一人でもやるんですから、まあ急がずに、ゆつくりしていきなさいよ。いろいろ話をしてゐるうちには、僕の『われと遊ぶ子』も、何とか書き出しの文句が生れてくるかもわからん。誰かゐてくれないと、武勇傳をは

じめさうで、自分でも何かしら、おつかない感じがするんで……。まあいいちやないの。」
そんな風にして、私は、ずるずると長居をさせられることになつてしまふのであつた。
幌蚊帳の中には、ユウ子がすやすやと眠つてゐた。

第三章

私の處女作『憂鬱なる河』の第一卷『北國』の出版記念會が催された大正十四年九月十三日は、七十年來の豪雨であつた。雨の中を、早目に社をひけた私は、一たん家へかへり、葛西さんを誘つて、ともども小石川傳通院前の偕樂園へ急いだ。豫定のとほり、私が父の紋附を着用し、葛西さんが私の單衣羽織を引つかけて……。

「けふは父の命日で朝からいつぱいやつてゐましたよ。」

電車の中でも葛西さんは醉つてゐた。

會場には、すでに作家、批評家、詩人、記者の顔ぶれが集つてゐた。日本建築に支那趣味を加へた偕樂園の廣間には、鍵の手に食卓の準備がととのへられてあつた。これまで私は合評會の會計係としてこの料亭に、いくたびかおもむいてゐたので、顔見知りの女中たちもいく人かあつたが、みづみづしい日本髮に結つた姐さんたちも、當夜の主賓が若い私であつたのには、ちよつと眼を見はるやうなかたちなのを、それとなく感じて、私は心ひそかにほこらし　を抱いた。

それといふのも、篠つくやうな大雨の中を私のために集るものおよそ四十餘名、稀れにみる盛會で、弱冠の私にとつては光榮のかぎりであつた。

德田秋聲、芥川龍之介、葛西善藏、宇野浩二、中村武羅夫、藤森成吉、生田春月、加能作次郎、久保田万太郎、福田正夫、岡田三郎、牧野信一、池谷信三

郎……そのほか流派傾向は別として、多數の來會者の、或ひは盃をふくんでゐるすがた、或ひは何事か談論風發してゐる樣子、醉つて呵々大笑してゐる横顏等々が、フラッシュバックのやうに、私のいくらか上氣してゐる眼に映じた。

私は南畫の軸のかかつてゐる床の間を背負つて、左に德田秋聲氏、右に葛西さん、つづいて生田春月氏といふ席の間にすわらせられ、ありがたいばかりにあたたかく介添されて、すすめられるままに盃をうけた。

ちなみに私の處女作といふのは、もとより年少客氣の熱で書いた、いはば私の生ひ立ちの記のやうなもので、作品として問題にすべきほどのことはなかつたであらう。誰かが後に、そんな盛會だつたのは幸運だよ、編輯記者の餘德といふべきだと、そんなことをいつた人があつたが、それもほんたうのことかも知れない。

島田清次郎氏が大作『地上』を提げて文壇に華々しいデヴューをした後では

あり、折からやうやくプロレタリヤ文學が擡頭しはじめて『文藝戰線』が活躍してゐた時代であつたから、イデオロギーのない、いい意味にも惡い意味にも無垢な少年の思ひ出の記が、ちやほやされるわけはないのだが、私自身にとつては、さういふ華かな會合、そして、文壇時事グラフに掲載されるはずの記念撮影をされたりしてゐると、いろいろと感慨深いものがあつた。

私は、やがて三部作として完成しようといふ大望を抱きながら、その第一巻をそれでも前後三ヶ年を費して、三たび稿を改め、五百枚足らずのものにまとめあげた。はじめて私が原稿を文壇人に見せたのは生田春月氏で、その時のは第二稿であつた。『相寄る魂』といふ自傳的長篇の起稿を思ひついてゐた二十九歳の春月氏は、十九歳の私に向かつて毀譽相半ばする批評をした。私は二十歳の冬、當時木曾にゐた父の官舍で、さらに書き直したが、これが二年ばかり宙にまよつて日の眼を見ないでゐた。春月氏によつてそれが、新潮社にとどけら

れたことを知つたときには、私はてつきり本になるものだと思つた。ところが何といふこともなしに、原稿が私の手元にかへつてきたのである。私も『文章倶樂部』の訪問記者として、いくぶんヂャーナリズムの空氣を吸つてゐたから、賣文渡世の至難を喞つた。

震災後『新潮』記者となつてから、某書肆から出版の運びに話がついてゐたのが、ゆくりなく、ふたたび新潮社へもどつて、ここにはじめて世に出ることとなつたのである。

私の自傳を基調とする處女作一巻の出版記念會において、二十四歳の私が、その夜のおそらくは一番の年少者ではなかつたかと思ふ。或ひは私のスタートは惠まれてをり、かついろんな意味で早すぎたかも知れない。しかし當人の私にして見れば、それでも數年の苦勞はしてゐた。それに周圍にそむいて文學を志した私としては、何らかの恰好をつけなければならない狀態にもあつたので

ある。

だから私は、煌々と支那風の照明のかかやく廣間の中央に、父の紋附を羽織つてきちんと坐り、文壇諸家にとりかこまれながら、少からず上氣してゐたやうである。

葛西さんは、その師匠格の秋聲老に向かつて、

「千之君のために、何か一言。」

と、しきりにたのんでゐたが、

「それは、僕より葛西君が適任だ。」

と、嗄れた調子で譲つてきかなかつた。

「では、ひとつ……。」

それとともに拍手が起つた。そこで葛西さんは、

「まづ一杯。」

と、脚のついた盃を私の前にさしのべた。私は銚子をとつて、なみなみと注いだ。ぐつと、ひといきに、それを飲みほすと、よろめくやうに立ち上つた。五分刈頭に無地の羽織、髭もきれいに青々と剃られ、どこやら禪坊主のおもかげをさへたたえて、さて開口一番、吃々として、何やゝ呂律のまはらぬ調子で、歌のやうなものを口ずさんだ。

「岩木の山の高く見ゆるが哀しい」

そんな意味のところだけが、聽くもの耳にのこつた。

そして、破顔一笑、おもむろに話し出された内容は、

「いまの歌のやうに、僕たちの郷里の岩木山といふ山は、一名津輕富士ともいはれ、まはりがひろびろとした津輕平野の中にあるから、高く見えるのだが、その高く見えるのが哀しい。佐佐木君もこれからしつかりやつてもらひたい。」

といふことに煎じつめられてをり、それをとぎれとぎれに、しかし力をこめ

ていふのであつた。緣の太い眼鏡が鼻のさきまで、ずりさがつてゐた。挨拶ををはると、葛西さんは席にすわつて、盃を私の前に差し出した。私は鳴りやまぬ拍手の音をききながら、感謝をこめて酌をしたが、それがこぼれて葛西さんの羽織にかかつた。

葛西さんは急いで、膝の上にひろげてあるハンケチで拭きながら、ちらと私の顏をのぞいて笑つて見せた。その羽織が實は私のであつたからであらう。芥川龍之介氏は風邪氣味とかで、中途で席をはづしたが、縞の和服に角帶をきゆつと結んだ颯爽ぶりを、私は舞臺面の人物のやうに醉眼で眺めた。

閉會後、久保田万太郎氏が、酒が足りないやうですからといつて、金十圓を幹事の一人である私の友人にわたした。それからまた、ひとしきり盃の應酬がさかんになつた。夜も大分ふけ、しかも雨はなほやまず、風さへ出てますます強く降つてゐた。

その雨をついて、葛西善藏、生田春月、福田正夫の諸氏と私、それに私の友人もまぢつて、二次會をするのだと、氣負ひこんで四谷の料亭に向かつた。
みんな相當に醉つてゐた。それでゐて、まだいくらでも飲みたい氣分であつた。そんなに醉ひながら、しかも葛西さんは終始、
「今夜は千之君の晩だから。」
さういつて、私をいたはり、かばふのであつた。座蒲團の位置にしても、千之君はそこ、春月氏はそこ、僕はここ、と一人一人を坐らせたり、それから知らない顏ぶれには親友ならどこ、學校仲間ならどことといつた風の斡旋ぶりをしめした。
私の作品を最初に讀んだ人として、ことのほか春月氏に敬意を表しながら、葛西さんは愉快に、しかも嚴肅に酒を酌んだ。
「木曾をどりを、もうはじめてもいい時分でせう。」

葛西さんにいはれて、紋附をぬぐと、私は故鄉の盆踊を知らぬままに、ひとつおぼえの木曾のなかのりさんを、臺ぶきんの頰かぶりをしながら踊つた。

〽こころナア　なかのりさん
心細いよ、ナンチャラホイ
木曾路の旅は　ヨイヨイヨイ
〽笠にナア　なかのりさん
笠に木の葉が　ナンチャラホイ
舞ひかかる　ヨイヨイヨイ

みんなが歌ひ、囃しを入れる中に、葛西さんは笑ふでもなく歌ふでもなく、じつと私の手つき足つきを見ながら、盃をふくんでゐた。

ふたたび雨の中をかへることになつた。そのとき、玄關で雨外套や帽子を着せてくれた女中が、お忘れものといつて駈けてきて、私の紋附を葛西さんの肩

にかけたのである。

するど、

「これは、僕のぢやない。」

といひながら、四ッ目の紋を見とどけてから、葛西さんは笑つた。

「それでは、こちらですか。」

女中は無地の羽織を持つてきたが、紋附を着るにふさわしいと今宵の葛西さんを見てとつたことは、その親分ぶりから察して無理のないところだつたので

私も笑つた。

「いや、どつち道、同じことどぢやないの、ねえ千之君。」

葛西さんは、さういつて紋附を、うやうやしくささげて、私によこした。

自動車は雨の中を郊外へ走つた。

葛西さんは引越しをしなければならないやうなことになつた。それも、壁一重となりあはせた大家の大工から追ひ立てを食はされるやうな成りゆきからの移轉であつた。三百に入れた、萬一期日までに立ちのかない場合には家主の方で荷物を保管していいといふ證書が物を言ひさうな險惡な狀態さへかもしだされて、本人の葛西さんもおハナさんと赤ん坊をつれて、どこか山の中へでも逃げ込むことになつても仕方ないとまで心に思つたのだが、友人にはかつた無心がやはり間に合はなかつたのである。しかし酒商信州屋の老主人のなだめながらの世話によつて、どたん場へきて、とにもかくにも、半町とはなれてゐない埋立地のごみごみした中の長屋の一軒に荷物がはこばれた。

それはトタン屋根の二軒長屋の一つで、二疊、四疊半、六疊の三間ではあつたが、壁はくづれ、疊も破れ、唐紙もいたんでゐた。

「壯士なんかが現はれましてね、靴のまま部屋へ入つて、わざと亂暴に佛壇の

箱を床の間に投げ出したり、かへりに玄關に貼つてあつた名刺をむしりとつて、なんだ、あついがゐた家か……そのあとへ葛西さんが入るとは、これも因緣だな——そんな舞臺詞めいたことをいつて、前の人の名前を千切つていきましたよ。多分、僕みたいに、迷惑かける人がゐたんでせうな、このあばら家に。」

葛西さんは、そんな風にいつて、荒涼とした家の中を見まはしたが、鼻のあたまに傷がついてゐて、なほりきらないでゐた。酒のうへでの怪我であらうとは一應考へられたが、きいてみるとかうであつた。

葛西さんは荷物が片づくあひだ、無心をたのんだ友人と、近くの蕎麥屋で酒をのんでゐると、半町ほどはなれてゐるとはいへ、近所のこととて、引越しの内情を知つてゐる長屋のおかみ連中が、葛西さんと壯士とのあひだに、何かひともんちやくおこるだらうといふ物見高い眼つきで、路次に出てきては話し合つてゐた。

ところが、壯士も案外おだやかにかへつたので、いくぶん氣のぬけたかたちであつたが、それでも、今にきつと醉ひがまはつて騷動になるにちがひない。あの酒屋の爺さんも、たいへんな代物を引つぱつてきてくれたものだ――そんな風な氣勢が多分にうかがはれるのであつた。

さうかうしてゐるうちに、葛西さんは友人とのんでゐた酒のせゐもあつて、だんだん興奮してきて、もつぱら自分の不幸と不遇をうつたへ、

「住んでいくといふことだけでも、自分のやうな人間には、どんなにむづかしいことであるか知れない。そして、自分の仕事なんていふものは、ちつとも信じられやしないんだ。」

と、なげくうちに、蕎麥屋で聲をあげて泣いてしまつた。

それか、友人におくられて引越したばかりの家にかへつたが、何やかやが一時に、頭にカッときた感じであつた。友人が醉つた葛西さんを押しこむやう

にして、
「ここは君の家なのだ。何もこわがることはない。入つて寝たまへ。わかるよ、だが、まあ、おとなしく入つて寝てくれないか。おれまで、かなしくなつてしまふから。」
友人は、さういつて玄關の硝子戸を閉めた。謔西さんは、せまい三和土（たたき）の上にうづくまるやうに坐つた。
すると、近所のおかみさん連の、がやがやいつてゐるなかに、おハナさんが荷物を片づけてゐるのを見ると、はげしいものに突きあたられたやうに、友人の名を連呼しつつ、立ちあがるや否や、いきなり顔を硝子戸にぶつけてしまつたのである。
硝子が何枚か破れ、そして顔と兩手に傷ができた。
「ヨードホルムだのガーゼだのを、引越の手づたひにきてゐた信州屋の若い衆

が藥屋から買つてきてくれたんですが、とにかく洗面器で顏や手を洗つてゐると、サーベルの音をさせて巡査がくる。それついて近所の女たちがわいわいついてくるといふ始末なんで、ハナ子が出て、醉すぎたために、ころんで怪我をしただけですからと、さういふと、巡査も、さうでしだかと、さつさとかへつていきましたよ。おかみさん連の好奇心には、ほんとに閉口しちやふ。」と

葛西さんは、わづらはしさにたへぬやうに、眉をよせた。

「それからの日々は、酒を飮み、そして蒲團の中に藻繰り込み――一升平均ぐらゐ飮むのらしい。」と、作品の中にこの當時のことを葛西さんはみづから描いてゐる。實は、自分も、郷里から歸つて來て、今度こそは、氣を入れて仕事でもしたいつもりだつたのだが、追ひ立てを喰つたり、顏に疵をしたりしたので、すつかりまた氣を腐らしてしまつた。それにまた、丁度、持病の神經痛の季節にかゝつてゐた。眼が醒めると痛む。それを紛らすために酒を飮む――そ

れの繰返しだつた。自分は、一日のうちで、酒を飲んでゐる七八時間の外は、ことごとく寢床の中で過ごさねばならなかつた。が、神經痛、神經痛と自分は、この病氣を呪ふやうに言ふのであるが、若し、この病氣でも自分に出て呉れなかつたとしたら、自分の壽命は恐らく三四年前には終つてゐたのかもしれない。自分が、五六年前に全く偶然に、ある皮徽科の博士に左肺部に病障のあることを言はれて、執筆の休止を忠告されたのだつた。が、まだ、その時分には、自分の肉身やなんかの事情からしても、×博士の忠告を諾くわけにゆかなかつた。自分は、その時分、湘南地方のある山寺みたいやうなところの一室を借りて、自炊同樣の生活をしてゐた時分ではあつたが、自分は×博士の吩咐通りの規則正しい生活をして、何うにか病氣を抑へることが出來たのだつた。その後大地震で東京へ出て來て、下宿生活をしたり、またこの三宿へ來たり、さうした轉轉とした間に、自分のその病氣を護り劬つて呉れたものは、この苦しい神經痛

の外ないのであつた。絶對の安静——横臥——醫者が幾ら忠告して呉れても、僕にペンを持つことを禁じようとした醫者でも、決して出來つこのない命令を僕の神經痛が爲て呉れたのだつた。こんな馬鹿なことを言ふと、僕としては馬鹿のつもりゞないのであるが、馬鹿なことを言ふ奴だと思ふだらうが、自分としては、決して譃ではない。喀血も絶え、血痰も絶えて、この何年間の壽命を繋ぐことの出來たのも、あるひは、この神經痛のお蔭であるかもしれない。血を喀くことは痛くも痒くもないんだが、神經痛のはうは、さうは行かない。左背部全體の痛みである。自分は、ウン〳〵呻き、ほとんど泣きながら、十月末時分から三月一ぱい、それから入梅時、それだけの永い月日を酒を飲む七八時間以外には寢て通すのである。どんな病人だつて——つまり肺のはうの惡い病人だつて、靜臥療法では、僕にはかなはないと思ふ。——僕が、幾度か血を喀いたりしながらも、その病氣を抑へて呉れたものは、やつぱし、今が今、こん

なにも呪つてゐる神經痛といふ病氣であるらしい。さう思ふと、この頃は、この痛い、最後に僕を倒すであらう神經痛といふものも、幾分のなつかしさすら感じられるのである。

それにしても、それからの一年で、どれだけ酒を飲んだものでせう。日に一升として年に三石六斗あまり、一升五合平均とすればざつと五石、毎月四斗樽一本づつ飮んで來たわけである。」

これは『醉狂者の獨白』といふ作品の一節であるが、つづいてその中にS老人として出てくるのは信州屋の主人である。すなはち、

「S老人のことを佛だといひ、また、自分のやうな人間は、かうして酒を飲んで、半年一年とも分らない時に、飲めるだけ酒を飲んで死ぬ――これもみな二十年餘り酒の神樣に忠實であつた自分を、酒の神樣が愍れんで飮まして呉れるだらうとは思つたが、また、酒で生命を取られる慘めな運命のことを思ふと、

すべてが、自分の一生といふことが、皮肉なことになつて來て居るといふやうな感じに打たれることもあつた。

酒のために、自分が氣違ひになつたといふやうな噂は、何時頃から立つたものか、このことばかしは、自分もよく知らないのであるが、しかし、郷里ですら、親しい妻などでさへ思ひ込んだのかもしれないのだから、郷里の友達などが、さう思ふのにも無理はない。ある郷里の友人は、精巧な拳銃を僕に呉れた。といふよりも、僕に預けた。恐らく氣違ひに及物――さういつた氣持からであるかもしれないのだ。だが、僕は、そのピストルを使用しなければならないやうな、さういつたやうな立場には、全然置かれてゐないのだ。僕は、郷里の宿屋の部屋で、日に幾度となく、その装塡された拳銃を眺めては、松と石ばかしの庭に向つて居たやうなこともあつた。

つまり、その時分から、自分の狂氣といふことが、郷里や東京でも噂されれば

じめたものらしい。自分は、東京へ歸る時、そのブローニング銃とか何とかいふものを、竊と友人に返すやうに言ひ置い　來たのだつたが、東京へ來て、自分の書いたものを極端に惡口言ふ人間に、あの一發を見舞つてやりたいといふやうな衝動を幾度も幾度も感じたのである。あの山猫とも、鼠鼬とも言ひやうのないやうな、あゝいふ人間に對して、何うすることも出來ないのだ。文章とか、筆とか、決してそんな感じのものではない。己は己の藝術を作り、他人は他人で藝術を作り、大きい小さいは別として、つまりは、同じ畑の仕事をして行かねばならぬのだ。だから、他人のことを輕蔑するといふことは、法にないのだ。さういふ場合の用意としても、あのブローニングとか何とかいふやつがあつたらば。……

年の暮れのこと、門松のことまで、S老人は心配して呉れて、そして玄關の二疊には『山盛』といふ酒の四斗樽をつけて呉れた。自分の永い放浪生活の間

にも、珍しいことだつた。やはり、S屋で持つて來てくれた一升桝に、ドクンドクンと呑口から入れて、それを燗德利に移して飲むのが、樂しみだつた。外に何うといつた樂しみ、望みがあるといつたわけではなし、この冬を越したくない――越したいと思つても越すことの出來ないやうになつてゐるのだから――だから、自分は、S爺さんの酒ばかし飮んでゐたのだ。この冬を越せるか越せないか、もう一度血を喀いたら死ぬか死ないか、また、血を喀くものか喀かないものか、そんなことは誰だつて分りはしないと思ふ。俺は何よりも、自分の氣違ひになることを恐れてゐる。それは、抵抗しがたいものである。例へば監獄所があるやうに氣狂病院がある。同じやうに精神的な缺陷から來てゐるものと看ていいと思ふ。だが、それにしても、自分の頭腦のだん〳〵錯亂しかけて行くのを看てゐるのは、寂しい氣のものだ。」

……およそそんな風に述べられてゐるが、この作品は、のちに明らかになる

やうに、酒の合間合間に談話しつつ、しかも、この作家に心服しつつあつた溫厚そのもののやうな、いんぎんていちようの雜誌記者によつて筆記されて長時日にわたつて、できあがつたものだけに、いかにも酒中漫語の印象をあたへはする。しかし、當の葛西さんは、その漫語を、たとへユーモラスなものにしながらも、その精神――といふか創作の心がまへでは、すこぶる苛烈なメスで切つたり裂いたりしてゐるのであつた。それとともに、みづから醉狸州と名づけたやうに、多分に狸ぶりといはうか、化がしの術を心にくいまでに用ゐてゐることも見のがせない。そして、內容そのままが、とりも直さず身邊の事實であるかのやうで、さうでないものもあり、またその反對のこともあるが、たとへば郷里の旅館においてあらはれるブローニング拳銃の一件は、事實そんなことがあつたかどうか、これをつまびらかにしないのだが、たとへ事實でなくても、そんなものが飛び出したことに、葛西さんは少からずよろこびを抱いたであら

う。また、事實そんなことがあつたとしても、そのままのすがたでは書きとめさせてゐないやうである。空想と現實のいみじき混迷の霧に作者の魂は、いつしかロマンティックな夢想とともに、いざなはれていつたにちがひがない。

そこにまた、葛西さんの書くものの、一種玄妙な迫眞性と狸ぶりが、あざなへる繩となつて垂れかかつてゐるのだ。それもこれも、現實生活のやりきれなさが、ただひとつ、藝術に精進することに、すべてのかなめをおいてゐる生活ぶりの呼吸抜きとなつて、思ひもよらぬ虹を虚空に映し出して見せるのであらう。酒は病苦を蔽ひ、醉ひは人生の煩瑣を忘れしめたかも知れない。が、藝術もまた現實の苦々しい桎梏から救つた。だから、苦吟三昧の創作生活は、身をそぎ骨をけづる苛烈さを、みづから加へつつ、しかも、たのしいとなみであつた。或ひは、その苛烈さを加へ得へられるといふことによつて、たのしかつたともいへよう。

とにかく、『山盛』といふ文字が赤い牡丹か何かの花に刷り出された四斗樽が葛西さんの二疊の玄關に据ゑられ、異様な豪勢ぶりがそこにだけ放たれた。おそらくは、あの信州屋の老人が、藍に『山盛』と白く染めぬかれた生地の厚い前掛をちよつと帶にさしはさんで、運ばせたものであつたらうが、菰かぶりをそなへられるほどの勢ひある生活ではなかつた。日に幾度かの註文に、根をきらして運んだのである。酒代その他が、すでに相當の金額に達して拂はれずにあるにもかゝはらず……。その信州屋が、前の家の大家と壁一重であつたと同じ筆法で裏口三尺とはなれない垣一重にゐたことから、

「棄てる神、助ける神、鬼と佛が裏表に住んでゐるやうなものです。」

といつて、葛西さんは苦笑を禁じ得ぬかたちで、にやつとしたことがあつた。

それやこれやで、信州屋老人を「ほとけ」といつてもちがつてはゐなかつた。

第四章

大正十五年新年號の仕事として、葛西さんは『中央公論』に『われと遊ぶ子』といふ短篇を發表した。十四年八月號の『新潮』に出た『弱者』以來のこれが創作であつた。それにしても例の遁走におもむいた郷里弘前での滯在二ヶ月間に得た唯一のみやげともいふべき、題だけつかんだ創作が半歳近くの苦吟の末やうやく發表されたわけで、その間、かならずしもこの一作のためにのみ、苦作に耿つたといふわけではなく、いくつかの雜文も書いてはゐるが、およそ、そ

のやうに寡作でもあつたのである。

病苦もつのつていくかたち、みづから狂醉者であると思ひ込んでゐるほどには常識を逸してなど決してゐなかつたとしても、やや狂醉にちかいやうな、酒と懊惱の日夜がつづいたことも、いなめない事實であつた。

私は葛西さんが、赤ん坊のユウ子を背負つたすがたを見たことはないが、

「風狂の父に負はれて街往かん」

そんな文字を書き損じの短冊の裏などに書いて、みづからを、そんな父に仕立ててゐた。醉ふと、よくこの「風狂」をかろく口ずさんだりした。

新年になつて、私が葛西さんを訪れると、それでも久方ぶりに創作を世に問ふたせゐか、ほつとした感じで酒を酌んでゐて、髭なども、さつぱりと剃られてあつた。ただ、家中の障子や襖が、まるで暑中のやうに床の間に重ねて立てかけられてあり、家中がへんに、がらんとした清々さをただよはしてゐた。

「どの唐紙も障子も、めちやくちやに穴があいてしまつて、とても立てられたものぢやない。こんなのを立てたところで、慘澹たるもんでせうが……。それに、武勇傳のあとを見せつけられる氣がして、たへられないんだ。」

いふまでもなく、襖も障子もすべて大きな穴があいたり、骨が折られてしまつてゐたのである。もともと、はじめつから、そんなにきれいな建具ではなかつたのだが、深夜の酒のうへの手の振り方、足の蹴り接配によつて、いづれもこわされてしまつた。

そして、その多くは、おハナさんを相手に癇癪をおこした結果としてあらはれたわけで、或る夜などは、蹴とばした自分の足が襖に突きささつて、どうしても拔けず、やがてもろとも、その場にたほれ、ながいことそのままの恰好でゐたこともあるとは、本人の話である。

玄關の二疊に据ゑつけられた『山盛』から、とくとくと、鳴り音をさせて一

升桝に琥珀の液が酌みとられた。正月料理なども二三品皿に盛られて茶餉臺をにぎはし、醉狸州居士は齡不惑の新春を迎へて、病苦を忘れてしまつたかのやうに、潑剌たる元氣をたたへて盃を重ねてゐた。しかし、咳は酒がほんたうに沁みないうちは、ややしげく出たやうである。咳をする度に、かたはらにおいてある、いくつにも折りたたんだ新聞紙の中へ、ぺつと唾を吐いた。そして、膝の上のハンケチで口をまはりを神經質に拭ひとつた。

「ほんとの肺ぢやないから、いいでせう。」

さういつて、盃をからにして差し出すのであつた。私は、葛西さんが作中で書いてゐるやうに、ほんたうにそんな病氣になつてゐるのだとは思へなかつたので、平氣で盃をうけ、ちびりちびり飲んでは、かへした。

「おたがひに、作を勉强しよう。藝術の仕事は苦しい。僕も四十ですからな。馬鹿げたたねばかしもしてゐられやしない。このユウ子だつて、どうなつてい

くものか。女のことも、すべて僕にはこれからの見當がつかないけれど、しづかに勉強したいな。」

「僕も大いに、がんばるつもりです。」

「がんばりなさい。長篇の第二卷は書いてゐるの。」

「去年の夏から、毎晩つづけてゐますが、なかなか進行しません。夜、かへつてから寢るまでのあひだが、自分の勉强時間ですから。」

「いや、それでいいんだ。少しづつでも精進してゐるといふことが、救つてくれるのだ。それに、あなたなんか、まだ若い。二十五歲なら二十五歲としての苦悶、懊惱――さういつたものがあるはずだし、それを生かすといふか、戰ひ拔くといつたらいいか、そんな風にいけばいいんだ。『靜物』といふ短篇がありましたね、『新潮』に出たもの――あれなんか、なかなか凝つたつもりかは知れないが、もつと材料にまともにぶつかつて、自分がのたうつやうなすがたのも

のも見せてもらひたいな。長篇の第二巻は、豫告によると、若き首府東京の、華々しき街を背景として、主人公をめぐる一つの生活の流れの次第にひろがり次第に惱ましさを増してゆく姿を展開するとか、人生の曙に立つ青年の人生體驗、如何にして生活の道へ進むかとか、めまぐるしい大都會の生活圖をどうとか、――そんな廣告文句をあつめたやうですが、あれは新潮社で加藤武雄氏が書くんですか。」

「加藤さんは、なかなか名文を書かれますが、僕のあれは、實は要項を書けといはれたので新潮社張ッに書いて出したところが、そのまま出てしまつたのです。加藤さんなら、もつとうまいですよ。」

「さうなの、自分で書いたの。それはよかつたな、はゝゝ。」

酒がなくなつて、おハナさんは菰かぶりから、さらに桝へ酌んでゐた。けふはけふあらんかぎりをのみくらし、あすのうれひはあすぞうれへん――そんな

幕末の歌人の歌が、おのづと私には思ひうかんだ。葛西さんの酒も、いはばそんな心境ででもあつたかのやうに、私は考へたのであつた。

さらにまた、とくとくとたりくる云々といふ上の句があつて、うれしき音を立つるものかな――さういふ下の句のある酒の歌があつたことなど思ひ出され、いつしか私も酔つてゐた。

すると、葛西さんは、

「あなたのところへも年始にいかうと思つてゐるんだが、お父さんはゐるの。」

「ゐるでせう。御所の參賀と津輕家へまはるのが毎年のしきたりですから、もうもどつてゐますよ。」

「これから、いかうか。しかしお父さんはお酒をやらないんでせう。」

「やりませんが、そんなことはどうでも、いちど父にもあつて下さい。」

「僕も郷土の先輩として、敬意を表したいと、かねてさう思つてゐたんだが、

何しろ、あなたも、知つてるとほり混亂した生活がつづいてゐるんで、そんな改まつた氣持に、自分をもつていけないでゐたんだ。新年の御挨拶をかねて、あなたにも三宿移轉以來、いろんな意味で世話にもなつてゐるから、そのお禮もいひたい。これから、うかがふことにしよう。」

「どうぞ。」

「紋附でなくちや、をかしいでせうね。」

「そんなことはかまはず、そのままどうぞ。」

「さうかな、――紋附となると、羊羹色の古色蒼然たるものを引つぱり出さなくちやならないんでね。それでいつも新年はこまつちまふんだ。でもいいな、近所のよしみで。さうだ、近所のよしみさ……。」

しかし、さういふ葛西さんが、なかなか立ちあがらず、やうやく、それではと立ちかけたときには、さらに一升近い酒が片づけられてからであつた。

外へ出ると、もう夜になつてゐた。賣出しの小旗をひるがへした店々の松かざりや竹が風にざわめいてゐる通りを抜けて、よろよろする足どりで私たちは歩いた。

「ちよつと、待つてくれませんか。」

信州屋のとなりになつてゐる角の荒物屋に、葛西さんは入つていつた。

「半紙のやうなものありませんか。」

「年賀ので、よろしいですか。」

おかみさんが置炬燵から出てきて、熨斗紙のかかつた半紙を差し出した。

「そんでいいが、ちよつと硯と筆をかしてくれませんか。」

おかみさんは、墨汁に筆を持つてきた。葛西さんは、筆のさきを墨汁の口で、ていねいにならしてから、熨斗紙の上に葛西善藏と小さな文字を書き込んだ。

「ほんの、しるしだから、これでもいいでせう。」

さういつてふたたび外へ出ると、そこはもう、前に住んでゐた大工の貸家の前であつた。だまつて、葛西さんは、その家を指さすと、にやりと笑つて見せた。それから橋のたもとの交番の前で、ちよつと立ちどまり、鳥打帽のわきへ右手をひろげて失敬のかたちをして見せたが、櫟の枯木立越しにまだ交番の赤い電燈の見えるあたりで、悠々と小便をしたりした。降るやうな星空であつた。

私の家に入ると、葛西さんは玄關の疊に兩手をついて、私の母に挨拶し、それから、

「さあ、どうぞこつちへ。」

と座敷に招ずる私の父の聲がするや否や、閾のところに、うやうやしく身をかがめた。

「葛西であります。津輕の大先輩として、とつくに御挨拶するはずでしたが、ついおくらしてどうも。……新年おめでたうございます。」

さういつてから、ふところから半紙の包みを、そつと出して、

「ほんの、名刺がはりに。いや、これもへんなもんですが……。」

「葛西さん。」と私の父は大きな聲を出した。「そんな堅苦しいことは、やめて下さい。悴がいろいろお世話になつてゐて、私の方からお禮にあがるところを、それは、わざわざ恐縮でした。」

「いや、いや。」

葛西さんは、頭をかく眞似をした。そのとき父は、私の方を見て、片手の握り拳を口にあてながら、

「これをやつたら、いいぢやないか。」

と酒を出せと合圖をしたが、自分ではたしなまない父が、そんなことをいふのも、めづらしいことであつた。

「葛西さん、あちらで、ゆつくりしておいでなさい。私も話をうかがふから。」

父にいはれて、葛西さんは、恐縮するやうにうなづきながら、なほも父の顔を見てゐた。
「ほんの、御年始だけに、まゐつたので、これで失禮します。」
「まあ、そんなことといはないで、津輕のことばならごぞんじだらうが、あづましく飲みへ、飲みへぢや。」
さういふなり、父自身が、さきに笑つてしまつた。
葛西さんは、離れの四疊半の爐のはたに、あぐらをかいて、酒をのんだ。
「爐だ、やつぱり、いいぢやないの。」
爐緣に盃をのせて、兩手を火の上でもみながらいつた。
「母がお茶をなぐさみにやつたもので、こんなのがあるのです。」
「それに、鮭の鮨はなつかしい。津輕の味がある。」
そんなこともいつて、箸をとつたが、思ひ出したやうに、

「お父さんは、やつぱし津輕の人ですね。あの鼻、あの額――その輪廓といひどう見ても一つの典型的な弘前人ですよ。ひとめ見てすぐわかる顔だ。佐藤紅綠さん、小山内薫さん、それに僕はあまりつきあひはないのだが、秋田雨雀君――みな一聯のつながりのある顔だと思ひますね。」

そこで、私も醉つてゐたはづみに、

「その紅綠さんでは、こんなこともあります。私が文學をやるについて、父はあくまでも醫者になれとすすめるため、文學もやつていいが、やるなら鷗外になれ、紅綠になるなかれ――そんなことをいつたのです。實は紅綠さんは少し緣邊にあたるので、若い時から父もよく知つてゐるのです。」

すると、葛西さんは、うなづいて、

「鷗外にならうとも紅綠となるなかれ――それも、一つのりつぱな考へ方かも知れませんね。僕たちは、おたがひに、へんに自分を押しつけてゐるんぢやな

いかしら。紅綠先生はあれで、りつぱな作家ではあらうが、あなたのお父さんの見方もまた、いろんな意味で、なかなか、敬服させられますな。

そんな話をしてゐるところへ、足音をさせて父が入つてきた。

「葛西さん、到來もののベルモットがありました。日本酒はたくさん準備がないでせうから、これでも、よかつたらやつて下さい。」

「もう、たいへんいただいて十分ですから、そんな上等のものはどうぞ、かまはないやうに。」

「どうせ誰もやらんのですから新年氣分でどうです。かたづけてくださいよ。」

父も、大へん上機嫌であつた。父の去つたあと、ベルモットの栓をぬいて、私たちはそれも何とか處分してしまつた。私の弟妹も、この珍客を、のぞきにきたが、しまひには爐のまはりに蜜柑など持ち出してならんでしまつた。

「小學生諸君に、何かあげよう。」と葛西さんは、にこにこして弟たちの顏を

なでた。「さうだ、將棋をあげよう。兄さんは、とてもおはなしにならない將棋しかできんから、僕があなたたちに敎へてゐげませう。いまから、やればうまくなるぞ。さうだ、あの將棋を盤もつけて進呈しませうや。」

いはれて子供らは、ほんとにもらへるものだとよろこび、銀はかういふ風に動かすんだ、飛車はかういふ風に飛ぶんだと、どこかでおぼえてきた知識をふりまいた。

「うん。そのとほりよ。きつと上げますから。」

葛西さんは、たわいもなく醉つて饒舌になつていつた。それでも、かへるときには、ふたたび玄關から座敷に向かつて、身をひくやうにして挨拶を述べてゐたが、立ちあがると、さすがに千鳥足でよろめいた。

「舶來のベルモツトが、大分きいたやうですね、はゝゝゝ。」

私は片手でかかへるやうにして、葛西さんを送つていつた。途中で、

「わすれものをしましたね。」

はたと足をふみとどめて、葛西さんは、考へ込んだが、よろよろと身體ごと草原へなだれかかつた。

「あぶない。」

いひながら抱きおこすと、

「たうとう、忘れちやつた。」

鳥打もかぶつてゐるし、ほかに何ものこしてきたものはないやうだし、かりにあつたとしても、私はあとからとどけるつもりであつた。

「何をわすれたのですか。」

「あれさ、いつかあんたのところに貼つてあつた短冊さ。僕の白根山の……あれを今日は、どうしても、もらひたいと思つてゐて、わすれちやひましたよ。よう千之君、あれは、やつぱりかへしてもらひたいな。きつと、いいのを書い

てとりかへるから。」
「別のができたとき、かならずおかへしいたします。それまでは、あづかりませう。」
「こまつたな、……いや、こまるなあ、お父さんもあれを見たでせうが、それが弱るんだ。こんどは紅縁になるとも善藏になるなかれ――そんなことになつたら、あなただつてこまるでせう。照れてしまひますよ、いまさら僕にしてもおせいもかなしとか、妻し思へばなんていふのが、津輕の大先輩に見られるんでは……いや、是モ好シ、山堂無月ノ夜、一天の星斗……それも、これも、みな哀しい人生のなりゆきで仕方ないんでせう。さあ今夜は、これから飲まう。あんたも、だんだんお酒がいけてきましたね。」
いつしか葛西さんの家の前まできてゐた。
「ここでかへります。」

「まあ、いい。『山盛』がまだあるんだ。おーい、ハナ子。これから千之君と飲むんだ。早く戸をあけてくれ。」

電燈が部屋について、ひつつめに髮をたばねた女の人の影法師が大きく、玄關の硝子戸にゆらめいた。

新年早々、德田秋聲氏の夫人が亡くなつて、その葬式があつた。葛西さんにとつては、いはば師と仰ぐ老大家の奥さんの訃であつた。また、私にとつても雜誌社關係はもとより、個人として考へても、出版記念會にも、わざわざ出席いただいた緣故もあるので、とりあへずお悔みにうかがひ、かつ葬儀の折もお寺まで燒香のために出むいた。

その燒香式のときに、葛西さんは古風なフロックコートに身をかため、弔辭ともつかず演說ともつかないものを述べたが、それが聽きとれぬばかりか、ま

るつきり、しどろもどろのものであつた。おそらく恩師の夫人の訃に、苦い盃を重ね重ねして、つひに醉つてしまつた、そのあげくの、せつぱつまつた、せつないこころもちであつたにちがひなかつた。

後できくところによると、二十幾年このかた藝術のうへでも、生活の方のことでも、なみなみならぬ世話をかけてきた恩師の奥さんが亡くなられたことを新聞で知つた時に、葛西さんは、泣けて泣けて仕方なかつた。涙のあらんかぎり泣かうとさへ思つてあへて押しとめようとはしないでゐたが、そんなに泣けるといふのも神經をいためてゐるからにちがひない——そんな不安さへ感じたといふのである。

それでも、朝寢床の中で新聞を見てからといふものは、酒がつゞき、つひに夜九時ごろまでも飮んだあげくに、信州屋の老人から何がしかを融通してもらつて、三宿の停留場から本郷まで自動車を飛ばした。

お通夜をして、翌日が葬式であるといふので、朝になつてから友人に禮服を借りにいつたが、友人の年始まはりに出かける都合から、古いフロックコートと山高帽を借りることになつた。前夜來のお通夜の酒に、ここで出された正月の酒が加はつたので、相當の醉ひにひたりつつも、秋聲老の家へ引きかへしたのであつた。

で、フロックすがたを秋聲老に見せて、これでよろしいでせうかといふ意味でたづねると、それをながめてゐた秋聲老は、

「フロックコートか、いいぢやないか。結構ですとも、ちよつとチエホフ見たいかな、チエホフの作に、よくそんなのがあるぢやないか。」

と笑ひさへうかべて、いつた。——そのときのことを思ひ出すやうにして、「自分としては、先生の奥さんのえらかつたことを述べるつもりでゐたのですが……。」と葛西さんはいふのであつた。「先生の奥さんが僕より五つほど年上

だとすると、僕の二十歳時分は奥さんは二十五歳といふことになりますが、もうすでに、しつかりした奥さんになつてゐた。いづれ、先生の人間的なえらさのせゐではあらうが、先生をして今日の地位にいたらしめ、六人の子供さんたちを育ててゐる……それが、どうして誰にも望み得られないことなんだ。僕など、二十年もお世話になつてゐながら、四十にして、まだ家を成さない。奥さんの一代にくらべて、まことに腑甲斐ないこととしか申されないではないか。そんなことから、いつか先生をおたづねして、お酒などふるまはれてのかへりみち、玉川電車の中で、へんに悲しい氣持がされたりして、もし僕みたいに孤獨な人間が、先生のやうな方にでも亡くなられた日には、どんなに悲しい思ひをするか知れない。まさか先生の奥さんが、こんなに早く逝かれる人とは思へなかつた——そんな迷信がかつたことを言つてしまつたが、脫線して申譯ないことになつて恐縮してゐるのです。誰かが演說ではないぞと、そんな聲をかけ

たさうですが僕はもう、燒香する勇氣もなく、ふらふらと坊さんに倒れかかりさうな足どりで、やつと席へもどれたんだ。」

フロックに山高帽といふのは、秋聲老のいはれるごとく、一見チエホフの劇中人物を思はせる、いかにも古色蒼然とした戲畫を想起させはするが、偶然とはいへ、そんな服裝で舊師の夫人のお葬式に參列することになつた自分自身を葛西さんは、いかにも葛西流に一つの因緣をそこに見出してゐたのである。といふのは、作品の中に、やはりこのフロックのことを語るに、つぎのやうな小さな一つの歷史を持ち出してゐるからである。

……………

奥さんの葬式の場合に、僕がフロックを着たんで、非常に滑稽な感じを、先生にも與へたらしく、だが、それにつけても、奥さんのことを思はれるのであるが、恐らく十五六年前、僕の總領は現在(いま)十八になるが、あの子が二つぐらゐ

の時分だつたから、多分そんなものでせう。女房の親爺が、娘と孫を送つて來て呉れて、東大久保の高千穗學校の附近に家を持たして呉れた。それから田舎へ歸る時に、先生のところへ、ご挨拶だけして行かうといふのだ、特にフロックコートに山高帽を冠つて行つたのである。田舍の親爺さんとしては、禮服のつもりだつたのだらう、外に着物も用意して來てゐたやうだつたが。

先生も、まだ、その時分は、四十一二の時だつたのかもしれない。藝術上の惱みの大變多い時代だつたのかもしれない。自分なんかまだ、二十四五の青二才で、家なんかでも持たして貰へば嬉しい、女房子と一緒に暮らしてゐられれば嬉しい、さういつた時代だつたので、その當時の自然主義とか何んとかいつた時代の、そして、先生のことなぞは解らない時分だつた。先生の苦しんでゐられるやうなことは分るけれども、自分等にや分らなかつた。酒を飮み、ひどいことには、女のことさへ持ち出しては、のろけたりしたやうな感じのものだ

つたかもしれない。

先生が、僕のつまり――舅さんのフロックコートが、餘程滑稽なものに見えたのもほんとかもしれない。何しろ三四十年前の、彼が改進黨の演說とか何とかいつて、そして、結局田舍に落着くことになつて――彼が昔の明治法律學校か何かへ、函館から汽船で橫濱へ來て、さういつたやうな學生だつた――それ以來のフロックコートらしい。それと、また、をかしなことには、冠つてゐる山高も、普通では小さいちやんで、やつぱし、昔のまゝの大きい古い山高でなければ駄目らしい。

さういつた可笑しげな風體で先生をお訪ねしたのである。外へ出て本鄕通りの赤門前の通りに出て、僕は、舅君に訊いた。

「どうでせう。だいぶ弱つて居るやうで、これからもどんどん出來る人でせうか？」

「どうしてこれから出來る人でせう。實に立派な人ですよ。」舅君は、さう言つた。

Kのことは賴む――舅は、僕のために頭を下げて、先生に賴んで吳れた。さういふことは、永久に消えるもんではない。言葉は永久とか何んとかいふから惡いけれども、心持としては、そんなものではない。僕の小さな本の出た時に、先生は、第一に舅さんに送つたか？　斯う訊いて吳れた。

だが、フロックの話をして居つたのだから、フロックの話に返すのだが、兎に角に古いものだつたらしい。後で奧さんと大笑ひされたさうである。可笑しくつてしやうがなかつたでせう。先生も、餘程滑稽のやうに思はれたのか、敎育のはうにでも、と先生は言はれた。さうぢやありません、と僕は取り做した。いや、地面の方でせう、と自分は取り做すやうに言つたのであるが、そんなやうなことどもにしても、思へば古いなつかしい思ひ出である。

……………………

葛西さんは秋聲令夫人の靈前で試みた弔辭が、弔問客の席から演說ではないぞと聲をかけられたりしたことについて、

「さういふ意味では、お通夜の晚にも、自分は、さんざんの失態だつたらしい。二十年餘り尊敬して來た奥さんへの、自分の態度としては、ひどく不謹愼な誹りを免れることは出來ない。淸松院奥さんよ、ヤクザな、愚かしい、わたしのやうな人間のことを赦して下さい。」

……と書いてゐるが、さらに話を秋聲老と葛西さん自身の關係にもどして、つぎのやうな感懷に思ひを馳せてゐる。

「一二年前だつたかしら、自分は、先生にお會ひして、いろいろな愚癡を言つた。その時ばかしでなく、自分は、非常に弱つた場合は、先生のところに、愚癡を言ひに行く外、何處にも自分を慰め勵まして吳れる人はないのである。友

人の場合となると、そのまゝに自分を投げ出して、自分の心持のまゝを、見せ晒したくない感じもあるんだが、先生の場合では、そんなことがないので、自分は心からの愚癡を言ふことが出來るのだつた。「そんなことを言つたつて仕方がないよ。まア修業と思つて、諦めるんだな。仕方がないぢやないか――こんなや〻なことを、自分は永い間に、幾度も言はれて、自分は、泣きたいやうな氣持で訪ねて行つたやうな場合でも、突つ返されたが、何時も、力づけられて、歸つて來たものである。で、一二年前のことであるが、さういつた何時もの氣持からお訪ねしたところが、「それや、君、お互ひだよ。君ばかしの苦しみぢやないぢやないか。僕なんかだつて、こんなに毎月々々、厭なものを書かなければならないし、何時までこんな生活をしとつたつて仕方がないと思ふし、作家として働いて行くんだつたら、こんな目下のやうな生活を止めなければならない。生活のはうから第一改革して、それには、僕なんかも、自分だけでも、何

處かに隱遁したやうな生活でもして、もうちつと眞面目の仕事をして行きたいと思ふ。兎に角、今のまゝぢや仕方がないよ。こんな好い加減の仕事をして行くぐらゐなら、全然新聞小說家になるか、まさか、そんなことも出來ませんからね。それを考へて見ますよ。……」かう言はれたやうなことも、永く、强く未だに自分の心に殘つてゐる。これから先生が、先生らしい生活に入り、仕事を爲されて行くといふ場合に、突然の奥さんの死であつた。先生の心が、五十を越えて、更らに新しく動きかけて行かうとする矢先に、何十年糟糠の奥さんに亡くなられたことは、兎に角、たいへんの打擊であらねばならない、鍛錬といふか、試煉といふか——さういふことでは、可也厳しく受けて來た人のやうに、自分なんかとしても考へられるのであるが、奥さんの死は、稍々大き過ぎた試煉ではないかとさへ思はれるのである。」

第五章

同じ三宿の、目黒上水をへだてた坊城山とよばれてゐる木立のある丘の下に小さい家がかたまりあつてゐる、その細民窟ともいひたい家の一つへ、葛西さんはいつのまにか引越してゐた。

六疊と四疊半二室きりの裏長屋――それは信州屋の貸家で、やはりいろんな事情で、やむなく移ることになつたのであるが、ここにおハナさんとユウ子、それに一月ほど前に郷里から逃げるやうにして上京して、しばしその身をよせ

てゐる二十三歳の姪をのこして、葛西さんは信州の溫泉を二三ヶ所まはつた。

しかし、冬の信州の溫泉の凍てつくやうな寒さや自然の荒びたたずまゐが神經の弱つてゐる葛西さんには落ちつきをあたへさうもなかつたので、何年ぶりかで雪らしい雪を見たことに滿足する程度で、倉皇として引きあげてしまつた。その途中から、十七八年以前に行つたことのある大洗を思ひ出して、急に足をそこまでのばしたが、財布は空になりかけてゐた。原稿紙の風呂敷包みをインバネスのポケットに突つこんだ、自分ながらみすぼらしいと思はれるすがたのまま、それでもまさか旅館では顏を知つてゐまいと考へ、水戸から三里の暗い道を乘合自動車にゆられて大洗の旅館に入つた。

ところが、浴場で背中を流してくれた番頭の話では、めづらしいお客さまが見えたといつて帳場では主人やおばあさんがよろこんでゐるといふのである。

それにしても、よくわかつたものだ、四月から十月ごろまで滯留することは

したものの、十七八年も前のことなのに――そんな風に葛西さんは思つた。やつぱり來てよかつた。ここなら落ちついて仕事も出來さうだ。自分の氣持を救つてくれるものは、海だつたのかと、酒を飮んだりしたが、いつものやうに泥醉することなく早く切りあげて床に入つた。

ひとねむりにねむつて波の音に目がさめてみると、二月下旬の晴れた朝空に、海は凪いでゐて、沖を通る發動船の音などする。そして「鈴でも振るやうな啼き音を立てて、その度に渚の小砂利の上に、さながら風に吹かれた木の葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる千鳥の群れ」をながめ、何年にも味はなかつた、すがすがしい朝の氣分をたのしむかのやうに、蒲團に腹ばつたまま煙草をふかした。

それから旅館のおばあさん――當主の母親のひとと、女中頭を酒のうへで毆つて眼のふちを腫れあがらせた昔ばなしをしたりしてゐるうちに、その年二十

三で父親となつたこと、五月下旬の波のあらい夜、この同じ部屋で男の子の出産をしらせる郷里からの電報をうけとつたことなどを葛西さんは思ひ出した。

大洗神社の境内にのぼつたり、渚づたひに那珂川の河口あたりまで小一里の散歩をしたり、ほつとした心持で四五日をおくつて、そのあひだに机に向かつて四年前に亡くなつた父の思ひ出を二枚三枚と書きはじめた。

「そして、今更のやうに、父の死後、頓に崩れ出した、汚辱そのもののやうな自分の生活のことが省みられた。生活の希望を失ふと云ふことの怖ろしさ、そしてまた、藝術に活きる？……それが如何に自分のやうに身體も意志も弱い人間に取つて困難なことであるかと云ふことが、今更のやうに痛嘆された。」

大洗行のことを描いた大正十五年三月の作『海岸にて』に、自分自身をさう語り、さらに――

「日のキラ〳〵と晴れた朝、思ひがけなく大きな雪片が、さあと一しきり、吹

き下ろされたりした。さうした中を、例の千鳥の群れが、鈴のやうな啼き音をして、野分に吹かれた落葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる――その渚で、やがて一ケ月で誕生を迎へることになる自分の哀れな娘の土産にと、紅い小石や、いろ〳〵違つた形の貝類を拾ひ集めたりしては、小品執筆の日課で疲れた頭を休ませることにした。」

と結んでその短篇は終つてゐるが、ユウ子はそのとほり三月に、誕生をむかへたのであつた。

そのころ葛西さんの家にゐた、郷里から出てきたといふ姪は、葛西さんの従兄の長女であつたが、七年ほど前にその従兄は胸を患つて死んだ。當時十七歳だつた彼女は二十三歳までに生活のうへで虐げられ、父と同じやうな病氣に惱まされて上京してきたわけで、相當の家に育つた彼女も一度は養子もむかへたことがあるとかいふことであつたが、父の失敗のあと慘めな暮らしをするやう

になり、柳行李一つを持つて、身を葛西さんによせたのであつた。

姪が一つ家にゐるといふことも、葛西さんの神經に、少からず苛立しいものをもたらしたやうである。病身の若い女に葛西さん自身は大へん同情をよせ、また姪も叔父さん叔父さんといつて葛西さんの身のまはりのめんだうも見、時には酒のお酌もしてゐたが、それがおハナさんといふ人もゐる同じ家の中ではすべてが平穩にいかなかつた。酒を飲んで發熱と疼痛をまぎらし、かたがた倦怠したわれとわが心を苛むかのやうに、らんばうな眞似をする葛西さんを、おハナさんは、一途に酒を飲むことによつて仕事ができないものと思ひこんで、何かと喰つてかかるやうなことをした。深夜に發作のやうに、あばれ出す葛西さんを、しまひにはおハナさんと姪の彼女とがいつしよになつて、掛蒲團でおさへつけた。

ある朝などは、ユウ子のおんぶ紐や兵兒帶で、蒲團のうへからぐる〳〵卷き

にされてゐるやうなこともあつた。

子供好きな姪がきてくれたことによつて、ひとたびはユウ子の保姆として信頼と感謝をもてたことから、大へん期待されたのであつたが、結果は、かへつていけなかつた。姪からさへも、ほんたうに狂氣めいてゐると、葛西さん自身が思はれるやうなことになつていつた。

そして、みづからを、女たちがいふやうに、ほんたうに神經がどうかしてゐるのではないかと、そんな風にも考へ込んだ。

「肺病でもないんで、單純に、アルコール中毒からの神經病なのかしら。さうだとすると、一層俺の生活といふものは、絶望的なことになる。自分はこれまでにも、いろ〳〵の場合にも、肺病も、胃潰瘍も、腦溢血でさへも、恐ろしく思つてはゐない。ただ神經病だけは――氣狂ひだけは困る。氣狂ひだけはなりたくないと、幾度も書いて來た。肺病の場合の親しい幾人の人の死よりも、氣

狂ひで殪れた一人の叔父の死は、どれ程強い自分への脅迫であるか分らない。自分は、この過度の飲酒から、もう一度血を吐いて、死ぬことが出來たら、自分としては不足はないのであるが、それが、そのアルコールが、自分の神經病をすゝめるためにのみ役立つてゐるのだとすると、どういつていいか分らなくなるのである。『死ねたら、君、そりや何んでもないことだけど、死ぬにも死なれず、仕事なんか出來なくなつて、何年も生きてゐなければならない……さういつた場合のことを考へて置かなくつちや例のないことでもないんだからねえ。……』何時か先生に言はれたこともあつたのである。妻子たちのことにしても自分としては、いろ〳〵諦めるところは諦めなければならないのだ。自分は、むしろ、第二の喀血に襲はれて、頓死的な死に方が出來たとしたら、自分だけとしては、幸福だと思ふのであるが、氣狂ひとして、それも、正當に氣狂ひとして理解されない幾年かの生活、病勢がすゝんで、全然の氣狂ひとしての醜骸

を、世の中に晒す——それも考へやうによつては、どちらでもいいとさへ思はれることがある、どつちにしたところで、大したことではないぢやないか。完全に自分を失ふことと、緩慢に、徐々に、自己を失つて行くといふだけの異ひに過ぎないではないか。お前の場合では、そこの差別なんか、それ程重大なものぢやないよ——斯う自分は、自分に言つて見るんだつたが、それにしても、兎に角に、自分は氣狂ひは怖いんだ。まだしも、肺病の毒素が、自分の神經を刺戟して、發作的の行動をさせるんだと、自分から思つてゐたはうが、まだしも氣安い感じなのである。女達が自分の發熱の狀態、それだけからしても、立派に、その病氣であることを知つてゐて、それでも、女の狡い本能から、自分に仕事をさせようと思つて、何處までも、自分を單純な神經衰弱者扱ひにしてゐるのだとすると、彼女等は、二重に自分を脅迫してゐるのだ。」

葛西さん自身も、自分を肺病だと思つてきたやうである。それなのに、ア

ルコール中毒からくる神經病だといふ風にごま化さうとつとめてゐるところの見える女の人たちに對して、一應はうなづくものを感じつつも、何かしら憎しみに似た、憤らしさをおぼえたのであつた。それにもかかはらず、醫者に身體を診せることをしなかつた。それは養生をして、健康を恢復したいといふ氣持もなく、自然のうちにすべてを投げ出してしまつてゐるところが多分にうかがはれる暮らしかたであつた。

「病氣に飽きる――どんな苦しい、例へば勞働にしても、病氣にしても、永くその苦痛をつづけて居るうちには、飽きて來る。人生のどんな好い刺戟にも飽きて來る。自分なんかの狹い神經では、病氣なんといふものは、割合に――殊に呼吸器疾患の場合では、飽きるなんて言つてゐられないほどに、神經的な刺戟の强いものである。この病氣で、倦怠、神經の弛緩、放心的な狀態が見えはじめた時分は、相當に重い兆候であると見ていいのらしい。自分も幾人かのさ

ういふ病人を見たのだが、大抵似たやうな狀態だつた。」

そして、姪の父親の場合もその例の一つとして、

「幾年かの激しい病苦との鬪ひつゞけた後の放心的の狀態は、一二年はつゞくものらしい。そして、彼自身も、今や、息を引き取る間際までも、自分が結核患者であるといふことを、隱す——彼は、最後の醫者の診斷に來た場合でさへ、四十幾度を越えた發熱の場合に、『今日は、少し熱が高いやうです』と言つた切りだつた。そして、遙々と田舍から呼び寄せた娘を立ち合はせて『やつぱし、肺病ぢやないんださうだよ』斯う言つたやうなことを言つて、悲慘とも淒慘とも言へないやうな感じで死んで行つた人を、自分は、幾人か見てゐる。自分はその人達と同じやうに、死ぬであらう。」

と、姪の父である從兄も、いまの葛西さんと同じ四十歲で、みじめな放浪のあとで死んだことを偲び、同時にみづからの運命をも、それになぞらへて考へ

てゐたのである。

坊城山の下の家から、こんどは多聞寺橋をわたつゝオブラート工場の前の三宿タクシーといふガレーヂを右に折れ、さらに左に曲つた右側の、奥へ引つこんだ新築の貸家へ、ふたたび引越した。つまり、この家は三宿の電車通りからいふと、世田谷中學の角をまがつて右に折れたところになるわけで、三宿の百十一番地であつた。

葛西寓といふ表札をやめて、葛西善藏と木の札にみづから墨書して、玄關の硝子戸の上に釘でとめた。

前の家からくらべると間數も四室、建つたばかりで木の香もただよひ、小ざつぱりした感じであつたし、葛西さん自身も仕事ができさうだといつて、晴れ晴れした心持でゐた。

ある日、たづねると、銀縁の眼鏡をかけた小柄な色の蒼黒い、若いやうな年老つたやうな和服の男がゐて、午前中から來て、おひるをすましたものらしく、蕎麥の丼が片隅に押しやられてあつた。

『不同調』といふ一種の文藝雜誌を、『新潮』の主幹である中村武羅夫氏は經營してゐたが、その編輯といふことで、ちかごろ入社した嘉村礒多といふ人であつた。嘉村氏の顏は私も知つてゐた。といふのは、私もひところ中村氏の通俗小說を相州の海岸へ一晩どまりで出かけては筆記したが、やはり筆記する人を中村氏はさがしてゐたところ、『不同調』同人の藤森淳三といふ月評家が帝國醬油新聞とかをやつてゐた經驗もあるといふことで、ある日新潮社へ嘉村氏をつれてきたのである。そんなことから、私も嘉村氏とピンポンをしたこともあつた。素直な、非常に遠慮ぶかい、それでゐて、時に頑固なところもあらはす人で、ピンポンにも、さういふ面がそのままあらはれてゐた。

嘉村氏は『不同調』の原稿として、感想をたのみにきてゐたのである。嘉村氏の前には冷えきつた盃が、おかれたままになつてゐた。

嘉村氏がかへつたあと、私は葛西さんと相對した。

「實は、新潮社をやめることになりました。」

私は、さういつてから、出版部の方から單行本もつゞいて出ることだし、作家として立つのならといふことで退社をすすめられたことを一應話した。編輯者として、主幹のよき女房役でありえなかつた點もあつたらうが、ものを書きはじめた編輯記者は、どこの社でもいづれは退社を餘儀なくさせられる例がずゐぶんあつたので、私もそれを承認し、かつは筆一本の生活に入つていくのはたとへ苦しいにしても、一つの試煉といふ意味からも、躍進を思はせられたのであつた。

私はやつと三年ぐらゐで職を失ふやうな、一種の腑甲斐なさも知つてゐたの

で、おそらくそんなことでは、これから先どうなるものでもないと、葛西さんから叱られる覺悟でいつたのである。

「さう、それもいいでせう。編輯をしながら書くといふのは、安全でいいやうでゐて、その實は、ふた股かけるために、どつちつかずになることが多い。作家は、純粹に書くことが生活なんだから、苦しくとも、それでやりなさい。それに、まだ獨身だし世の中の苦勞をもつと嘗める意味でも、背水の陣を布くんですな。のんきにやるんですな。」

葛西さんは、さういつて、とにかく長篇三部作は完成した方がいい。自分も身體さへよければ長いものを一つぐらゐは書くつもりでゐるのだが、それができない。――そんな風に勵ましたのであつた。

「女房子供の苦勞も、いづれはするやうなことになるかも知れないが、女房だけは――ことに作家の妻といふもの　、よほど考へなくてはこまることになる

んだ。早い話が、僕なんかも妻の問題では、かれこれ忠告がましいことをいはれないほどに悩まされつづけ困つてゐるんだが、はじめが肝心ですね。それに長いこと別居生活をしてゐるやうなことになると、ほんとに夫婦だといふ氣持から、次第に遠ざかつていつてしまふもんですよ。一日はなれれば一日の溝がそこにできてしまふんだ。一年二年——そして十年もはなれてしまふと、もうどうにもできない大きな溝があつて、仕方ないことになつてしまふ。急ぐことはないんだ、ほんたうに生涯の伴侶となり得るやうな、さういふ意味では、藝術なんかわかつても、わからなくても人間としての完成に、おたがひにいたはられつつ、すすんでいけるやうな女でなくちや、いけないと思ふな。」

なぜか、その日は、葛西さんも、しみじみとそんなことをいふのであつた。酒も次第に深まつてはゐたが、そのうちに、葛西さんは

「さうだ、小學生諸君に將棋をあげる約束をしてありましたね。わすれてしま

つてゐた。」
といつて、おハナさんや姪にも手つだはして、押入から、將棋盤と駒を出させて、はたきなどかけさせてゐた。本郷の夜見世で、ねぎつて買つた時のことなどが、おのづと私には思ひ出されたりした。

押入の中に入つてゐたのが眼にとまつたのであらう。葛西さんは卷ゲートルを取り出すと、それをくるくると兩の脛に卷きつけ、やがてまた、押入に首を突つこんで新聞紙にくるんだ釣竿を持ち出した。それは二間半ほどになる繼ぎ竿であつたが、いまは鄕里の方に母とともにゐる長男と數年前だかに、建長寺内の池で鮒つりにつかつたともいはれ、また日光の湯元へ出かける際に何といふこともなく持つていつて湯ノ湖の鱒づりに用ひたともいはれるものである。

その釣竿を新聞紙のまゝ、刀のやうにふりかぶると、卷ゲートルのすがたで將棋盤の上にひよんと乘つてしまつたのである。

「けふは、ひとつ、どうしても佐佐木君を毆る。――毆つてもいいだらう。」
あまり突拍子もないやうすに、私も一瞬、度膽を拔かれたかたちであつた。
「お父さん、何をするんです。また、氣狂ひがはじまつた。」
折から燗德利を持つて入つてきたおハナさんも、あつけにとられて、大きな聲をたてた。
「いいから、ほつとけ。」
髭ののびた顏に、何かしら險惡なものがかげつた。
「何も、佐佐木さんは、お父さんの氣にさわるやうなことをいはないぢやないの。一人で喋舌つて一人で怒つてゐるんだもの、この人ときたら……。」
手拭を襟首にはさんだおハナさんは、德利を茶餉臺にのせたが、思ひなほしたやうに臺所へ持ちかへつてしまつた。
次の間では、姪にあたる若い女が着物を縫ひながら、こつちの方をのぞいて

ゐたので、私は自分が叱られる場面を一部始終見られたやうな、はづかしさを知つた。

そのとき、私には稲妻のやうに、葛西さんのしようとすることが理解できた。禪の方に十三棒とか南天棒とかがあるさうだが、私の心のゆるみをたしなめるために、痛烈な一撃を加へようとでも思つて、葛西さんは釣竿をふりあげてゐるにちがひない。おそらくは、せつかくつとめた雑誌社をくびになつたのだらう。そんなことで、これから世の中をうまく渡つていけるもんぢやない——そんな氣持から私を折檻せんとしたのであらうと、私は考へたのである。

將棋盤に巻ゲートルでのぼつたままの葛西さんは、切腹をする時のやうな、しづかな心持で、じつとうなだれてゐる私のかたはらに、これまた介錯するやうな手ぶりで、待ちかまへてゐた。

私は、一言もないかたちであつた。なるほどと、何かしら涙ぐましいものが

あたたかく私の胸にながれた。

それにしても、象の碁盤乘りといふ曲藝があるが、將棋盤上の醉狸州は一種異樣な情景であつた。

もとより、私は一撃の降りかかるのを覺悟してゐた。新聞紙にくるんだ釣竿なら、さして痛いこともないのである。撃つなら早く撃つてもらひたい。

すると、葛西さんは、ふと何か思ひなほしたやうすで、そつと將棋盤から疊へ降りた。卷ゲートルで部屋中を、ずしんずしんと歩きまはりながら、

「かうやつて、さう、このすがたで、『弱者』つていふのを口述したんだ　そのさわぎが三百になつたり、信州屋老人の斡旋で引越しになつたりしたんだ。おーいハナ子、もういいから釣竿は押入にしまつておけ。そしてお酒をようくお燗して持つて來い。さつきは、どうして、お銚子を持つていつてしまつたんだ。お前たちの考へてゐるやうな、アル中ぢやないんだ。嘉村君だつて、さつき、

酒さへやめれば、まだ何かできる人間だつて、僕のことをさういつたぢやないか。正しく働いていかれる力がのこつてゐると、ちやんと見てくれてゐるぢやないか。僕だつて、まだまだ藝術の仕事がやつていかれるんだ。それをお前たちが、やたらにさわぐから、何にもできないことになつてしまふんだ。」

やがてまた、私は葛西さんと、向き合つて盃を酌んだ。かういふやうなときに、失禮しますといつて、引きあげると、かへつてこんど會つた際に、むづかしくもつれることを、私も知つてゐた。私は、何かしらうら寂しさに、ひたりつつ、むしろ次第にその身體をみづからこはしつつある異色ある作家の、焦燥に焦燥を重ねていく心に哀しみをいだかずにゐられなかつた。

私は雑誌社をやめたのちの、引きこもつて創作に沒頭したいと思ふほどにも創作欲にかられてゐない、何となくうつろな心持のやり場に窮して、九州への

旅に出た。ひとつには長篇の第二卷を在社中に三枚か四枚つづ毎日就寢前に書きつづけて、やうやく五百枚ほとで脫稿したつかれもあつた。また、訪問記者をふり出しに足かけ六年にわたる、あわただしいジャーナリズムの仕事から、ひとまづはなれたのを機會に、自分の藝術の道をさらに切りひらくための憩ひといふか、心構の準備も必要といへばいへた。

それに、たとへ私の書物が世に出たとはいへ、折から勃興してきてゐたプロレタリア文學のすさまじい勢ひに、思想の嵐に見舞はれてゐた出版界では、賣れゆきもめざましいどいふわけにいかず、しかも、いはゆる一圓本が出はじめた折からのことゝて、何となく前途に不安がたゞよつてゐた。

三宿へ引越してきた葛西さんによつて、私はいろいろと生活態度や藝術の苦勞について、めざまされたところが少くなかつたが、そのあまりにも近くにゐるといふことのために、かへつて、おたがひにわづらはされたり、骨肉に感じる

やうな物懶さも知らさせられた。いつとはなしに葛西さんの焦燥が氣持のうへにものりうつつてしまつたやうな、息苦しい厭迫を感じてゐた矢先であつたので、私はわざわざ遠方にゐる中學教師の友人のところへ出かけたのである。福岡までいくのに、私は神戸から正午出帆の臺灣航路の九千噸の船に乘つて門司までをゆつくり瀨戸内海の風光をたのしんだ。

内海の眞夏は紺碧の海も、いつそう青く、島々の間を船は、しづかにすすんだが、幼いころから北の海を見つづけてゐた私には、南國の海は、あまりに柔かく甘つたるくて、どことなくものたらなさがあつた。

私は葛西さんにあてて船中で手紙を書いたが、その中に、たまたま内海航行中に思ひ出した私の伯父のことを挿しはさんだ。その伯父は父の兄で、海軍の大軍醫であつた。佛蘭西に留學してゐたのを、當時わが國から同國に註文してあつた軍艦千島が建造成つて日本へ廻航されるのに軍醫長として便乘歸朝の途

中、あたかも伊豫の沖合で濃霧のため、英國の商船と衝突し、行方不明のまま死亡を認定されたのである。明治二十五年冬のことであつた。

その伯父が父祖の業たる醫者をついだのであるが、その年に駒場の學校を出た父は山林官として身を立てたわけで、それやこれやで、私は醫者になるはずであつたのを、中途にして志を文學にむけた。父にとつては、まことに不肖の子であつたらうが、私は私なりに藝術に生きようと、悲壯な決心を持つた。

しかし、私は葛西さんの生活を目のあたりに見、かつその苦惱しげき日夜のすがたを見るにつけ、藝術の仕事の並大抵でないことを感じないわけにいかなかつた。

私は博多の水たきで酒を酌み、元寇防壘の遺跡をたづね、およそ一ヶ月ほどを福岡市の町はづれの友人の家にくらしてかへつてきた。葛西さんは、そのあひだに毎日四十度に近い熱を酒でごま化しながら苦吟のうちにも、一枚二枚と

書いてゐた。アスピリンで急劇に熱を下げてみたり、時には起きあがることもできない日がつづいた。さうして、おハナさんと何かにつけて、いざこざをおこしては、信州屋のコップ酒をあほりにいつた。姪のひとは、「明日にも家を解散するかも知れないから」と葛西さんにいはれてかへつてしまつたといふことであつたが、さうなつた直接の動機は、ある日の午後、新聞に出たヒステリー性變質症患者が診療にきてゐた醫師をピストルで擊つた云々の記事を、姪がおハナさんに讀んできかせた時にあるらしく、そのとき、おハナさんも、ほんとによく似てゐる、やつぱり病氣のせゐなんでせうと相槌をうつたことから、これをとなりで蒲團にもぐりながら聽いてゐた葛西さんは、何の理由もなく、よそへ出ていつてもらふことにしたといふのであつた。

その時のことどもや、病苦と醉狂の感懷を盛りこんだ『醉狂者の獨白』といふ作品を、葛西さんは口述によつてつくつた。そして、これを筆記したのが、

銀縁の眼鏡をかけた、立ちゐふるまひの物しづかな嘉村礒多氏なのである。嘉村氏はおそらく、非常にわがままな酒中の葛西さんの一言一句を、その發言のとほりの音調さへ聴きのがすまいといふやうな愼重な態度で筆記したにちがひないと思はれるが、それにはずゐぶん氣もつかひ、骨も折れたらうと十分に私には察しられるのである。

が、嘉村氏にとつては、寄寓してゐる不同調社の總帥である中村武羅夫氏が主幹をしてゐる『新潮』のための仕事でもあり、かつは藝術の方で心服してゐる葛西氏の、誰にも容易にできない口述筆記をするといふそのこと自身が、修業であると信じられたのであつたらう。嘉村氏は妻を故郷の山口縣にのこして愛人と手をたづさへて上京し、醬油の新聞に記者としてつとめてゐるうちに文學の志望を培ふに好都合の機會を見出した人だけに、たとへばこの年に葛西さんが發表した『W老伯』といふ短篇にあるやうに、小間物新聞の記者をしてゐ

た葛西さんが大隈伯を訪問して談話をとつた過去の經驗や、妻子を遠くの郷里において病弱の身を藝術に精進してゐるといふいくたてに、何かしら共通のものを見出して、おのづから、師事していろいろと學ばうとしたとしても無理からぬことである。ただ、嘉村氏の人となつた山口縣と葛西氏のやうな性格、人となりをつくつた青森縣の、しかも津輕の郷土といふもののあひだには、ずゐぶんちがふものがあると、私には考へられるのだ。一例をいへば、おそらく嘉村氏にとつて、驚異にちかいほど珍らしいと思はれるものが、實はわれわれの郷土では、案外ざらにある平凡なことであつたりする。葛西さんの藝術は文壇では、たしかに珍とするに足る特異のものであつたらうが、その人となりや奇人ぶりでは、さうめづらしがることもないと思はれるほど、葛西さんのやうな人物が、郷土にはいくらもゐるのであつた。故郷にいれられずと、葛西さんをして歎かしめた理由も、そこらにつながりがあるやうである。

第六章

「葛西善藏氏　傳染病研究所に入院、面會謝絶中」

新聞の消息欄に、さういふ記事を見たとき、私は一種名狀すべからざる暗い氣持に打たれたのであつた。昭和二年初夏である。

『狂醉者の獨白』といふ作品を年のはじめに發表してから、ずつと仕事ができずにゐた葛西さんとは、同じ三宿に住んでゐながら、しかも毎日のやうにその家の少し引込んで見える道を往來してゐながら、私はほんのたまにしか話をし

にいかなかつた。それは、近いからいつでも會へるといふことと、もうひとつ葛西さんはなかなか如才がなくつて、かへらうとする客人を引きとめることに妙を得てゐるため、つい長居をしてしまひ、ことに酒盃などおたがひに手にしたときには、いろいろとこんがらかつて、事が二重にも三重にもなるので、決してそれを厭ふといふのではないが、いくらなんでも酒仙の稱ある葛西さんの堪能するまで相手になることができない結果、自然とあんまり長居をしないやうにし、朝の酒がはじまらないうちに、用談だけすましたいといふことになり勝ちなのである。それに、大ていは酒を飲んでゐるといふことと、喘息か神經痛か、あるひは痔か、とにかくさういふ持病の一つが起つてゐるであらう——とこれだけのことがあらかじめわかつてゐるので、とりもなほさず、目と鼻のところにゐながら、御無沙汰といふことになつてゐたのだ。

何か不吉のやうな豫感が、すぐ私にきた。それには傳染病研究所といふ文字

の聯想も手つだつてはゐたらうが、それでゐて、さういふところに葛西さんが入院したといふことは——しなければならないといふことは、ずゐぶん悲痛でありながら、運命的な必然さもしのばれたり、一種獨特のロマンテイシズムを有してゐる葛西さんの人となりの變態的なあらはれのやうにも思はれた。

何はともあれ、私は白金臺町の古風な病院の奥まつた病棟を見舞つた。髭ものび髮ものび、一見して病苦にやつれたそのすがたを隔離室の一隅に、薄い毛布をかけて横たへゐるのを眼前にして私は病氣の決して輕くないのを感じた。

四月中旬の流感から氣管をいためたため、三十九度以上の高熱がつづくにもかかはらず、自宅で靜養してゐたが、どうもはかばかしくないといふので、『奇蹟』といふ同人雜誌以來の友人舟木重雄氏の義兄にあたる鮫島博士の勸告にしたがつて、五月の五日に入院したのであつた。が、當の葛西さんは、かへつて、いつもより元氣を出して見せた。

「ちよつと、小便してきますから……。」

と、しづかに寢臺から降り、スリッパを突つかけて病室を出ていつた。喘ぐやうな息づかひをきいても、小用に立ち歩くことのよくないことは、素人にさへ明らかにわかつたほどなのに、潔癖の葛西さんは便器類の使用を嫌つたのである。

同室には、一枚の衝立をしきりに、蒼白の少年が氷嚢を額にのせて昏々と眠つてゐた。

「それでも、傳染病の疑ひだけは、どうやらとれたらしい。熱はずゐぶん高いですが、それが、ちやうど晩酌のすぐあとに、看護婦が體溫を計りに廻つてくるせゐもあり、度ぐらゐはアルコールのためではないか、と思ふんだ。」

さういつて、葛西さんは笑ふのであつた。こんな重症でゐて、なほ酒は離せないのである。お醫者も、二合ぐらゐまでなら、飮んだ方がいいと、勸めてゐ

ます。それを禁じては、からだが死んだやうになつて……。」と葛西さんは沈痛な眉をよせた。「薬が効かないんださうですよ。」

で、新橋の方に勤めを持つてゐる弟さんの勇藏氏が、店のかへりの四時すぎには、かならず病院によつて、お燗をつけ、晩酌をすまさせるのが日課となつてゐた。

「そろそろ、弟がやつてくるでせう。」

枕もとの懷中時計をのぞいて、葛西さんはいつた。それから、私に作家としての勉强を怠つてはいけない。苦しくともペンだけでやれ。浪人なら浪人としての生活を切り拔けてゆけと、いましめた。そして、

「われわれの鄕土の岩木山は、津輕平野では名山だらうけれど、まだまだ高山名山は他國にあるんだから……。」

そんな話も出た。

やがて、勤め先から廻つてきた勇藏氏が、新聞紙ですつかりくるんだ一升壜をさげて扉を押した。

ベツトに胡坐をかいた葛西さんは、こころもちふるへる手に盃を持つと、窓に蔽ひかぶさるやうな青桐の葉が夕風にそよぐのをながめながら、

「いつぱい飲んでもらひたいけれど、ほかの患者さんの手前もあるんですから……失敬。」

そして、片隅の新聞紙にくるんだものを指さした。そこにも月桂冠の一升壜があつた。

「そんなに飲んでいいのでせうか。」

「いや、アルコールがまはらないと、ぐつたり、まるで死んだやうになつてゐるんで……あ、少しお酒が沁みかけてきた。やつぱしお醫者のいふやうに、藥もこれでないと効かないのが、ほんとのことらしいですね。」

しかし、さすがに二合までならいいといふ酒が全部は飲めないらしかつた。
「それでは、またまゐります。何かお家への用事は……。」
「べつに、ないですが、ユウ子がどうも肋膜ぢやないかと思はれるんだが、いや、それも大したことはないでせう。」
私は長居を謝して病室を出た。黄昏どきの初夏の芝生の彼方で、若い醫員や看護婦がテニスをしてゐる光景を、私は忘れられた古い風景畫のやうに眺めた。
六月のはじめ、ユウ子の病氣を氣づかつて、ひとまづ退院といふことにして葛西さんは三宿へもどつてきた。病院では、病狀は小康だが、もう少し入院してゐた方がよいといふことであつたらしいが、さう思つたら、後へ引かない性分もあり、かへつてしまつたのである。
退院はしたものの、依然として病床の人であつた。呼吸器をすつかり害ねてしまひ、當分は仕事のできさうな見込もなく、しづかに養生することになつた

が、病院にゐた時分よりは、次第に元氣づいて、もう無茶苦茶な亂暴ぶりはとてもできないと、そんなことをいつて笑つた。

それでも夕方からは床を抜け出て、酒に親しんだ。飯を食べる前に、どうしても酒を少し入れなければといふのであつたが、その晩酌が朝までつづくことさへ、決して稀れではなかつた。しかし、その量はさすがに、ぐつと減つてしまつた。

月がかはり、久しぶりで病床をおとづれると、鐵製のベッドを襖のとりはづされた六疊にまたがらせて据ゑ、柔かさうな藁蒲團に新しい敷蒲團を重ねたその上に、しづかに仰臥してゐる葛西さんは、ふたたび憔悴して見えた。卓上ベルが備へられ、籐椅子のセットがそろひ、茶テーブルの下の段には、瀬戸ひきの洗面器で上海産の龜の子が一匹飼はれ、枕もとの硝子鉢の中では、尾鰭の大きな金魚がゆつたりと泳いでゐた。

布の縁などついた上等の簾が鴨居から垂れ、いままでの生活から急に明るく何となく傲奢なものがただよつてゐた。これは、ひとへに、その春刊行を發表された圓本の文學全集に負ふものであつた。そして、これまでの勤めをやめて弟　んの勇藏氏も全く家庭の一員となり、これからは、もつぱら病兄の世話役として、力をつくすはずであつた。

枕頭には岩波文庫の正岡子規の『仰臥漫錄』とか、鈴木孝之助博士の『肺結核治療法』といふ本が、讀みさしのまま伏せられてゐた。

日光湯ノ湖のほとり、荒凉とした晩秋の客舍に血を吐いた一昨年のことなどを話してから、「やつぱし、あの時分から惡くなつてゐたのでせう。」

と、みづからいつた。とにかく以前のやうな、あの素面か醉態かわからないほど、ぴつたりといつしよになつた時代のおもかげは見るべくもない、一種の落ちつきある生活に入つたことを、私は嬉しくもまた寂しくも感じたのである。

何故なら、盛夏の晝日中に、褞袍を着て臥してゐる葛西さんには、もうひとところのやうに、かけまはつたり、取つ組んだりする勇氣がなくなつてしまつたのではないかと思はれたからであつた。信州屋へコップ酒をあほりに、醉歩蹣跚といく日は、いつまた來るであらうか。

話は、ともすると死と病氣のことにおよぶことが多かつた。また、ややもすると、

「そんなに早くかへらなくてもいいぢやないの。僕には結核菌はゐないんだ。なんなら、傳研を退院した時の診斷書を見せてもいい。」

そんなこともいつて、枕もとの金魚に眼を注いだ。

私には、金魚だの龜の子だのが、何となく氣にかかつて仕方がなかつた。さういふものが飼はれたことは、いはば生活の方では、大へんゆとりのできたことにもなり、結構なことにはちがひないはずなのに、私は暗いものを感じたが、

その理由が、しばらくして私には、やつとわかつた。
私は葛西さんの處女作『哀しき父』の中の一節を思ひ出したのであつた。それは大正元年の九月、舟木重雄、相馬泰三、廣津和郎、谷崎精二、光用穆の諸氏とともに葛西さんも同人であつた『奇蹟』に發表されたものであるが、私はもちろん創作集となつてから讀んだのである。
「金魚と子供とはいつか彼には離して考へることの出來ないものとなつてゐた。」
と『哀しき父』には書かれてゐる。――
「彼はまだ若いのであつた。けれども彼の子供は四つになつてゐるのである。そして遠い彼の鄕里に、彼の年よつたひとりの母に護られて成長してゐるのであつた。
彼等は――彼と、子と、子の母との三人で――昨年の夏前までは郊外に小さな家を持つていつしよに棲んでゐたのである。世の中からまつたく隱遁したや

うな、貧しい、しかし靜かな生活であつた。子供は丁度ラシャの靴をはいてチョコ〳〵と駈け歩くやうになつてゐたが、孤獨な詩人のためには唯一の友であり兄弟であつた。

彼等は緣日で買つて來た粗末な胡弓をひいたり、鉛筆で繪を描いたり、鬼ごつこなぞして遊んだ。そして彼等の樂しい日課のひとつとして、數匹の金魚と龜の子も飼つてゐた。棄てられた小犬と、晴れた日の午後には子供の手をひいて、小犬をつれて、そこらの田圃の溝に餌をとりに行くことになつてゐた。けれども丁度彼等のさうした生活も、迫りに迫つて來てゐたのであつた。從順な細君の溜息がだん〳〵力無く、深くなつて行つた。ながく掃除を怠つてゐた庭には草が延び放題に延びてゐた。

金魚は龜の子といつしよに、白い洗面器に入れられて緣側に出されてあつた。彼等の運命は一日々々と迫つて來てゐるのであつたが、子供の爲めの日課はや

はり續けられてゐた。それが偶まに訪ねて來たいたづらな酒飮みの友達が、彼等の知らぬ間に龜の子を庭の草なかに放してなくなしてしまつた。彼は云ひやうのない憂欝な溜息を感じた。

『はア、カメない、カメノコない……』子供も幾日もそれを忘れなかつた。それからして彼等の日課も自然と廢せられることになり、間もなく、彼等の哀しき離散の日が來てゐたのであつた――」

處女作に書かれてあるやうな、そんな遠い思ひ出をしのんで、葛西さんは龜の子や金魚を病床にそなへたのではないかも知れない。籐椅子がそろへば、何となくそこに龜や金魚をおいたら、病床のつれづれになぐさめにもならうし、おもしろいと考へて、そなへたことでもあつたらうが、私には龜の子と金魚が何かしら郷里にゐる妻や子に、かかはりがあるもののやうに思はれてならなか

つたのである。やがて二十年に垂んとする、ひとつの道が、いばらの多い人生の道が、幾山河越えて、見はるかす彼方に水脈をひいてゐるのが感じられるのである

七月下旬、都下の新聞は芥川龍之介氏の自殺を一齊に報じた。長髪痩顔の肖像を入れ、社會面のトップに大きく記事が出た。享年三十六。何かしら身にちかいショックを感じて、私はとりあへず弔問だけは早くしなければと思ひ、途すがら葛西さんの家へ立ち寄つた。

ちやうど、白い布をかけたテーブルに向かつて、ベットに胡坐をかいたまま朝の食事をしてゐた葛西さんは、

「大へんなことになるもんですね。」

と、はじめはそれだけいつた。ベットの上に朝刊がひろげたままにおいてあ

つた。

私は、これから出かけるつもりだが、ついでですから名刺だけでもとどけておきませうかときいたら、さうしようといつた。私はかつて『文章倶樂部』の訪問記者として、はじめて田端の我鬼窟を訪ふてから、五六年のあひだに、主として編輯上の用事で故人と交渉があつたが、長篇の第一巻が出た折の出版記念會には、病軀を押して、發起人の一人としての責を果すために出席してくれた芥川氏の好意にも報いなければならなかつた。

葛西さんも、それをいつた。のみならず、いつか原稿のことで訪ねた私に、

「佐佐木君にはお母さんがあるでせう。」

いきなり、そんなことを芥川氏はいつた。

「ありますが、なぜです。」

「ちやんと、わかるよ。羽織の紐の結び方でわかるよ。」

芥川氏は會心の微笑を口のあたりにうかべた。いはれて、私は自分の羽織の紐を見たが、不思議な氣がしたことがあつた。

それから、ある日は

「君のお父さんとお母さんの仲人で結婚した同僚が、僕のつとめてゐた横須賀の機關學校にゐたが、知つてゐますか。」

「齋藤といふ方でせう。」

「僕の小說にも出てくるよ。」

――そんな挿話もある。澄江堂に私は「病中謝客」のボール紙が格子戸に下がつてゐるのをよく見かけたが、そして、時には「主人不在」の札も下がつてゐたりしたが、いまは、ほんたうに「主人不在」となつてしまつた、あわただしく人の出入りする芥川邸に私は行き、階下に安置された靈柩を拜した。そして、一本は病める葛西善藏氏のために、一本は自分のこころとして、線香をさ

さげ、遺族の人々のゐる前に禮をして、直ちに世田谷へもどつた。
　葛西さんは、ひととほり田端の光景をききとつてから、
「こはいですな。文學の仕事なんか、ほんたうの話が、遊び半分ぢやできないんだ。生命を投げて、あなたまかせで、ペンをとつてゐるんだ。いつ、どんな裁きが來ないとも知れやしないんだ。ねえ千之君、あぶないよ。藝術なんかにあこがれないで、いまのうちに安全な道を探しちや、どうかしら……。きつと、芥川君のやうな時がくる。わかつてゐるんだ。ただ、それに堪へられるだけの人と、どうにもしようがなくなる人とがあるんだ。——どう、やつていける?」
「……。」
「むづかしいねえ、おたがひに勉强しよう。乘り切らうよ、作家としての勉强は、ひととほりの勉强ぢや、いけないのだから。」

盃がその手にあつたのではなかつた。が、この日の葛西さんは哀しい病者であつた。三角形の庭には、雨あがりのカッとした陽が照つてゐた。その照りかへしの射しこむ部屋の中に、籐の茶テーブルの下の段では洗面器に入れた水に半ば浸つてゐる小石の上に、上海の龜の子が、首を長くしたまま、動かうともしない。

じつと、その龜の子を見てゐるうちに、私は涙がにじみ出てきて仕方がなかつた。生活をあげて藝術に精進しつつある作家としての葛西さん、その人が不遇にして病苦とたたかひつつあるすがたが、いたましく私の胸を打つた。

「もし病院へでも入るとすれば、鈴木孝之助博士のところがよささうだ。」

かねがね葛西さんは、そんなことも洩らしてゐた。それは博士の著書を讀んで、何か療養上のことで信頼されるものを汲みとつてゐた結果でもあつたらうが、それが秋になつてからほんたうに實現された。鮫島博士の診察をうけたあ

と、友人の舟木氏や光用氏の熱心な勸めに動かされたのである。ことに光用氏は呼吸器の方の病氣を全治してすつかり健康體に復した經驗のある人であつたから、葛西さんもいふことをきく氣になつたやうである。

で、相州七里ケ濱の鈴木療養所へ入院したのは十月二十九日であつた。

海濱の病院生活は、なかなかの苦行らしく、煙草と酒を堅く禁じられた。もしアルコール中毒ならば酒を禁じるわけにはいかないとのことであつたが、診斷の結果、さうでないと確定したのである。

「アル中なんか、めつたにないものと見えますね。」

葛西さんは苦笑しながらいつた。そして、きびしい日々の療養生活は二十年來の痼疾をも根本的になほすことができさうな光明をもたらしたのである。體重も日增に少しつづふえていつた。三宿の留守宅には、弟の勇藏氏をはじめ、ユウ子をまもるおハナさん、それぞれみな健在である。いまこそ、心しづかに

病を養ひ、ふたたび藝術に思ひをよせてしかるべき機會がきてゐるともいへよう。

ところが、十一月七日――といへば七里ヶ濱へ移つてから、やつと十日目であるが、夜もふけてから突然、弟の勇藏氏が腸捻轉の疑ひで、三宿の近く池尻の病院へ入院、開腹手術を受けなければならないことになつたのである。

急報に接して翌八日の朝、葛西さんはひとり汽車と電車にゆられてもどつてきた。が、そのときには、すでに勇藏氏は危篤の狀態で、いまは死を待つばかりであつた。勇藏氏は七里ヶ濱に兄の善藏氏を見舞つて、なにがしかの金を托されて東京へもどる途中、どこかで遊んでかへつてきたらしく、三宿の家で蒲團を敷いて寢ようと思ふと、下腹部に激しい痛みをおぼえ、七轉八倒の苦しみにもだへたといふのである。

はじめは近所の產婦人科が專門の相田醫師に往診してもらつたが、盲腸炎か

も知れないから早い方がいいといふので、池尻の病院へかつぎ込んだ。そこで手術を受けると、盲腸ではなく、ほかに故障があるといふので、さらに他の個所を切開したが、病氣がわからない。それから赤十字病院に勤務してゐるといふ醫者も立ち合つて、三たびの手術をすることになつた。

葛西さんが鎌倉からかけつけた時分になつて、やうやく腸管閉塞症と確定したのである。葛西さんは、近くの三宿タクシーをたのんで病院へ、その日から二度ほど見に行つたが、それだけでも、歩くのに怠氣さうであつた。自分では十日間の入院生活で三百匁ほど體重が増したといつてはゐたが……。

十一月十三日、勇藏氏は不歸の客となつた。三たびの手術に、見ちがへるやうに衰弱した病人は、小さな病院の一室で、兩脚をちぢめて、それを兩手で抱きかかへるやうにして、藥も咽喉へ通らず、じつとうづくまるやうに喘いでゐたが、たわいなく息を引きとつた。

葛西さんは七里ヶ濱からかけつけたままの大島の重ねを着たすがたで、きちんと坐つて膝の上にハンケチをひろげ、朝から酒を飲まずにゐられない日がつゞいた。かつて病氣をしたことのないといふ勇藏氏の、突然の死は何といつても打擊だつたにちがひない。しかも、勇藏氏の夫人は女の子の出產で前年に他界してゐた。

勇藏氏の骨を拾ひに、葛西さんと私は幡ヶ谷の火葬場へいつた。遺骨は谷中の天王寺　一時あづけることになつたが、その寺には私の亡弟の遺友で僧侶になつた靑木德順がゐた。天臺宗で、葛西家の禪宗とは宗旨もちがつてゐたが、そんな心やすい人がゐれば何かと氣强いからといふので、決まつたのである。明春、雪消えを待つて、善藏氏みづから鄕里弘前の墓地へ埋葬のためにかへる心組にしてあつた。

お通夜はそれでも大へんにぎやかで、葛西さんの友人知己が集つた。酒も相

當に出た。葛西さん自身も、盃を重ねた。

夜も更けてからであつた。お經をあげてくれた德順も、打ちとけて酒の仲間に入つてゐたが、誰かが、位牌を指さして、

「あの、戒名の上に書いてある妙な字は梵字といふのかも知れないが、あれはどういふ意味なんだらうね。」

と、たづねた。

「さうです、梵字です。ア字です。アと讀みます。すべてのもとが、このア字にあるのです。」

若い僧侶の德順がいつた。

「すると、つまり、アジノモトですか。」

眞面目な顏をして駄洒落をいつた人を、みんなが振りかへつた。谷崎精二氏であつた。

笑ひが一時に爆發した。その聲の中に、
「谷崎つていふやつは……。」
それも笑ひながらの廣津和郎氏のことばであつた。三上於菟吉氏なども葛西さんと盃を應酬してゐたが、夜の白むころは、靈前で洋服のまま寢そべつてしまつた。——そのにぎやかさが、かへつて佛のためにはいいんだと、葛西さんもいつた。
「いいお通夜でした。弟も成佛したでせう。」
遺骨が天王寺へあづけられるといふ日、德順が迎へかたがたお經をあげにきたが、葛西さんは父君の形見だといふ羊羹色の紋附を着て、うやうやしく線香をささげ、一禮したあとで位牌をぐつと見つめながら、
「では、さびしいでせうが、ひと足さきに行つてゐてください。ぢきあとから行きますから。」

と、さういつて笑つた。やつぱりお酒が入つてはゐたが。

で、その十七日には、朝はやく鈴木療養所へもどるといふので送つていく役目をたのまれた私は、瀨戶君といふ牧野信一氏の隨筆社を手つだつたことのある靑年と二人、いつでも出發できるやうにつめかけてゐた。が、葛西さんはお銚子ばかり幾本もかへて、もう少しもう少しといつて、容易に立たうとしなかつた。

そとに待たしてあつた、三宿タクシーの自動車をさへ、一たんかへしたりして逡巡してゐた。何となくふたたび病院へ入るといふことに氣おくれがしてゐたのではなかつたらうか。暮れやすい秋の夕陽が、障子の上の方を黃色くかすかに染めた。それでも立たうとしないので、私たちはいくらか焦れてきた。

とそこへ、宇野浩二氏の令兄と母堂とが、勇藏氏の亡くなつたことを知つてお悔みに見えた。浩二氏の健康がすぐれないため、代理として來られたのであ

つた。

その二人がかへつてしまふと、

「これでいい、いよいよ行きますか。どうも何かひとつ、すまない氣がされてゐたんだ。僕には、さういふ、へんな神經が働くんで……。」

さういつて、葛西さんは、簡單に自動車に乘り、東京驛まで驅けつけさせた。もう夜になつてゐた。

二等車の中では、鼠色のインバネスの襟を立てて、うづくまるやうにして、ほとんど眠つてゐたが、鎌倉の停車場を出ると、ずゐぶんひどい疲勞が見えた。

驛前の吹きさらしの休憩所の、木の腰掛に腰を下ろして、サイダーのラッパのみをした葛西さんを兩側からまもつて、私たちは動搖の激しい電車で腰越までいつた。

晩秋の空は一面の星であつた。相模灘は渺茫として、波の音ばかり高かつ

た。電燈の暗い療養所の診察室で、宿直の醫局員が赤い雲母の窓のある石油ストーブをともし、肌ぬぎになつた葛西さんの肋骨の出ばつた胸部に聽診器をあてるのを、私は息を殺して見まもつてゐた。

思つたより惡くなつてゐないといふ醫局員のことばに、やや愁眉のひらける思ひで、海に面した窓を開け放しの日本間の病室に横たはつた葛西さんを見とどけてから、私たちは終列車におくれてはならないと、風の强い七里ケ濱を急いだのであつた。

第七章

三宿の家には、葛西さんの甥にあたる清藏君といふ青年が机や本などをはこび入れて、留守をまもり、かついろいろの用事もしてゐた。清藏君は、早稻田大學の夜學に通學してゐたが、いつも制服を小柄な身につけて、葛西さんのことは「叔父さん」と呼んだ。いはば亡くなつた勇藏氏のあとをうけて、葛西さんの世話役をいひつかつてゐたのである。

療養所に入院した葛西さんは、やがてまた、どうしても自分でなくては達せ

ない用事があるといふので東京へかへつてきた。私は書きかけの長篇の第三卷を完成するために淺蟲溫泉の友人の家にしばらく滯在して年末ちかく歸京したが、葛西さんは十二月の半ばにやうやく歸院した七里ヶ濱の療養所から、またしても、三宿へかへつてきた。それが大晦日の前日で、歳晩の家事を案じて、ひとり病院を拔け出してきたのであつた。

かうして昭和三年をむかへ、正月の三日には歸院の豫定であつたのを、經濟的な不安や何やかやで、一日のばしにしてゐるうちに、退院といふことにひとりぎめにきめてしまつたのである。

一月の十三日ごろ急性腎臟炎で全身にむくみがあらはれた。相田醫師に絕對安靜をすすめられ、晝のあひだはそれでも仰臥してゐたが、電燈がつくと酒がはじまらずにゐられなかつた。その酒も二本にひかへることにしてゐるうちにまもなく腫れが引き、案じるほどのことはなくなつた。

二月のある日、葛西さんの知合だといふ寫眞の方を研究してゐる石藤氏が見えて、病床の葛西さんを何枚か撮影してかへつた。褞袍を着て、髮も髭ものび火鉢にかざした兩手は、めつきり瘦せて骨ばつてゐた。正座したもの、胡坐をかいたもの――いづれも瞬間のこころもちを、たくみにとらへた肖像寫眞がやがてできてきた。

三月十一日のことである。朝から客が多かつたが、午後の三時ごろ頭がどうもはつきりしないので、字でも書いてみたら、いくらかまぎれはしないかと、葛西さんは自分で墨を磨つて、白い唐紙を展べた。

何枚か書き損じたあと、紙がなくなつたので、半折を細長く半分に切つて、やうやく書きあげたものを、畫鋲で長押にとめて眺めてゐると、咳が出た。

ふるへる指さきで卓上ベルを鳴らした。

「血が出たやうだから、相田さんを呼んできてくれ。」

さういふ聲に、臺所で洗濯をしてゐたおハナさんが、近くにゐるかかりつけの醫師を呼びにいつて、かへつて見ると、新聞紙をいくつにも折つて、痰吐きにしてゐるものに、赤い血を見たのであつた。

つぎの朝、たのまれてゐた用事の報告に私がいくと、

「たうとう、出ましてねえ。」

仰臥して患部に氷嚢をあてた葛西さんが、さういつた。嗄かれたその聲調は何故か低く、いつまでも耳にのこつた。

晝間、見舞客がいつになく多かつたせゐか、その晩つづいて喀血した。そして量も前よりは多かつたといふ話をした。

「こんなものを書いたのが、いけないんでせうな。」

と、葛西さんは顎で、長押から垂れ下つてゐる細長い眞白な唐紙を知らせ、片手でかたはらの眼鏡を引きよせた。

古岸何人把釣竿明月蘆花君自看

揮毫されたその十四字は、枯淡な風雅を多分に含んで、みごとな出來榮えをしめしてゐた。

「自分としては、これ以外に書きたい文句もないし、自分の創作と同じくらゐ、もしくはそれ以上のものが出てゐるやうに思はれるんだが、どんなものでせうか。」

「……………。」

私は默つたまま、風韻ある筆蹟を眺め、やがて、

「どう讀むのですか。」

と、たづねた。

「古岸何人カ釣竿ヲ把ル　明月蘆花君自ラ看ヨ。――明月の前に雲冉々水漫々と入つてゐるんだが、それをつづめてみた。ほんとは碧巖錄第六十二界の雪竇

禪師の頌にあるわけですがね。」

その書には、署名もなく、もとより落欵もなかつた。

ある日、病床を見舞ふと、その書が見えないので、私は、いつものやうに破いて棄てられてしまつたのではないかと案じつつ、

「古岸何人かは、どこへいつたのですか。」

とたづねた

「あれは、信州屋の爺さんがきて、親類にあたる表具屋がゐるから、表装させようといつて、持つていきましたよ。」

「それは、いいことですね。」

「池尻の停留場ちかくに、大雅堂——そんな表具屋がありましたつけか。」

「信州屋の本店のそばに、あるやうですね。たしか緑色の文字を彫つた看板を出してゐると思ひますが……。」

「ぢや、やつぱし、そこへたのんだのらしい。」

いつさい信州屋まかせなので、どんな風な表裝になつて出來あがつてくるものかわからないが――さういひながら、何かしら、そこにたのしみがかかつてゐるかのやうに、葛西さんは、大へん機嫌よかつた。

おハナさんは臨月を間近かにひかへて、大きなお腹をかかへてゐた。

「お産がどうやら迫つてゐるらしいんで、こいつには、弱つたものです。自宅ではとてもできないし、産院か病院が簡便でいいんだが、どこにしたもんでせうな。こんなことを、あなたに相談するのも、妙なもんだが……。」

炮じたての番茶を淹れながら、葛西さんがいふのである。

「赤十字の産院なら、澁谷から近いでせうが、あそこはどうですか。」

私は、そんなことを漫然とこたへた。

「それがやつぱし、いろいろ費用の關係で、できるなら、ごく懇意な産婆さん

の家に一時おいてもらふとか、さうでなければ方面委員のつてをたどつて、安く、施療といふことで方法があれば、この際ずゐぶん、自分としてもたすかるわけなんですがね。」

「さうですか。」

私は、しばらく考へてゐたが、ふと友人の醫者を思ひうかべた。中學同窓のその友人は九州帝大を卒へて、慶應の研究室に入り學位論文を書くために、試驗用の犬をたくさんつかひながら、目下勉强中であつた。

「友人の醫者があります。慶應の産婦人科で、外來患者も診てゐますから、何か方法があるかも知れません。ひとつ、それでよかつたら、相談をして見ませう。」

「さう。慶應あたりなら病院としては申分ないんだが、へんに高い費用がかかつたりすると、こまるな。」

「とにかく、きいてみませう。」

「さうしてくれると、僕にも、はつきりした決心がつくかも知れない。」

私は、その日にも、すぐ慶應病院へ出かけるつもりでゐた。

「こんな病人でゐながら、また出産さわぎとなると、僕もいくらか照れるんだが……。」と葛西さんは苦笑しながら、おハナさんのうしろすがたを指した。

「まさか、子供ができようとは思つてゐなかつたのですが、こればかりは、ほんとにわからないもんで……僕にしてからが、ずゐぶん健康を害ねてゐるし、おとろへてもゐるはずなんだが、それにほとんど一年中、そんな氣持はおこりつこないのに、ただ夏になると、それも年に一回——ほんとに一回くらゐは、どうにもならんやうな、ふしぎな晩があるんだ、たつた一回……それが、ちやんと、かたちになつて、あらはれてくるんで、まつたくやりきれない感じに、自分でも閉口頓首しちまふ。」

「……。」

とにかく、私は相談して、何とかよき方法を講じたいと、急いで信濃町の慶應病院に向かつた。

外來の診察時間がすぎてゐたので、友人の若い醫者は醫學部の方の研究室にかへつてゐた。

檻に入つてゐる赤犬を指さしながら、

「こいつに、また試驗するのだが、おれも相當に犬を殺したよ。」

そんなことをいひながら、友人は元氣さうに笑つた。博士號をねらつてゐる友人——そして私もやはり醫者にならうと、ひとたびは思ひながら方向をかへてしまつたが、いつのまにか、おいてきぼりをくはされるやうなことになつたのではないか。それやこれを思ひながら、

「實は君も知つてるだらうが、小說家の葛西善藏さん——あの人の奥さん、ま

あ奥さんなんだが、お産をひかへてゐて、どこかで簡便にすましたい希望なのだ。」

と、いろいろ事情や希望をいつて、便宜をはかつてもらひたいとたのんだ。

「西病棟といふ建物がある。そこに入つてくれれば費用なしに濟むから、さうしたらいい。方面委員の手つづきがゐることになつてゐるが、いつさい僕の手でやつてあげよう。心配いらないよ。」

友人は、何もかも引きうけてくれた。私はほつとした思ひで、葛西さんをたづね、

「大丈夫です。友人が萬事よろしくやつてくれることになりましたから……。」

と、細かいことを話した。

「さう、それで安心した。あなたの友だちは何といふ先生ですか。」

葛西さんも心から安堵したやうにいつた。

「藤井といひます。」

「藤井先生、藤井……おい、ハナ子、よくおぼえておけよ。お前は、いよいよ産氣づいたとなつたら、三宿タクシーで病院へ行けばいいんだ。みんな藤井先生がやつてくれるさうだ。なんなら……千之君にそのときだけ、いつしよについていつてもらへると、大へん都合がいいことになるんだがな。どう？　あなたとしては、出産のつきそひなんか、へんではあらうけれど……。」

「いや、かまひません。いつしよに、まゐりますよ。」

「さうしてくれると、たすかる。何しろ、僕は病氣だから……。しかし、ほんとに、何も要らないかな。何とか、必要なものがあらうし、準備するならしておかなくては。」

「いや、ほんとに要らないといつてゐました。赤ちやんのおしめだけでいい

はずです。かへつて、いろいろ持ちこまれると、向かふでこまるさうです。施療として扱ふのに、わんさと運び込む人があるとかで、それが迷惑らしいですね。」

「なるほど、施療として見れば、さうでせう。それはいいとして、お醫者へのお禮の方は、どうなるのですか。」

「それも、要らないさうです。私も、いろいろきいてみましたが、どうしても氣がすまないのなら、退院のとき醫局にビールを半ダースか一ダースとどけてくれれば、それで結構だといつてゐました。その程度で、いいではありませんか。」

「ビール――それですむなら、何しろ信州屋がついてゐるから、氣が樂でい い。いろいろなことで、厄介かけますね。」

かうして、四月二日の午後、三宿タクシーの自動車に 私はおハナさんと同

乗し、脱脂綿が入つてゐるといふ量ばつた風呂敷包をかかへて慶應病院へ急いだ。沿道の櫻は、ほころびかけてゐた。

西病棟といはれる施療の産院の、追ひこみの一室におハナさんは入ると寢臺の人となつた。あたりには、赤ん坊をかかへた産婦が起きてゐたり、寢てゐたりして、それが一齊にこちらを見た。

「明日の朝かも知れません。」

診察がすんでから、看護婦のさういふことばをきいて、私は外へ出た。神宮外苑の木立の間を歩きながら、私はふと、あの同室の産婦たちは、おハナさんのつれあひが私だと思つてゐるかも知れない、とそんな氣がした。どうも、じろじろ見る眼がへんに思はれたからである。

それにしても、おハナさんは葛西さんの奥さんなのかしら……さういふことにもなるだらうが、奥さんは郷里の浪岡にある實家に久しく別居してゐるとは

いへ、ちやんとあるはずだ。同棲してゐる女――そんなことで葛西さんは小説には書いてゐるが、葛西さん自身は　ただ一緒にゐるだけの女と、そんな風に思つてゐるのかも知れない。それにおハナさんも、自分ながら、妻であると思つてゐないやうなところが多分にある。葛西さんの場合は、それでいいのかも知れないが、何となく不思議な思ひが私にはしてならなかつた。

ゆくりなく私は、おハナさんのことが最初に出てくる『おせい』といふ短篇を思ひ出した。いはばそこから葛西さんとおハナさんの生活が、つづいて今日におよんでもゐるのであつた。

……

「近所では、お腹の始末でもしに行つた位に思つてゐるんでせう。さつきも柏屋のお内儀（かみ）さんに會つたら、おせいちやんは東京へ行つてたいへん綺麗になつて歸つたと、ヘンなやうな顏して視てましたよ。」と、ある晩もお酌をしなが

ら、おせいは私に云つた。

父の四十九日の供養に東京に出て行つて、私もそのまゝ弟の家の二階で病氣の床に就いてしまつた。肺炎の熱が續き、それから喘息季節にかゝつて三ヶ月餘り寢通してしまつた。その間ずつと、いつしよに出て行つたおせいの看病を受けてゐた。四十九日が百ヶ日を過ぎても、私は寺へ歸つて來れなかつた。「Kがお供をつれて歩いてる……」東京の友人たちの間にも斯う噂されたりした。「近所ではそんな風に思つてるのかなあ。何しろこの邊と來てはそんなことの流行るところだからな。……それではどうかね、ひとつ僕等もこさへて見ようか知ら。おせいちやんさへ構はないんだと、僕はちつとも構はないね。僕に落胤があるなんて、男の面目としてもわるい話ぢやないな」と、私も冗談らしく云つたが、しみじみと顏を視てゐると、やはり氣の毒な氣がして來る。

山の上の部屋借りの寺へ高い石段を登り降りして三度々々ご飯を運び、晩は

晩で十二時近くまで私の永い退屈な晩酌のお酌をさせられる——雨、風、雪——それは並大抵の辛抱ではなかつた。それが丁度まる三年續いた。まる三年前の十二月、彼女の二十歳の年だつたが、それがあと半月で二十四の春を迎へるのだつた。その三年の間、彼女は私の貧乏、病氣、癇癪、怒罵——あらゆるさうしたものを浴せかけられて來た。私はエゴイストだ。また物質的にも精神的にも少しの餘裕もない生活だつた。私は慘めな自分の力いつぱい仕事に向けるやうにして、喘ぐやうな一日々々を送つて來たのだつた。「少し長いものが一つ出來るまで世話して置いて呉れ。それさへ出來たらお前のとこの借金も返してやるし、おせいちやんにも何でもお禮をする。僕は仕事さへ出來ればいゝんだから、仕事さへ出來て金さへはいるやうになつたら、お前とこのお父さんにも資本だつて何だつて貸してやるよ」私は斯う子供にでも云ふやうなことを云つたりしては、叱つたり宥めたりして、自分の氣紛れな氣分通りを振舞つて來た

のだつた。おせいの家への借金もかなりの額になつてゐたが、三年經つたが、長篇どころか、この夏貧弱な全收穫の短篇集一冊出せたきりで、その金もおせいの家の借金へは廻らず、自分の父の死んだ後始末などに使つてしまつた。私はチエホフの『犧牲』といふ短篇が思ひ出されたりした。醫學生の研究臺となり、××機關となり、やがてその醫學生は學校を卒業して女と別れて行く、女はまた別の醫學生に見出されて同棲して同じ生活を繰返される――おせいと自分の場合とは違ふとしても、二十だつた娘がもうぢき二十四になる――この三年間のことを考へただけでも自分は氣の毒にならずにゐられない。何と云ふ忠實ないゝ娘だつたらう。せめて×的にでも慰めてやるべきだつたらうか。が自分は今、春になつて雪でも消えたら、遠く鄕里の山の中に引込みたいと思つてゐるのだ。自分はその時のことを考へると淋しくなる。自分のやうな人間のために多少でも婚期に影響した――そんなこともあり得ないとは或は云へない

も知れない。

「關係してるんだらう。ないと云ふのはどうも嘘らしいな。案外君と云ふ男は何にもしてゐないやうな顏してゐて、何でもやつてるんだからな、わかりやしないよ。さうなんだらう？　また君としても、關係してゐると云つてる方が氣が樂ぢやないか」と、ある友人が私に云つたりした。

「まあさうだな。それではさうと云ふことにして置くさ」と、私も苦笑するほかなかつた。

……

大正十一年二十三歳だつた、おせいならぬおハナさんは、いつしか二十九歳となつた。昭和三年の春、四月三日――神武天皇祭の日に、二度目の女の子を産んだのであつた。

一週間で退院、母子ともに至極健在、名前も久美子とつけられ、お七夜には

心ばかりの祝ひの小鯛などととのへられた。そして、藤井醫學士も呼ばれて病床の葛西さんの前で、盃が重ねられた。

葛西さんは以前のやうに盃を客にささなかつた。のみならず、自分用の德利と客の德利とさへ別にさせ、話をするときには片手を口にあてて、息が人にかからないやうに氣をくばつた。それほど、みづからの病氣を自覺してもゐたのであらう。

いままで何もかかつたことのない床の間には、古岸何人かの軸が鼠色の揉紙で表裝されて、上から下までいつぱいに垂れてゐた。額緣にはまつた感じで、枯淡味を帶びた筆のあとも一段と引き立つて見えた。

「ちやうど信州屋の爺さんが持つてきてくれましてね、自分で床の間へかけて、こりやいいとながめてゐましたよ。」

盃を持つたまま、葛西さんは身體を半ばねぢつて軸を見やつた。

「名前がほしいですね、善藏とか、あるひは善一字でもいいぢやありませんか。」

私は、そばからいつた。

「いや、自分の部屋にかけて、自分で見てゐるんだから、それはない方がいいと思はれるんだ。むしろ、四角い小さなハンコを一つぐらゐなら、横つちよに押すのなら、落ちつきができるかも知れないが……。」

「落欵がなくては、折角の字が……。」

藤井醫學士も、そんなことを、さしはさんだ。そこで、私は

「さうですよ、落欵はあゝませんでしたか。」

「そんなもの、ありませんよ。」

葛西さんは、にやにや笑つてゐた。

「では、この際ひとつ彫つてもらはうぢやありませんか。いい先生がゐます

よ。篆刻の方の……。」
さういつて、私は石井雙石氏の話をした。私の父がよく知つてゐたし、父自身も印刀などそなへることはそなへて持つてゐた。私は雙石氏なら、きつといいものを彫つ くれるにちがひないと思つた。
「それでは、たのみますかな。しかし、あんまり大きいのはこまるな。四角い、小さいのでいいから。葛西善藏と四字を——書體は先生に一任してください。」、
「承知しました。さつそく、父からたのんでもらひませう。印材も適當なものをえらぶことにして……。」
そんな話をしてゐるところへ、玄關があいて誰か客らしかつた。
おハナさんが寢てゐるので、親戚の淸藏君がとりつぎに出た。
「岡本さんと田村さんです。」

「入つてもらつて。」と葛西さんはいつてから私の方を向いて、「知りませんか。やつぱり弘前の人で、帝大の學生なんだが、岡本君と田村君といふのを。

「知りませんが……。」

「佐佐木さんにもあひたいと、いつかもさういつてゐたから、ちやうどいいところだつた。」

そこへ、制服をきた二人が入つてきてお辭儀をした。二人とも背が高かつた。私たちは紹介された。太つて髭のあとのこいのが田村君、瘦せて髮を長くした方が岡本君であつた。

「支那文學を專攻してゐる人たちですよ。高等學校は弘前で、佐佐木さんの長篇なんかも讀んだらしい。」

葛西さんは、學生の方を向いて、さらに念を押すやうに、

「さうでしたね。」
ときいた。
「は。」
二人とも、うなづいた。
「いろいろ、その方面で力になる人ですよ。佐佐木さんも若い時分から——多少の苦勞はしてきたし、今も若いことは若いが、まあ、兄貴株として、つきあひなさいよ。」
學生たちに向かつて、葛西さんはいつた。
二人は、よろしくといふやうに頭を下げたが、その頭をもちやげると同時に、岡本君は垂れさがつた長髪をかきあげるやうにして
「いつか『弘前の郭公』といふのをお書きになりましたね。あれも拜見しました。」

と、私の方を見て、はにかむやうにいつた。
「いや、どうも。」
すると、葛西さんが、
「そんなのは、いつ書いたかしら。僕、知らないな。」
と、岡本君が、
「弘高時代にみんなでやつてゐた『北方文藝』に出たのですが……。」
「さう。」
葛西さんも、それでうなづいた。私は、見知らぬ郷里の人から、隨筆を一篇たのまれて書いたのであつた。
「對島秀司といふ人から手紙をもらつて、原稿を送つたやうに思つてゐますが……。」
私がいひをはらぬうちに、田村君が、

「對島が編輯人になつてましたから。」
といつた。(對島氏は、のちの太宰治氏である。)
つぎの日、岡本君と田村君とが連れだつて私の家へ遊びにきた。私は本箱から本を引拔いては林檎の空箱につめてゐたし、家の中は、いたるところ散らかつてゐた。ふじきに思つたのか岡本君が、
「どこかへ引越しするのですか。」
とたづねた。
「近いうちに移ることになつてゐるものですから……。」
「どちらへ。」
「駒澤の方です。」
「駒澤つていふと、三軒茶屋よりまださきですね。どうして、そんな遠くへ。」

――實は、駒澤のゴルフ場近くの麥畠の中に、私たちの家が建ちかけてゐたのであつた。永年官吏をつとめた父も一年ほど前に退職し、折から去年の暮も迫つてから、麻布にある舊藩主の邸が他へ移るために、取りこはしになつた際、邸内に建つてゐた貸家を、すすめられて父が安く讓りうけ、一たん取りこはして、少しばかりの地所を借り、そこへ移築したわけで、家も古かつた。しかし、木柄がいいことと、安いことに魅きつけられたのである。

そんなことを話すと、二人の學生は、引越の日は、ぜひ手つだひたいから知らせてほしいといつた。

壁がまだ乾ききらなかつたが、四月八日の日曜日に、私たちは三宿から駒澤へ引越した。花季にはめづらしい快晴で、日暮れ時分にはどうやら片づき、盛蕎麥にビールなど飲む氣持は、ほつとした感じのものであつた。酒を飲まない父は、二階の欄干に立つて、遠く丹澤あたりの山脈の上に、落日をのんで青く

聳えたつ富士山を眺めてゐた。
朝から手つだつてくれた岡本君たちが、そのとき
「われわれで何か雑誌をはじめようではありませんか。葛西さんと佐佐木さんがめんだうをくださると、一種の特色ある北方文學が成り立つのぢやないかと考へてゐますが……。」
そんな話を、とつぜん持ち出したのである。プロレタリヤ文學がさかんになりかけてゐた時分であつたので、純文學の旗旆を鮮明した純粋な同人雑誌をつくりたいといふ希望らしかつた。私も、それには賛成だつたので、
「やつて見ませうか。」
と、こたへると、
「われわれは、走りつかひをしますから、ぜひ編輯の方をやつてくださいませんか。きつとおもしろいものができますよ。」

大へんな張り切り方であつた。ここに、ゆくりなく文藝雜誌發刊のことがおこり、とりあへず『北方文學』といふ題號が決められたのである。

「同人格の一人として、僕にも口を出させてくれませんか。」

葛西さんは計畫を知つて、そんな風に力になつてくれた。で、雜誌は葛西顧問とも同人四人、題號も、いろいろ相談のする、

「どうせやるなら、たとへ頁が少くつても、『北方文學』なんて隅つこにかくれるやうな遠慮はぬきにして、いつそ王國――『文藝王國』としようぢやありませんか。單なる鄕土背景なんかやめて、ひろく藝術の世界を中心とした、一般讀者を相手にするものにした方がよくないかな。」

といふ葛西顧問の意見にしたがつて、其社を私の家におき、方針も題號も改め、六月號をもつて創刊といふことに決まつた。

『文藝王國』創刊號は五月下旬に製本ができ、私たちは書店を廻つて委託し、

やがて雑誌組合に加入した。わづか四十八頁のものであつたが、できるかぎり内容を豊富に盛るため苦心をした。日數も十分でなかつた。それでも創作七篇、感想評論あはせて十篇といふにぎやかさで、創作には郷土出身の詩人福士幸次郎氏の小說などの異色篇があつたり、感想では生田春月氏のものなど光つてゐた。私は『懷郷雜記』といふ故郷への思慕のやうなものを書いた。

そして葛西さんは創作を書かうと病をおして十日ちかくといふもの想を練つてゐたが、それが間に合はず、三枚の短文を寄せた。わづか三枚ではあつたが談話筆記の感想しか發表してゐなかつた葛西さんがペンを執つた原稿としては、久しぶりのものである。

それは『お詫び』と題され、つぎのやうな內容であつた。

…………

どうせ五六枚の小品なのだが、それでも何とか創作としてゴマカシの利くや

うなものを、『文藝王國』に書く約束だつた。それで、だん〳〵日が迫つて來るので、午後の五時頃になつてやう〳〵七度三四分まで熱がさがり、少し頭が好くなつたところで机に向つて見るのだが、やはり三十分と續かなかつた。書かうと云つたところで極めて簡單なことなのだが、そんなことにすらピントを合せられないほどに、自分の神經は弱つてゐるのだ。それに、普通呼吸器の熱は午前は低く、午後になつて昇るのが多いのださうだが、自分のは大體が乾性肋膜のかなりひどいのを何年か打ちやらかして置いたのが原因ださうで、そんな關係からでもあるのか、未だに晝間は七度七八分から出るので、一日中頭のカラットするやうな時刻がないのである。來る日も〳〵、倦怠と無力と呻吟の連續である。けれども、自分にも不思議に思はれるほど、晩酌の味だけは變らない。恐らく自分は死ぬまで酒だけは禁めれないであらう。先々月二日程喀血したが、四五日目から自分はまた晩酌を續けて來た。「だが、斯んな狀態で

は、結局唯晩酌をやるための安靜療法と云ふことになりはしないだらうか？」

と、さすがに自分も苦笑と自責の念に打たれたことがある。

が、自分もまさかそんな氣持からばかしではないのだが、實は自分も一年餘りの病氣生活で、これ以上醫者や藥物を賴りにしても、仕方がないと云ふ氣がして來てゐるのだ。それに今のところ幸ひに所謂小康狀態である。自分はやはり一日のうち三十分でも一時間でも机に向ひ、半枚でも一行でも仕事をする氣になつた方がいゝ。十分でも二十分でも仕事に全神經を集注させる。それが最上の療法であり、他に自分を救ふ道はないのだと云ふ氣がされるのである。そんなわけで、自分はまた久しぶりでの執筆生活の首途としても、悅んで『文藝王國』の原稿を約束したのであるが、やつぱし間に合せることが出來なかつた。自分は昨今三十九度からの熱が出て、耳鳴りがしたりして弱つてゐるのだが、それには心配しないでいゝ原因がわかつてゐるので、こゝには書かないこ

とにする。佐佐木君は口述でもいゝと云つて呉れるのだが、自分としてはこれでも大いに勇氣を出したつもりなのだから、今回はこれで許していたゞきたい。——昭和三年五月——

…………

で、創刊號は表紙をのぞくほかは無難のやうだと、葛西さんが批評したが、次號からは編輯會議をひらいて、すべてを決めることにした。

第八章

無名時代からの古い友人である宮地嘉六氏が、葛西さんの病氣を案じて三宿へ老醫師をつれて、たづねてきたのは五月十九日であつた。

老醫師は王子病院長で佐久間氏といひ、打診が上手であるばかりでなく、胸部の疾患には獨得の注射療法をほどこし、かなり重い病人を何人も治したといふ。このことをきいて、あらかじめ醫師と同道する旨通知したのち、往診といふことになつたのであるが、佐久間氏は葛西さんの身體を診て、決して絕望す

べきではなく、この程度なら大丈夫くひとめられるといつた。佐久間氏は葛西さんの症状について、細々と說明したが、その適確なところを見て、葛西さんもうなづいた。

ちかごろは解熱劑の濫用といふことが問題になつてゐる。そして解熱劑の害は患者の皮膚の上に最もよくあらはれると、老醫師は語り、呼吸器がよくなれば輕微の腎臟炎も治る、それに呼吸器病につれておこつた腎臟病であるから、腎臟がわるいといつて榮養物を避けるのははなはだおもしろくないので、どんどん榮養をとつて呼吸器の方をよくすることがよからうといつた。

なほ、酒も少しくらゐは害にならない、かへつて、熱の出る時の不快をおさへるのに効目があるともいひ、この日から注射をはじめたのであつた。

ところが、四回目の注射をしたころから發熱し、毎日三十九度以上の高熱に惱まされたのであつた。淸藏君が宮地氏のところへ、使ひにいつて容態をうつ

たへた。宮地氏が佐久間氏を訪ねて反問したところ、老醫師のいふには、注射療法として最初のあひだ、少し熱の高くなるのは已むを得ないとのことであつたが、三宿の葛西さんへ、これをしらせに見えた。

あまり高熱に惱まされるので、相田醫師に來て診てもらつたところ、肥つた若い相田さんは、折角きこえなくなつたラッセルがまたきこえるやうになつたといふのである。

「宮地君としては、ずゐぶんの確信を佐久間老醫師に抱いて、自分にすすめてくれたんでせうが、どうもあの漢法醫さんの注射といふものは、ちよつと僕には苦手ですね。反應があんまりひどすぎて……。」

葛西さんも閉口したやうに私にいつた。それから、ある日、佐久間氏が自分のあつかつた患者の檢溫表などをもつて、葛西さんへやつてきたりして、注射の効能を說いたことがあつたやうであるが、葛西さんも、だいぶ疑惑をいだく

やうになつてゐた。それでも、「友人に相談すれば、むろんよせといふから、試み　やつてみたのだが、やり出したからは繼續したいと思ふが、熱の高まるのには、やりきれない。」と、宮地に向かつてはいつた。それに宮地氏も不安を知つたので、中止したらよからうといひ出し、老醫師の注射は六回かぎりでやめることになつた。宮地氏にしてみれば、佐久間氏をつれていつたために病氣を悪化させたといふことになつても申譯ないと思つたのであらうが、事實病人を診察したうへで、全治すると申し上げたいが、それはいまの場合遠慮する、しかし書きものをするに耐へられる程度の恢復はうけあふことができます——と、さういつた老醫師のことばを信じたのであつた。

例の注射の結果が思はしくなく、高い熱に惱まれた直後のこと、私は四六判四百頁ちかい校正刷を葛西さんに讀んでもらふために、持ち込んだ。長篇三部作の完結篇で『戀愛行』と題され、それはそれで獨立した一篇の小説をなして

ゐるつもりなのだが、書名が確定してゐなかつたのである。私としては、各巻五百枚づつ、とにかく千五百枚を八年目に完成したので、郷土の先輩である葛西さんに跋を書いてもらふことにした。

さうは思つても、病苦の中にあつて仕事のできないでゐる葛西さんに書いてもらふことは無理かも知れず、校正刷を讀むことさへも、さう簡單ではないはずであつた。迷惑は重々承知のうへでも、やはり私はそれを期待し、已むを得ない場合は、口述を筆記させてもらつても、何等かのことばをつけて、世に送りたい氣がした。

ところが葛西さんは、わづか二日間で讀みをはり、あまつさへ、みづからペンを執つて原稿紙九枚にわたる長文の跋を書いてくれたのである。

「割合に、らくに書けましたよ。まあ持つていつて、家で讀んでみて、氣に入らなければつかはなくつても、かまはない。自分としては氣持よく書けたもの

だけに、とにかく讀むだけは讀んでもらひたい。それから、本の題は、『戀愛行』のままが、かへつていいやうに僕には思へるんだが……さういふことに決めてしまひなさいよ。」

「では、さう決めませう。」

私は涙ぐまれるほど、病軀を押して示してくれた葛西さんの好意を、しみじみありがたく思つた。

大切に手に持つた原稿を、私は正座して自分の机の上にのせ、しばらく眼をつむつてから、一字一句をたのしむやうにして讀んでいつた。批評にはおよそ、苛烈といふか峻嚴といふか――さういつた秋霜烈日の切れ味をもつた葛西さんのことゆゑ、いづれは、こぴつどくやつつけられてゐるであらうと、あらかじめ覺悟をしながら――。

……………

どこか北歐あたりの、すぐれた藝術家の自傳小說でも讀むやうな氣もされる。と云つて特にさうした例も見出せぬのだが。飽くまでも純情で、明暢で、素直である。さうした匂やかさが、そんな聯想を起させるのかも知れない。

佐佐木君がいつかの時事文藝欄に、藝術的な新らしい長篇小說の時代が來なければいけない、來るべきである――と云つたやうな感想を書いてゐられたが、さうした要求を君自身のこの『戀愛行』でかなりの程度にまで裏附け得てゐるやうに思はれる。立派な成績だと云つていゝ。自分は心から君の成功を祝したい。この上は、比較して云ふのではないが、往年の藤村氏の『春』が當時の青年讀者を動かしたやうに、この創作が今日の新らしい靑年讀者の間に汎く迎へられることを祈るものだ。彼には爛熟の『春』の惱ましさがあり、これには早春芽生えの悶えと匂やかさがある。

從來の君の短篇からは、自分はいつも斷れ〳〵な印象しか受けてゐない。短

篇小說と云ふべく、餘りに斷片的な感じである。たとへば春の野山の――それも北國の雪の消えて間もなく萌え出る早蕨と云つたやうな感じである。自然の新味もあり、またちよつとホロ苦いやうな凝つた味もないことはないが、如何にもポキン〳〵と折れ易い賴りない感じである。一種の輕い意味での風格もないではないが、兎に角人間味とか生活味とか――さう云つた動物性の臭ひが稀薄過ぎるやうに思へるのである。これ或は、君の周圍とか環境とかが、君をいたはり庇ひ過ぎて、そのため却て君に鬪ひかけて行く目標を與へないのではないか知ら。さうだとすると作家として危險なことだと、自分はひそかに不安を抱いたことゝあるのだが、今度の作を讀んでそれが杞憂であつたことを知り、作家としての君の前途にかなりの心强さを與へられたのである。君はやはり立派に藝術家として鬪つて來てゐる。鬪ひつゝある。また恐らくは鬪ひ續け得るであらう。

て、この作は、決してさうした斷片的なものの寄せ集めではない。一貫した小說である。がまた、從來の短篇は、この一作を仕上げるための下書きであり、習作であつたと云つても、それほど作者に對して失禮な言葉にはならないかも知れない。それにしても、短篇の場合では餘り成功してゐるとは思へなかつた君の輕い筆觸が、この作では實に好く活用されて、暢達で、自由で、かなり息詰まるやうな迫つた場面を描いても、どこかのび〳〵した素直な感じを與へる。短篇の場合ではどうかすると、輕く逃避するやうな態度を見せるのだが、この作ではそんな逃げ腰や尻込みを見せないで、率直に忠實に、かなり退屈さうな細かいところまで這入りこんで描いてゐるのは、たいへんいゝと思ふ。で斯う云ふ單に文章上の進步と云ふ意味から云つても、作者はこの二三年、漫然と若隱居ぶりの停頓をやつてゐたのではないと云ふことを、ハッキリと示し得てゐると思ふ。春は春であつても、最早、早春の早蕨の感じではない

のである。

君が、若し僕の空想を君の出生地である札幌の方へと運ばせて呉れるならば、僕は敢てこの作品の全體の感じを、あの札幌附近の新春五月の落葉林の新綠の美にたとへたいのだ。それが一本々々として見れば、單なる稚木の一本と云ふに過ぎないのだが、これを一眸の眺めとして、あの春光の下に陽炎立つてゐる煙のやうな新綠の美は、最早單なる自然美ではない。立派に區劃せられ、整理された造植林の美である。植民地特有の新しい美と云つてもいゝかも知れない。それは最早、自然性のまゝそこらの野山に點々として萠え出る蕨の美を聯想せしめるやうな、作品ではないのである。立派に作家的頭腦に依つて區劃せられ、整理された創作品である。さうした才能の持主である君は、今後の新時代の潮流に棹さして、果してどの邊まで漕ぎ附け得るものかは、自分としては好意的興味を以て、氣長がに傍觀してゐたいと思ふのである。それに、君は

まだ若い！　やうやく二十七歳の青年である。自分は處女作哀しき父といふ斷片小説を同人雜誌に書いたのは二十五歳の時であるが、それとこれと今更比較して云ふのではないが、單に努力と云ふ點からしても、自分は心から君に敬意を拂ふに吝かなものではない。
ついでだから云ふのだが、君はよく故鄕と云ふことを口にし、また書きもする。未だに何か特別な憧憬を抱いてゐるのではないかと、思はれるほどである。單に傳統的な故鄕と云ふだけの弘前、少年期の幾年かを過したであらうだけの靑森——と云つてもさうしたハッキリした感じのものでゝなく、もつと漠然とした、單に北の雪國の鄕里と云つた感じに、一抹の淡い鄕愁めいたものを寄せてゐるのではないかとも、思はれるのである。實際君は鄕里のことはほとんど知らないのだ。鄕里の生活はして來てはゐないのだ。それだのに、君は未だにしばしば鄕里のことを口にし、小品にも書いてゐるのを見て、自分はいつ

も極めて單純な微笑を感じてゐたのだが、今度の作品を讀んで、稍々首肯かれるところがある氣がした。つまりは君は、特に故鄕と云つたものを持たない人なのだ。單にその土地に親味を持つてゐると云ふ點からしたら、唯傳統的に故鄕と云ふだけの弘前よりも、或は札幌に、木曾に、もつと深い親味があり、その土地の生活にも喰入つてゐるのである。だが君の場合では、結局その札幌も木曾も、第二の故鄕でも第三の故鄕でもなくて、都會が――第一の故鄕でもあり第三の故鄕でもあつたのだ。この故鄕と云ふものを持たない少年の主人公が、初めて與へられた都會といふ鄕里に向つて、如何に精一杯の純情を以て呼びかけ、その愛を求め、また同時に移植された稚木が新しい土地に根を張らうとする惱みと努力の、一篇の記錄であると云つてもいい。それは決して他に別に故鄕と云つたものを持つた青年の、働きかけ方ではないのである。

一體に自分は、鄕土人の鄕土臭いのには、餘り好感を持たない方である。藝

術に國境がないと云ふが、藝術家もまた特に郷土といふ着色を帶びない方が本當であり、藝術家の心境は常に無色透明に解放されてゐるのが理想かとも思ふ。さういふ點では、君は完全に郷土臭を脱してゐる。純粹な弘前人の好い傳統型ではあるが、その土地に生活してゐないので、また特にさう云つた臭味と云ふものも殘されてはゐないのである。特に郷土人らしい偏つた感じ方、見方をしてゐないと云ふことは、自分にはたいへん氣安い感じを與へるのである。また實生活の人としても、自分等同郷人が寄り合ふとぢきにヂョンカラ節とかヨサレ節とかを唄ひ――それが無意味な誇張であり自慰的な感じのものでさへある――さう云つたやうな場合にも、君はアッサリと木曾節の二三句を、輕妙な踊りに合せて唄ふと云つた趣きの人である。さう云ふ點からも、自分は非常に氣安い感じで、君と附き合つてゐられるのだと思ふ。

もう一つ餘計なことを書くやうだが、自分はこの作中での父と子との關係

を、非常に興味深く讀んだ。父は子の藝術志望に反對しながらも、結局子の藝術的素質を培つてゐたのである。藝術家の卵は決して偶然には孵らない。雄鷄のギゴチ無さはあつても、父は終始變りのない周密な心遣ひを拂つて、その羽交ひの下に溫める役目すら、意識しないうちにも勤めて來た——と云つてはたいへん失禮なことになるかも知れないが、しかしこれは實際に自分の受けた好い感銘である。

あの木曾での父と子との自炊生活の如きは、それ自體として立派な藝術生活であり、藝術品と云へるだらうと思ふ。決して誰の上にも惠まれるやうなザラにある生活ではないと云ふ氣がする。そして佐佐木君が未だにさうした父や家庭にいたはられ、護られてゐると云ふことは、自分なんかには寧ろ涙ぐましい感じのものである。

最後に、君の作品や人柄全體としての感じを君の所謂鄕愁めいたものを寄せ

てゐる雪國の鄕土から求めるとしたら、自分はやはりあの單白色の餘りパットしない林檎とかマルメロとか云ふ樹の花を擧げて來たいと思ふ。一見單純な白のやうに見えて、決してさうではない、キザでも下品でもない程度の溫かい紅を含んでゐるのである。それにあの何よりもしつとりと潤ひを持つた、厚味のある柔かな感じ――あの薔薇科特有の花の持味は、君の場合には適はしくはないであらうか。そして花は雨にも風にも強くまた樹膚のあの柔かい觸感を持ちながら、訓練には實に堪へる樹だと思ふ。――この邊で筆を擱きたい。

……

一讀し再讀し、さうして三たびくりかへして私はその文章を、昇ぶる心をしづめるやうに努力しながら味はつた。熱い涙にいつしか私の頰は濡れてきた。かうまで葛西さんにいはれては、いまさら何の不足があらうか。

「きつと、訓練に堪へられる樹となつてみせるぞ。」

私はわれとわが心に、力強くさういつた。私は、じつと頭を垂れ、葛西さんよ、どうか永く生きてゐてくださいと、祈るやうに兩手を合せた。

久方ぶりにペンを執つたことから、

「これで筆ならしもできたし、これからは創作もぼつぼつやりたい。」と葛西さんはいひ、『病床小品』『死せる魂』『死床を飾る』などといふ腹案中の題名を書いて見せたりした。例の『醉狂者の獨白』以來二年ほど創作ができない葛西さんに、仕事の希望が湧いてきてゐることは、何かしら氣强い思ひをさせたのであつた。

ことに、『病床小品』といふ總題のつけられた作品は、『文藝王國』に毎號掲載の心組にしてゐたもので、その中の一つである『半折の半折』といふのが、すでに幾日も幾日もかかつて冒頭三枚ほどが書き出されてゐた。老醫師の

注射をしてゐたころで、熱のために苦しんでゐた最中のことである。

それは、葛西さんが病苦に惱んでゐることから書き出され、三月なかばのある日、字でも書いて見たら頭が少しさつぱりするかも知れないと考へて、襖を立てきつて、自分で墨を磨り、字を書いてみた。自分の近頃の心境に一番ぴつたりしてゐる文句を——古岸何人把釣竿明月蘆花君自看と、しかも何枚かの書き損じのあとで、半折を半分に切つたものに書きあげ、自分でもちよつといいと思つた。創作よりも一歩進んだこころもちが出てゐたので、それを長押にピンでとめて眺めてゐるうちに、喀血した。そして、かねて醉つたうへで書いた短冊と何かとかへる約束をしてあつた某君に、この際進呈したらば……と考へ、進呈することにした。

——それだけの筋であつたが、それをば、言々句々身を削る思ひをこめて、名描寫の文字をしぼり出してゐたのである。

で、そのとほりに、すでに古岸何人の軸は私の手にわたされてあつたが、石井雙石氏の刀になる象牙に古篆で葛西善藏と彫られた落欵だけが小さく押されてゐた。

「ここへおくと破ることになるかも知れないし、何も差しあげるやうなものがないから、記念品として進呈しませうや。」

さういつて、軸の裏に、「昭和三年三月十一日　善藏」と一筆を加へて、私にわたした。そのわたし方が、秘術の極傳を書いた巻物でもさしのべるかたちを思はせたので、私は心ひそかに、いにしへの張良が白髪の老人から一巻をうけとる光景をしのんだりした。

六月の中旬に、葛西さんの病室で、私たちの雜誌の編輯會議が開かれた。その晩は私の妹も、葛西さんの家の臺所でおハナさんといつしよにコロッケなどをつくつた。——コロッケのやう　ものをユウ子に食べさせたいが、どうつく

ればよいか、妹さんに教へてもらひたいといふことで、そんな手料理をすることになつたのであつた。

できあがつたコロッケを、葛西さんは黒い箸で千切つては口に入れ、首をかしげて味はつてゐたが、

「うん、これなら、僕でも食べられる。」

と、いつた。

同人の岡本、田村二君は、約束の六時を大分すぎてからやつと見えた。で、そのあひだに、表紙のことだの、創作欄の順序だの、その他細かいことなどを大體決めてしまつた。二君は所用あつての遲刻であつた。それで、春もとめた花林の唐机には白いレースのクロースがかけられ、これも春手に入れた瓢箪なりの青銅の花瓶に、葛西さんが愛玩措かなかつた庭前の薔薇の一輪が生けられてゐた。初夏の微風のながれくる夜の空氣にも、なごやかなものが感じられた。

「病床だより――さういふ意味からも、何かを毎號『王國』へは載せていきたい。『不同調』の感想は、あれでつづけるつもりとしても、何しろ、あれは談話ですから……。やはり自分としては、どんな短かいものでもペンをとりたいと思はれるのだ。」

葛西さんは、そのときも、さういつた。『不同調』の感想といふのは、嘉村礒多氏の筆記によるものであつた。

そのころは、すでに『葛西善藏全集』の企畫が改造社において成立し、全作品が集められてゐたが、裝幀は平福百穗氏を煩はすことになつた。その原稿もできてきた。

「百穗さんは同じ三宿にもゐるし、僕は會つたこともないんだが、白田舍と表札の出てゐる家の前は、何べんも通つて知つてゐるし、東北出身でもあるし、そんな風なことから改造社の出版部の人に話したら、たのんで見ようといふこ

とになつた。百穗さんも、快く承知してくれたんで、僕としても、ほつとしたんだ。それにできてきた裝幀も、なかなか立派なものだつた。やはり、どこかちがふんですね。妙なものですよ。もう少し、健康を恢復したら、僕の方から、一度はたづねて見ようと思つてるんだが……。お禮の意味からも、近所に住む緣故からも。」

で、六月のなかごろに、全集の豫告が發表された。四六判で全三卷、平福百穗裝幀、天金絹裝木版十數度刷、定價一冊二圓五十錢。そしてその文に曰く――

『哀しき父』『惡魔』『贋物』等徹底リアリストの風丰に加ふるに詩人の肌合を以てして、暗澹たる生活苦の重壓を壓搾的確に表現してより『子をつれて』『遁走』『馬糞石』の頃の愈愈なる世道の艱險と藝術の慘苦との限りは、幾度か故鄕山河への遁走の中に、氏の作と一朝文壇一流としての重きを成してゐた。爾來、原始的哲人の面影深く、東洋詩人のテムペラメントに益々獨自の世

界を開拓し、或は寝る外に、酒の外に、分別なく木槿の花を感じ、風雪の中に肅然呪はしき手を重ね温め來つた。精進十數年。遂に文壇獨歩の至境は『おせい』『蠢く者』『椎の若葉』『湖畔手記』『血を吐く』等々の傑作と凝り、打込んだ藝術魂の跡、歴然と血をふき讀者を魅了し、感激おく能はざらしむるもののみ。今や文壇擧げて氏の全集の成るを切望し著者また大いに邁進を期するあるは更なり、病床に指呼して大方に待つ、愛讀を乞うて歇まぬ所以である、と。

ちなみに、第一卷には大正元年九月より同九年四月までの計二十三篇、第二卷には大正九年五月より同十二年四月までの計二十三篇、第三卷には大正十二年九月より昭和二年四月までの計二十篇――合計六十六篇の小説が網羅されたが、向後は別として、これが十七年間の全作品であつた。寡作家といはれる所以も、またここに存するのであらう。

葛西さんの寡作については、一つの挿話がある。それは、この春のことであ

つたが、同郷の詩人福士幸次郎氏が、ひよつこり見舞に見えた時のこと、談たまたま作品のことにおよぶと、

「福士君は、永いこと詩をやつてゐるやうですが、みんなで何篇くらゐの量になりますか。」

と葛西さんがたづねたのであつた。福士氏も寡作の方では詩壇随一といつてもいい人であるが、しばらく考へて、

「五十篇以内でせうか。」

と、こたへた。二十二歳で詩を書き出してから二十年このかたの作品のそれが數であつた。

すると、きいてゐた葛西さんは、

「それぢや、僕は書きすぎた。」

感慨ふかさうに、つぶやいたのである。そして、福士氏と葛西さんの對面

は、おたがひに同郷人でゐながら、これが二度目であつた。
梅雨季に入つて、喘息の發作がおこつた。それは、これまでにない、かなりひどいものだつたせゐか、衰弱も目立つて日に日に加はつていつた。五月の雨降りの日に二度も行水をして感冒をひいたのが、原因であつた。
私の長篇第三卷は葛西さんのねんごろな跋文をつけて、やうやく製本出來、發賣のはこびとなつた。私は何よりもまづ一本を病床の葛西さんにおくつたのであつた。
ある舊友の人の好意で金策のととのつた日——七月三日であつたが、
「千之君、大へん氣の毒なんですが、小島君の家、知つてゐますか。」
と、葛西さんは、片手で口を蔽ふやうにしてきいた。
「小島さんといふと……。」
「政二郎君よ。」

「知つてます。根岸でせう。」
「ひとつ、用事をたのまれてくれませんか。」
「よろしうございます。」
「實は小島君が、いつか小說で書いたことがあるんですが、喘息に特効あるアストール器といふのを、どこで賣つてるか教へてもらつて、その足でついでに買つてきてもらはうと思つて、おねがひするのです。」
それをいふのにも、ひどく咳きこみながら苦しさうであつたが、やはり喘息に惱まされてゐたのである。
私は、雜誌記者としてたづねたことのある、鐵道線路にほど遠からぬ小島氏の家を根岸に訪ふた。そして、いろいろ事情をつたへ、敎へてもらつたとほりに、アストール器を買ひ求めた。
さつそく試みると、發作をとめることができ、安眠することを得た。それか

らのち、葛西さんは、文藝春秋社の代理部へいけばユーカリ吸入器といふのを賣つてゐるはずだから、買つてくるやうにと、私にいつた。アストール器は二回ほどしか用ひなかつたが、發作は止まることは止まつた。何となくまた廣告を見て、新しい器具を使用してみたい氣になつたらしく、

「文藝春秋社へ行つたら、鈴木氏亨君を呼んでもらつて、僕がさういつたからといへばいくらか割引の値段で買へるかも知れない。」

そんなことをも注意した。さつそく私は、文藝春秋社へいつて、鈴木氏に會つた。

「さう。それでは、これを使つてみるといい。葛西さんによろしく。」

鈴木氏は、どうしても代金をとつてくれなかつた。葛西さんは、毎日のやうに、ユーカリ吸入器を出して、いろいろといぢくつては管を鼻の穴にあてがつた。

いづれにしても、入梅どきを東京で過すことが、一番いけなかつた。このことは病人が最もよく知つてゐた。轉地がのぞましかつたのであるが、それには、經濟的な方面で安心ができないわけがあつて、簡單に實行されなかつた。しかも、かかりつけの相田醫師には、六月の晦日に勘定をすますと同時に、しばらく藥をやめてみるから、時々診察にだけきてほしいと、葛西さんが自分でいつて、巷間の醫療器にたよらうとしたのであつた。

そこで、葛西さんは、圓本の印税をもう少し前借して、それで一切を整理して、ひとまづ郷里へかへりたい。そして、山間に小屋をつくつて、自然療法をやつてみたい。また、それより自分としては方法がない、藥など効くものではないと、しきりにいつてゐた。

さういふ葛西さんの意をふくんで、私は、印税前借の最後の交渉を開始したのであつたが、もはや一月餘になるにもかかはらず、なほ吉報をもたらすこと

ができなかつた。

そのあひだにも病勢は、とみにすすみつつあつたのである。

第九章

葛西さんの病氣を案じて、轉地させようと、いろいろ奔走し、ほぼその成案を得た人があつた。『奇蹟』以來の友人廣津和郎氏である。これまでも廣津氏は、經濟的な方面のことで、何かと心配したし、事實轉地も實現させることができるところまできてゐたのだが、葛西さんに對する或るこころもちから、それを廣津氏の方で斷念したばかりでなく、病床をすら見舞ふまいとまで思ふやうなことになつてしまつた。そして、このことは當の葛西さんも、このときは

知らなかつたが、やがて、のちに明らかとなつたのである。

七月十日、新聞に葛西氏重態の消息が出た。

それから二日のち——私は葛西さんの意嚮もあり、また私たちの望むところでもあつたので、牛込に谷崎精二氏を訪れ、『文藝王國』八月號のために感想一篇を依頼した。締切日も迫つてゐたので、

「書いていただくのも恐縮ですから、話して下さいませんか。」

と私はいつた。

「近頃の感想といつて、べつにないですな。」

谷崎氏は書齋の机の上に鏡を立てて、髭を剃つてゐる最中だつたが、糸切歯を見せて弱つたやうにいつた。

「筆記しますから。」

私は、すでに鉛筆をとり出し、白ズボンの上に半ピラの原稿紙をひろげて待

ちかまへた。

「昔とつた杵柄といふわけですな。」と谷崎氏は微笑をうかべながら、「葛西のことでも話しませう。それでいいですか。」

「けつかうです。」

髭を剃りをはつて、谷崎氏は話し出した。

「十日の新聞を見ると、葛西善藏病氣重態の記事があつたので、驚いて見舞に行つた。僕や葛西の舊友で、葛西と同じ病氣にかかつたことがある、斯道の先輩（?）光用君に同道してもらつた。よほど惡いのかと思つて、ひどく心配したが、割合に元氣だつたので、嬉しかつた。一時間ばかり、いろいろ話し合ひ、光用君が病氣療養について彼に注意を與へた。

一體、葛西は僕などとくらべて、生來、いい肉體の所有者なのだから、養生さへすれば、きつとよくなると信ずる。作家としての彼は、今までに、もう隨

分いい仕事をしてゐる。が人間としての彼に、小さい子供たちのために、まだ生きてするべき仕事がたくさんある筈だから、精々養生して、健康の恢復をはかられんことを切望する。

かつて正宗白鳥氏が何處かで、近松秋江氏と故島村抱月氏からは、著作の上よりその生活の上から、いろいろ感化を受けたと述べて居られたやうに記憶するが、僕も、葛西、廣津の兩君からは、その作品より、むしろ生活態度の上から、有意義な影響を受けてゐる。勿論、僕がそつくり、廣津そのまま、葛西そのままの生活をすることは出來ないが、僕の生きて行く方針に、兩君の生活が、いろいろ暗示や激勵を與へてくれたことは、たしかである。

その意味で、隨分感謝してもいいし、友人として、またと得難い人だと思つてゐる。青年期を同じ雰圍氣の中で生活して來ないで、中年からつきあひ出した人は、性格が調和し得ても、どうも肝膽相照らすに到らない。これに反し

て、同じ青春を持ち、同じ生活の惱みを持ち、希望を持つて來た青年時代からの友人は、性格が一致しなくても、心から打ちとけて語らふことが出來る。

私がはじめて葛西を知つたのは、二十歳前後だつたらう。私がまるで世間知らずのお坊つちやんであつたのに比して、彼はもう妻子を持つて、生活の苦勞を知つた、立派な大人だつた。彼から見たら、當時の私は、さぞ小生意氣な青二才と見えただらう。今ではどうやら、私も一人前の大人になつたが、まだ葛西から見れば、苦勞の足りない甘い人間かも知れない。文壇のため、僕たちのため、そして葛西自身のため、彼が生命を一層いとほしまれんことを重ねて切望する。」

……そんなことから、酒に話題を轉じ、谷崎氏は

「酒を飲んで座がみだれるのは大嫌ひである。ところが、酒を飲む人は醉へば管を卷くのが多いので、結局僕は本當の酒飲みとは、つき合ひたくない。だか

ら僕自身も、至つて酒癖はいい方だ。醉へば少し饒舌になつて、少しセンチメンタルになるだけである。」

と語り、文壇の知人では加能作次郎氏が一番いい飮み仲間であるとあげたあとで、

「三上於菟吉君、葛西善藏君なども、酒は强いが、酒の相手としては、僕には、少し氣分がけはしすぎる。」

と、そこで感想を打ちきることにした。

私はその足で、加能作次郎氏を訪問したが留守であつた。明日午後伺ふ旨を名刺に書いておいた。加能氏と生田春月氏の原稿ができれば、八月號がそろふことになるので、それらを報告かたがた、かへりに三宿へよつた。

翌十三日、私は午前中に谷崎精二氏の談話を淨書し、集つてゐる原稿に活字の指定をすますと、それを鞄に入れて、外へ出た。

加能作次郎氏は盆栽をならべた二階の縁側で籐椅子に寢そべつて雜誌を讀んでゐた。書かうと思つてはゐるが、暑さにまけたのか筆をとりたくないから談話にしようといつた。

『夏日小談』といふ題のうちで偶然にも人間の壽命について話された、内容はつぎのとほりであつた。

……

昨夜、島田青峰氏の會に行つて、いろんな人に會つて、非常に愉快であつた。久し振りにチロリ節を歌はされた。その席で、田山先生と、いろいろ話をした時に乘じて、私はいつたい人間の壽命なんてもつと短くてもいいといふやうなことを言つた。

それは、この間電車の中で、突然ふと思ひ浮んだことで、さういふことを思ふ必然性もないのだが、外の職業のものは別として、少くとも作家なんか、日

本では、大てい三十前後から四十前後までで、するだけの仕事をしてしまつてゐるやうだし、無論老いてさかんな人もゐるのだが、大體に於て人生の歡樂といふやうなものも、それから先にありさうにも思はれないし、四十過ぎて五十近くなつたら、もう死んだつていゝんではないか、自分ではもう働く力もなくなつてしまつてから、生活に追はれながら、何時までもよぼよぼと生きてゐるといふやうなことを考へると、ちよつとみじめな氣にもなる。たゞその場合に、子供が問題である。子供が一人前に育ちさへすればいゝんだが、僕などの場合では、今後十五年も二十年も先、六十近くにでもならなければ、子供が自活出來る程度に到らない。さういふふうな子供を四人も五人も抱へて、大へんな老人になるまで働いて行かねばならぬかと思ふと愴然とする。だから人間がもう十六七位から一人前の人間として、社會に活動出來るやうなことになつて、四十か五十近くなつたら亡くなるやうな、さういふ人間の壽命のものでな

ら、いゝがなと空想したわけである。

そんなふうな話をしたところが、田山さんの曰く、そりや君しかし、老人には老人の樂しみといふものがあるんだよ。子供がそれぞれ巣立ちしてしまふと、老夫婦だけの生活になる。つまりかたちから言へば、結婚當時と同じやうに自分ら二人だけの生活となる。そこに、いふに言はれぬ味はひもあれば、ちがつた樂しみもあるもんだよ、と。

それを聞いて、なるほどそんなものかなと感じた。非常に田山さんの言はれたことを面白いと思つた。それは田山さんの實感であり、體驗から出たことで、意味の深い言葉だと思つたが、さういふ心境に達するには、僕などはまだいろんな苦しい道を辿らねばならないだらう。

ただしかし、その子供がそれぞれ巣立ちして老夫婦の生活に入るまで、自分の生活力がつゞくかどうかが疑問であるし、不安でもあるのだ。だから、人間

がもつと早く一人前になり、從つて、もつと壽命が短くてもいゝといふことになるのである。

……

加能氏の話を筆記しながら、私は、ゆくりなく病床の葛西さんのことを頭の隅で思ひうかべてゐた。もう一つの話は、北極探検のノビレ少將遭難の外國電報のこと、そして救助に向かつたアムンゼンまでが生死不明になつたことから良榮丸の遭難が對照的に持ち出されたが、さういふ記事が新聞に出てゐるころであつた。

私は、さらに生田春月氏へまはつてみた。すると、ちやうど原稿ができあがつたところで、讀みかへすのを待つて、それをもらふと、電車に乘つた。話してゆけといはれたが、葛西さんへもよらなければならないし、原稿整理や編輯もすることになつてゐたので、急いだのである。

電車の中で、春月氏の『時代と個人の苦悶』といふ原稿をひろひ讀みすると、

「文壇が滅びたとか滅びないとか、花園だとか廢園だとか、大衆文學が正道だとか正道でないとか、政治的興味が文學的興味に變つたとか變らないとか、個性は無價値で沒個性が本當だとか本當でないとか、その他、宇野浩二君風に言ふと、等、等、等。混亂、亂脈、紛糾、動亂……恐ろしい時代になつたものだ。同時にまた、面白い時代になつたものだ。」

といふ文字が眼に映つた。

また――

「わたしはこの一年くらゐ、この現代の時世相に相面して、苦悶に苦悶を重ね、未だ正しい解釋を見出し得ず、正しい道をも見出し得ない。その苦悶は、いづれ詳しく書きたいと思つてゐるが、よし、個人的苦悶を書いたとしても、

自分はそれを決して、無意義とも、無價値とも思はず、また、罪惡とも思はぬものだ。何となれば、それは自分一個の問題ではなくして、現代に生きる文學者共通の問題だと思ふからだ。」

また——

「兎に角、少し物を考へるたちの人ならば、今は、たしかに、みんな苦しんでゐるにちがひないと思ふ。その苦しみが、現に人によつて、さまざまな形で表はされてゐるやうに思ふ。洋行するのも、その一つの表はれだ。左傾するのも、その一つの表はれだ。戀愛するのも、その一つの表はれだ。恐らくダンスをするのも、さうであらうし、麻雀をするのも、さうであらうし、その他、これも等、等、等、みなさうであらう。ただ、その人の性格により、一身上の事情により、周圍の影響と、將來の見透し方の相違によつて、いちいち、その表はれ方が、ちがふであらうと思ふ。」

また——

「みんな、自分のやりたいやうにやればいいのだ。みんな、自分の方法によつて、生きて行けばいいのだ。苦しんで行けばいいのだ。僕はもちろん、僕の方法によつて、生きもし、苦しみもして行くのだ。或は難破するかも知れず、或はコロンブスのやうに、アメリカといふ新世界を發見するかも知れない。どつちにしても、他人の眼から見たら、たいした意味もなく、馬鹿馬鹿しい努力をしてゐるやうにも思はれ、失敗を重ね、一つの成功もなく、賽の河原の石積みをやり、もぐらもちの穴掘りを、やつてゐるとしか思はれなくても、それでもかまはない。自分さへ意味があると思へば、それでいいのだ。人の眼色を見て生きるぐらゐなら、いつそ生きない方がましだ。」

また

「超個人主義を、決して私は否定しない。むしろ、それを以つて、人間のな

すべき最高の事業、必須の事業だと思つてゐる。自己の個人性から超越すること、自己の個人的利害から超越すること、自己の野心、欲望、權力、意志から超越すること、それが自分の最高の理想だ。だが、それは理想であつて、現實ではない。そこに、自分の悲哀があり、苦悶がある。」

およそ、さういふ時代の波の中に、生田氏のみならず、多くの人々が苦悶してゐたのである。

ともあれ、私は豫定のとほり原稿がそろつたので、編輯を了へ次第、一日も早く印刷所へまはしたいと思つた。

葛西さんは今日は割合に氣分がよかつたといつて、盃にみづから酒を注いでゐた。そして、私に別に銚子と盃を用意させて、

「雑誌も、だんだん内容がととのつてきましたね。これで、僕も病床だよりが

書けて應援できれば、いくぶん責任をふさげることにもなるわけなんでせうが、……いや、もうぢき書きますから、まあ、あなたがたで適當にやつておいてください。」

といつた、編輯の順序も大體決定したが、春月氏の感想を巻頭にして、加能氏・谷崎氏のを次ぎにおくこととし、あとは評論二篇と創作四篇といふ風にしたらよからうとは、葛西さんの意見であつた。

そして、その晩はおそくまで、愉快に談笑した。その話のあひだに、

「約束の『半折の半折』も、あれつきり書きつづけられずにゐるけれど——そして、いつになつたら書けるやうになるか、ほんたうのところがわからないし、僕のことを、あなたなら書けさうにも思ふから、モデルにしていくら書いてもいいから。——好きなやうに書いてくれませんか。」

と、しみじみとした調子をたたへて、いつた。

「まさか、僕が……。」
「いや、これは冗談でなしに、ほんとに書いてくれて、いつかうさしつかへないから。」
「さうですか。……しかし、僕には、とても。」
たとへ書くことの承諾を得たにしても、人生批判に假借をゆるさない、しかも冷厳にして微妙な觀照を有してゐる葛西さんをモデルにしてなど書けるものでないと、私は胸のうちでさう思つた。心奥深くさぐることはもとより、その風格の片鱗すら表現することが、困難にきまつてゐるからである。
「いや、いつでもいいから、書いてくれませんか。僕の作品は作品として、それのほかに、僕のことを書いたものがあつても、おもしろいと思はれるんだがな。」
半分冗談のやうでゐて、それには眞劍なひらめきがほの見えて、いつしか、

それが私の心に、じいんと沁みゝほつた。いはば萬一のときのことを葛西さんは考へて、さういふことをいひ出したのかも知れない。それを思へば思ふほど、私は返事のしやうがなかつた。

「書いてくれますか。」

葛西さんは、しきりと返事をうながすのである。

「書かしていただきませう、いつか。」

——いつかといふのは、いろんな意味をふくめて、私はこたへたのであつた。いまは、それだけの力倆が自分にないからといふこともさることながら、そんな遺言めいたことによつて約束するときを、いまのいまにさせたくなかつたのである。谷崎氏のいふやうに、葛西さんのみづからのために、もつともつと生きながらへるつもりで、自分自身をモデルにした作品を世に問ふてもらひたかつたからである。

「ほんとに、どう扱つてくれてもいいから……。」

そのときは、もう平常のこころもちで、いくらかとぼけ氣味にしづかにいつた。それから『全集』第二卷の再校は、ざつと眼をとほしたから、改造社へかへすつもりだ、これで校了にしてもらはうといつた。實は葛西さんにたのまれて、第一卷から、初校だけは私が見てゐたのである。

その晩から、またしても葛西さんは床につき、こんどは小用にすら立つて歩けないほどになつてしまつた。そして、酒も飮まうとはしなかつた。——にわかに病勢がすすんだのである。

第十章

七月十六日――

ひるごろ葛西さんを見舞ふと、玄關に出てきた學生服の清藏君がおハナさんの下駄を突つかけて、外へ出ませうといふ氣勢を見せた。清藏君は葛西さんの甥にあたり、去年の秋善藏氏の弟さん勇藏氏が急病で亡くなつたときに手傳ひにきたまま、ずつと三宿に同居して、いろいろ面倒をみてゐた。夜は早稻田大學の夜學に通つて法律を修めてゐたが、家にゐるときも制服であつた。

「今朝、鮫島先生が往診に見えて、あと一週間くらゐしか保たないだらうと、さういつてかへられました。」

清藏君は、朝顔の花が日光でしぼんでしまつた隣家の垣根のところまでくると、私にさういつた。

「さうですか。」

「それから、看護婦をつけてほしいと申されました。」

「……。」

私はうなづいた。いよいよ、さういふときがきたのであらうか。私たちはここで覺悟をきめなければならないのかも知れない。舟木重雄氏の義兄にあたる年配の名醫である博士がいはれるのなら、よもや誤診とも思へないのである。

家の中に入ると、六疊と三疊のしきりの襖をとりはづした閾にまたがらせた鐵製のベットに、葛西さんは仰向けに横たはつてゐた。

近づく私へ、枕をしたまま輕くうなづいたその顔は、蒼ざめてはゐたが、思つたより元氣に見えた。
「改造社へいつて、山本社長にあつてくれませんか。」
「はい。」
「ぜひ本人がお目にかかつて、お話しておきたいことがあるから、一兩日中、御都合のいい日にお立ち寄りねがへないでせうか……と、たのんでもらひたいのだが。」
「承知しました。」
「恐縮ですが……と、ようく、さういつてくれませんか。」
「わかりました。」
で、私はその日の午後、愛宕下の改造社へいつた。さいはひ社長の山本實彦氏はゐて快く話をきいてくれた。

「今夜か明晩まゐりませう。」

さういふ返事をうけて、夕刻三宿へかへると、私は葛西さんにつたへた。

「さう、御苦勞、僕は飮めないけれど、そつちの部屋ででも、一人で一杯やつてくれませんか。」

そんなことをいつて、氣をつかはれたが、呼吸が見るからに苦しさうであつた。

夜、谷崎精二氏と舟木重信の手で、そつと葛西さんのノートを往來へ持ち出し、青森縣浪岡にゐる長男亮三君と、北海道ならびに石ノ卷の二人の令姉へ、善藏危篤の電報が打たれた。

鮫島博士が看護婦を雇ふやうにすすめられたので谷崎、舟木二氏も、そして私もしきりと促したのであつた。が、

「お金ができると、ハッキリ決まらなければ……。」

と、葛西さんはいつて、きかうとしなかつた。

七月十七日――

昨夜より衰弱加はつて見ゆ。酸素吸入を自分で指圖してやらせた。朝のうちに山本實彦氏が來られ、懇談をとげたとのことで、いくらか興奮の色もあらはれてゐた。

葛西さんが直接、山本社長に話したといふのは、――全集の版權を賣り、それで酒屋その他いつさいの整理をつけて、郷里碇ケ關の山間に小さな小屋をつくり、そこで自然療法をこころみようといふ、いはば最後の一策についての相談なのであつた。これは一ケ月ほど前から考へてゐて、機會を待つてゐたのだつたが、昨日の朝鮫島博士から、轉地せずとも、この家でいいから安靜にしてゐるやうに、と注意されたので、轉地はとにかく、そんな交渉を開始すること

になつたのである。
で、山本氏が、
「版權はそのままにして、別に療養費として三百圓づつ三四ケ月出すから、安心して健康の恢復をはかつてください。」
と、さういつてくれたので、葛西さんも大へん滿足してゐた。
「これで養生ができるやうになつた。すまないが、またひとつ、足をはこんでもらひませうや。」
その日の午後、私は改造社の社長室で、山本氏から三百圓を受け取つてかへつた。すると、もう看護婦が一人きてゐた。
午後三時、體溫三十六度六分、脈搏百〇二、呼吸二十八。食欲なく、野菜スープ、重湯、林檎汁、アイスクリームなど各少量を攝る。ガタミン注射二本。
夕刻、鮫島博士の來診あり、看護婦をもう一人雇ふことになり、つがう二人

になつた。

この日、葡萄糖液の點滴注腸を二回したが、大半は排出されてしまつた、夜になつてから、北海道の令姉が、あちらを出發したといふ電報がとどいた。風強し。

七月十八日――雨。

昨夜十一時ごろより今朝七時まで安眠。注射のためであらう。

體溫三十七度二分、脈搏百十六、呼吸三十二、二時間毎にヂギフオリン、ガタミン、カンフル等の注射をする。飲食物はアイスクリーム十グラムのほか葡萄五粒、メロン一片。

午前、改造社から全集第一巻の檢印紙をとどけてきたので、淸藏君と私が代る代る水牛の新しい印を捺した。それは全集用にと、かねて篆刻家の石井雙石

氏にたのんで彫つてもらつたものであつた。
檢印紙を使ひが持つてかへると、入れかはりに舊友の病を案じて奈良から上京した舟木重雄氏が見えた。白の痲服を着た長身の舟木氏は、しづかにベットに近づいて、
「やあしばらく、善藏君!」
と、元氣のいい、しかしふるえを帶びた聲をかけた。
この一兩日、めつきり形相のかはつた葛西さんが、
「だめだ。こんどは、だめらしい。」
と仰向いたまま、聲も低くうなづいた。
「奈良の酒だ。いま飮んぢやこまるが、なほつたら飮んでくれ。」
舟木氏が四合罎の『日本盛』を一本見せると、葛西さんは、しばらくそれを額越しにながめてゐたが、

「ありがたう。――向かふの、見えないところへおいてくれ。飲めなくなつた……。」

「氣の弱いことをいはないで、元氣を出してくれ。」

「だめらしい。こんどは、だめらしい。」

さういふ息も、苦しさうであつた。

それから、二十年來の親しい友である重雄氏と、二人つきりで、しみじみと話がはじまつたが、それが遺言なのであつた。

德田秋聲、谷崎精二、光用穆、三上於菟吉諸氏のほか見舞客が多く、しかもその一人一人に會つて話をしたので、疲勞のあとが歴然と見えた。

それで、改造社から全集第一卷の製本見本がとどけられたときには、平福百穗畫伯の裝幀になるみごとな本を、ちらと見て、

「いいやうですね。」

と、ひとことつぶやいたきりで、酸素吸入をしきりにかけたがつた。

鮫島博士は、好きなやうにしてあげなさいといつてゐた。私たちは代る代る枕もとへいつて、何か食べたいものはないかとたづねた。

「それでは、葡萄酒でも、飲んでみませうか。」

喘ぐやうにして、いはれたので、清藏君が近くの世田谷中學の正門前にある相田醫院から、藥用葡萄酒を少しもらつてきたのである。が、これが大へん病人の氣にさわつた。

「葡萄酒を、わけてもらふことはありませんよ。銀座の龜屋へいつて買つてくればいいものを……。」

いはれて清藏君も、

「ぢや、買つてきます。」

と、あやまつた。

「ついでに、メロンも一つ、小さいのでよささうなのがあつたら、ほしいから……。」

さういひながら、葛西さんは枕の下に挾めてある蟇口から、十圓札を二枚出して、清藏君にわたした。——自動車で、清藏君は使ひにいつた。

買ひものをすまして歸宅した清藏君から、釣錢を受けとると、葛西さんは自分で蟇口に入れ、枕の下へしまつた。

メロンの一片にフランス製の白葡萄酒をかけ、氷のブッカキといつしよに匙で掬ふやうにして、看護婦は病人の口へ持つていつたが、

「汁のところを。」

と、葛西さんは、しきりにそれをいつた。そして最後に、

「おいしかつた。」

と微笑をうかべた。やがて、

「眠りたいから、みんなかへつて休んでもらふやうに。」
同じことを何べんもくりかへした。
午後七時、鮫島博士來診。痔瘻のために注腸をいやがる旨を看護婦が告げると、博士は、注腸はやめてもよろしいとのことであつた。
黄綠色粘液便が夜までに三回あり、十數度にわたる小水は併せて二百八十グラムばかりであつた。
午後十一時四十分――體溫三十七度六分、脈搏百三十三、しかも微弱、呼吸四十一。
カロナジンの注射を一本した。意識は至つて明瞭である。終夜警戒。
七月十九日――雨。
午前六時、體溫脈搏前夜に同じ。呼吸三十八、稍々小康を得た。

朝來、尿意頻數なれども量少し。三時間毎に强心劑の注射をする。

食欲少し出で、重湯三十グラムのほか、メロン、葡萄酒、西瓜の汁等若干量を攝つた。

北海道の令姉と、青森縣浪岡にゐる今年地方の農學校を卒へた、長男亮三君とが相ついで到着した。が、すぐには會はれぬ方がよからうとの看護婦の注意もあつたので、しばらく、そのままにしてゐたが、どうやら家の中の氣勢で、病人にはわかつたらしかつた。

やがて、舟木重雄氏から、二人のきてゐることを傳へてもらつた。葛西さんは顏をしかめて、

「逢ひたくないから、すぐかへつてもらはう。」

と、どうしても逢はうとしなかつた。

「しかし、折角心配して來られたのだから。」

舟木氏も私も、さういつた。すると、

「なぜ、さういふことをしてくれたらう。本人の意見もきかずに、やたらに親類を呼んでくれては困つてしまふな。……いけませんね。」

喘ぐやうに難じた。手足が細り、蛇腹になつた胸がせわしく浪打つてゐた。

舟木氏はじめ私たち近くにゐたものが、平身低頭して、あやまつたり、なだめたりした結果、

「それでは逢はう。しかし、もう少し待つてくれ。いいとき呼ぶから。」

とのことであつた。

まもなく、呼んでくれといふので、二人にこの旨つたへた。葛西さんは、まづ枕頭に立つた霜降りの制服をつけた背の高い亮三君に向かつて、

「何といふ電報だつたか、電文をいつてごらん。」

とたづねた。亮三君が、

「――チチキトクシラセル。……それだけ。」

と、あらかじめ私たちで智慧をつけておいたとほりに答へた。すると、

「さう。……おや、ビヨウキヨロシ、ダレモクルニオヨバヌ――佐佐木さんに

さういつて、すぐに電報を打つてもらへ。」

そんな難題を持ちかけたのであつた。亮三君は、こまりぬいたかたちで、

「あゝ。」

と、たゞ、それだけの返事をした。

それから、北海道の令姉には、

「どうして、きたの。電報でも見たの。」

と、きいた。

「いいえ、電報も何も見ないけれど、ただ兄さんに逢ひたくつて……。」

と、疊に膝頭で立つたまま、小柄な令姉はこたへた。遠く北海道の僻村で農

事にしたがつてゐるといふ、年よりは老けて見える、朴訥な中年の令姉は、十数年ぶりで相見る骨肉を分けた弟の善藏氏を何故か兄さんと呼び、そして金剛杖のやうに痩せ細つた、その手首をさすつた。

「一人で、きたの？」

病人の聲は低く嗄れてゐた。

「一人で、きました。」

——と、そのとき、落ち窪んだ葛西さんの眼から、しづくがこぼれるのを私は見た。

「兄さん、しつかりしてください。きつと癒りますから。」

そして、いつまでも善藏氏の手をさすつてゐた。

北海道の令姉といふ人は、おハナさんに向かつて、葛西さんがこの家に下宿でもしてゐて、病氣になつてしまつたものと思つてゐるやうなことをいひ、妻

子があつたはずだが、どうなつたかとも、たづねた。
そしてまた、勇藏氏が去年の秋亡くなつたことも、その遺骨をこの春、高田のスキー大會の歸途、亮三君が谷中の天王寺から鄕里へ持ちかへつたことも、こんどが初耳らしかつた。
信州屋の爺さんの好意で、三町ほど離れた坊城山の下にある空家を一軒借り、ここを、かはるがはる休息する場所にあててあつた。何よりも令姉と亮三君を休ませようとして、うながしたが、なか〳〵肯じないのである。
正午に七度五分だつた熱が、四時には八度七分に昇り、脈搏も百二十六を數へ、呼吸も苦しさうであつた。
それでも鮫島博士に向かつて、全身の苦痛を訴へたのち、
「何しろ昨日は、お客さんが多かつたもので、疲れた。」
などと、葛西さんみづから話をした。

午後、カロナジンとカンフルの注射を一本づつした。それに、一時ごろから黄綠色の粘液便が數回あつた。

診察を了へた鮫島博士は、

「もう、お出でになるやうな方がないやうでしたら、苦しませることはないでせう。」

といつて、今後は注射も藥も一切やめになつたのである。今夜いつぱいか、もはや明日一日は保つまいとのこと、めづらしいほどに强かつた心臟が刻々に弱りつつあつたのである。

石ノ卷の令姉からは「ユカレヌ」といふ電報がとどいた。

夜半、意識やや不明となつたが、やがてまた明瞭となる。數人のものが、家人とともに、ひとつ蚊帳の中で隣室の苦しさうな寢息に耳をすましてゐた。

すると、眞夜中ごろであつた。看護婦がきて、

「どなたか知れませんが、少し鼻が高すぎるやうだからと、御病人がおつしやいますから。」

と注意してかへつた。私たちは、背廣のまま横になつてゐる某氏をゆすぶつて、この旨つたへなければならなかつた。

七月二十日――

不安のうちに夜が明けた。今日も雨。

朝、體溫三十八度五分、脈搏百三十八、呼吸四十。

「昨夜ヨリ覺醒中ハ絶エズ胸部ノ苦痛ヲ訴ヘラル」

看護日誌には、さう書かれてあつた。そして、明け方、黄綠色の軟便が多量に出た。

葡萄二粒、水蜜汁三十グラムが口に入つた。が、食慾は全然なかつた。

午前八時、鮫島博士來診。

「呼吸器の方はそんなでもないが、心臟が弱つてゐる。それに、あの顏色では……。」と、ことばも低く、「何んでも、好きなものを食べさせてあげなさいや。」

ねんごろに注意して、鮫島博士はかへつた。

午後、葡萄酒二十グラム、メロン汁、葡萄汁各五十グラム。朝來の軟便は下痢にかはり、かつ頻數であつた、尿また同じ。午前に比して、午後は總じて良好に見受けられたが、衰弱はげしく、それでも氷の入つた吸吞を、自分でとらうとした。

この日、曉のころ葛西さんはおハナさんを呼んで、

「この中に、二百七十圓入つてゐるから、大事に使へよ。お金といふものは、要るからつて出せば、すぐなくなつてしまふものだ。」

と枕の下においてゐた蟇口を、はじめて渡したのであつた。それまではいつさい、今までのとほり自分でやつて居つたのである。

亮三君の紋附を急いで誂へるやうにと、そんなことを心配して口に出したのもこの日であつた。

そして、自分でも、

「今夜か、明日の朝だらう。」

と、しきりにあたりのものに話してゐた。

七月二十一日――

雨やまず。晝でも電燈が灯つたが、鬱陶しいこと非常なり。

容態は小康、體溫も朝六度三分、脈搏百二十、呼吸も樂になつた。五時半には、重湯二十グラム、つづいて葡萄酒少しばかりを攝ることができた。

午前中、鮫島博士のほかに、久しぶりで相田醫師も見えた。同醫師には先月のすゑ、勘定をすますと同時に、しばらく藥をやめて見るから、時たま診察にだけきてくれと、葛西さんみづからたのんだので、今日、相田氏はこの容態を診て、いささか、びつくりしたやうである。

夜明けから綠色泡沫便が何回にもあつたが、これがいけないらしかつた。が、當人は何時になく氣分がよいといつて、まだすつかり明るくならないのに、新聞や手紙を白い蚊帳の中で讀んだりしてゐた。

そして、一兩日來めつきり多くなつた見舞客について、

「新聞にでも出たのかも知れない。それが見たい。」

と、しきりにいふのであつた。清藏君も、

「叔父さんのことですから、かへつて見せた方がよくはないでせうか。」

と相談するので、清藏君に一任した。

前日の讀賣新聞に大きく出た『絕望の葛西善藏氏』といふ見出しの記事を清藏君が切り拔いてノートに貼つておいたが、それを持つていつて本人に見せたのである。

記事には、この二月病床に坐つて撮つた近影も寫眞版として出てゐたのだが、無斷で寫眞なんか貸しては困ると、叱られることをおそれて、それだけは隱しておいた。

……去年の暮、相州七里ケ濱の鈴木療養所を退院して以來、世田谷三宿の自宅で靜養中だつた葛西善藏氏は、七月十三日以來、病にわかに革り、遠く北海道と青森から令姉令息が馳せつけて看護につくしてゐるが、今や全く絕望と見られてゐる云々……

と、いふ切拔きを葛西さんは、ふるへる手で持ちながら、黑い大きな眼鏡をかけさせて、くりかへしくりかへし讀んでから、

「割合に、よく書いてある。」
と、いつた。見舞客の多いわけもうなづけたらしかつた。それから、卓上鏡を手にとつて、しきりと自分の顔を寫して見てゐた。
舟木、光用、谷崎の舊『奇蹟』の同人諸氏はじめ、私たち若いものなど、休息所にあてられた空家とのあひだを往來した。ひどい泥濘であつた。
そこでは、萬一の場合の手筈がすでに定められてゐたのである。——お寺も弟さんの場合のやうに谷中の天王寺で、告別式といふことにしよう。しかし、文壇的に功績のある葛西氏のことでもあるから、できるだけ立派にしてあげたいと、友人の方々は話した。で、天王寺との交渉は、私がすることになつた。そこにゐる靑木德順といふ若い僧侶に、いつさい私から相談して取りきめる段取りであつた。
そして話は、ややもすると、葛西さんの追憶談に花が咲くかたちであつた。

が、何んにしても、病院にもつとゐればよかつたといふこと、酒を飲みすぎたといふこと、五月の雨降りに二度も行水をつかつて感冒をひいたのが惡かつたといふこと、漢法醫の注射をすすめられて試み、かへつて病勢をつのらせたといふこと――そのほか、ことごとく、いまは思つても甲斐ないやうな話がつづくのであつた。

この日午後、廣津和郎氏が見舞に見えた。舊『奇蹟』の同人時代からの舊友である廣津氏がこれまでのあひだに見えなかつたのを、私は半ばふしぎに思つてもゐたが、これで何かしらほつとした氣持になつた。

廣津氏は、葛西さんと何か話があるらしく、人を拂つてほしいといはれ、座にゐたものはそれぞれ席をはづした。

廣津氏がかへつて、しばらくしてから、葛西さんが私にいつた。

「實は廣津君がきまして、いろいろ話をしたんだが、こまつたことになりまし

た。」

「どういふことで……。」

「僕の『全集』に入つてゐる作品が問題なんだ。しかし、あなたも知つてるとほり、それの入つてゐる第二巻は、校了といふことにしましたから、今さら徹回するわけにもいかんし、……いや、いろいろ懇談して諒解はついたから、いいやうなものの、自分としても、少しばかり閉口させられた。」

と、そんな話もしたし、體溫もさして昇らず、葛湯やスープを少量ながら攝取したほどで、この分なら、あるひは持ちこたへられるかと思はれた。

夜、十二時ちかくであつた。ドロップが食べたいといつて、看護婦に口にふくませてもらつた一粒を、カリカリと嚙んだ。

「いい齒ですね。」

私は蚊帳の外から聲をかけた。すると、葛西さんは、にこッとしたが、頰骨

が出張つて、髮も髭ものびた蒼白い相貌には、暗い一沫の影が漂つてゐるのを、私は見た。

「齒だけは、もとからいい。ほかはダメ……。」

しかし、それも半ばは囈言のやうに思はれた。

それから間もなくであつたが、こんどは、しつかりした語調で、私に向かつて、

「あんまり長びくやうだし、明日は晩餐式をやつて、解散といふことにしませうや。」

——油斷のならない容態である。數名が徹宵起きてゐた。

七月二十二日——雨。

容態ほぼ前日に同じ。但し、朝六時の體溫が三十八度あつた。が、例の漢法

醫の注射時分には、九度から四十度ちかい熱が毎日つづいてさへ、平氣で酒を飲めたぐらゐだつたから、さう苦しさうにも見えなかつた。

そのためでもあつたか、縣下の中等學校で三番といふスキー選手の亮三君をはじめ、北海道の令姉、それに四歳になるユウ子ちやん、今年神武天皇祭の日に生れた久美子ちやんをかかへたおハナさん――と、これだけをベットのかたはらに列べて、一人一人にお酌をさせ、愛用の盃で葡萄酒を飲んだりした。そして、しみじみと家族の人たちを、力ない眼で見上げてゐた。

また、古くから親しくしてゐる友人たちにも同様にしてお酌をさせ、かつ盃をすすめた。蒼ざめてゐた顔が、次第に紅潮してきた。

「酸素よりお酒の方がいい。」

さういつたかと思ふと、

「藥も服ませないのなら、醫者も看護婦も要らないから、ことわつてしまは

う。」
と、不爾さうにいふので、急いで散薬と水薬を枕もとへ持つていつたが、そのときは意識がやゝ不明になつてゐるやうであつた。
この夕、病人の指圖で、茶の間に二つの茶餉臺がつながれ、晩の用意がととのふと、六疊と書齋との間の唐紙をすつかり開け放させた。看護婦一人の手で、寢臺ごと南の緣側の方へ五六尺進出すると、身體を起してもらつた。それで、やうやくみんなの方が見わたせる恰好になつたが、もとから、右を下にして寢ることのできない葛西さんであつた。
茶餉臺を遠巻きにかこんで、長男亮三君、浪岡から上京した奥さんの實弟平野亮氏、甥の清藏君、舟木重雄氏、東京での最も古い知己であるといふ佐藤榮七氏、北海道時代にまだ肩あげをしてゐた善藏氏の面倒を見たといふ中村長作氏、『醉狂者の獨白』その他の口述筆記をした嘉村礒多氏、熱心な讀者の中村

卓二氏、それに同郷の大學生岡本成雄君と私とを併せた、合計九人が扇形に居ならんでゐるのである。

頰のこけた葛西さんは、破顏して枕のまま會釋をした。みんなも一齊に身をかがめた。

病人の命で、おハナさんが一人一人にお酌をして廻つた。

「舟木君。」

葛西さんが呼んだので、重雄氏は立つてベットに近づいた。と、

「間に合つて、よかつた。」

――奈良の酒のことを思ひ出してゐるらしく、さういつた。それから、

「大島節、……大島節。」

と、しきりにいふので、舟木氏が曾つて歌つたことのある大島節を歌へと、さういふのか、とたづねたら、うなづいて、とたんに顏をしかめた。――あと

は、よくわからなかつた。

やがてまた、葛西さんは何か獨言のやうにいつたが、聲が少しも通らないのである。

「君、どうぞ。」

重雄氏に指名されて、私は病床に近づいた。すると、

「たいへんでしたらう。どうも……いろいろ……ありがたう。みんなに、さういつて、くれませんか。」

カサカサした、しかし、しみじみした調子のことばであつた。

私はそれを傳へた。折返し一同からの、

「ありがたう。」

といふ禮を傳へると、

「さう。」と滿足さうに、うなづいて、「醉つてゐるから失敬……みなさんで

飲んでください。」

で、私がふたたび一同に、この旨を話してゐるあひだに、葛西さんは、看護婦の手で身體を、もとのとほりに向ふむきにかへさせた。

言ひがたい感動の波が、陰雨にこもる家の中に搖曳してゐた。みんな、だれもかれも、醉はない盃を重ねた。

七月二十三日——小雨後曇。

緊張のうちに朝となる。

意識は、ほとんど不明であつた。午前三時半に少量の綠色便を見た。五時半には、しかし葡萄酒二十グラムのほかに、ごはんが欲しいとのことで、お粥を五匙ばかり食べた。

午前十一時、鮫島博士來診。十二時半、相田醫師來診。——ともに、夜まで

は、むづかしからうとの話であつた。
正午ごろ、「ごはんを食べる」といふので、看護婦が持つていくと、
「食欲のないものを、無理に食べろといつても、ダメだ。」
と、頭を横に振つた。
葛西さんは昏々として眠つたかと思ふと、うす眼をひらき、しきりと口をうごかしてゐたが、大半はわけのわからないことであつた。時計を帯に結えつけさせて、
「一時ごろの汽車に乗つていくことにして、切符を買つておいてほしい。」
とか――
「切符を落さないやうに、ちやんと、しまつておいた方がいい。」
とか――
「この野原で、ちよつと小便をしますから。」

とか――囈言のやうに口にした。故郷へかへつて養生することばかりを近來は考へてゐたのだつたが、そんな夢でも見てゐるのであらうか。

過ぐる日、親友の舟木重雄氏に遺言した中にも、信州屋にある千圓ばかりの借金を返してくれといふことのほかは、十何年も郷里にかへしてある妻子の身の上を、一方ならず案じて見えたさうである。

綠色便多量、午後一時、ふたたび鮫島博士と相田醫師が診察の結果は、もはや二三時間の生命ならんとのこと。――あたかも今日の干潮は三時五分と新聞に出てゐたのである。

而して手足はすでに冷え始めてきたさうであつたが、當人は咳も出ず、呼吸もおだやかで、あまつさへ冷のまま吸呑で飲んだ日本酒を、お燗してくれと所望したほどで、最後の時が、いま目睫の間に迫つてゐようとは思へなかつた。

三時――四時、容態依然。このあひだに、葛西さんとは年來の藝術上の友で

ある宮地嘉六氏が、病を押して見舞に見えたが、そのとき、ちよつと眼をひらいてうなづいたきりで、夕刻、谷崎精二氏が耳元ちかく、「谷崎だよ」といつたときは、もう全くわからないやうであつた。

いままで止まつてゐた咳が出、痰が咽喉にゴロゴロと鳴つてきた。かうして夜になつた。遅く、相田醫師が三度目の診察に見えた。脈は微弱で、辛うじて數へられるほどであつた。

痰がしきりにからまつた。

「痰を吐き出してください。お出しなさい。」

と看護婦が大きな聲でいつても、もはや、それを口の外へ出すだけの力がなくなつてゐた。緊張と不安とが、重く、おつかぶさるやうであつた。次の茶の間では、亮三君、清藏君、嘉村氏、岡本君と私とが、お茶を前においたまま、肥つた相田醫師の話を聞いてゐた。——喉頭結核で咽喉に穴があいてしまつた

患者を今日も往診したが、細君がガーゼをつめかへ、それに絆創膏を貼つて、平氣で外を歩けるまでに癒つたといふ話であつた。
「絆創膏を貼るのですか。」
と、誰かがきいた。
「だつて、風邪をひくといけないもの。」
相田醫師のことばに、みんなが笑つた。そこへ看護婦が急いで入つてきた。
「先生、ちよつと。」
「は。」
相田醫師のあとから、みんなも立つた。一瞬、ただならぬ氣勢がみなぎつた。そのとき、
「あ、猫が、猫が！　しいッ！」
さういふおハナさんの聲が縁側でしたが、嘉村氏は私に、

「あちらの家にゐる方に、しらせなくては。」
と注意した。氣のついた嘉村氏に迎へにいつてもらふことにした。
白い蚊帳を半分はづしたベツトの上に、葛西さんは、いままでどほり、肋骨の一本一本突き出た小さな胸で、大きく呼吸を一つした。心臓部に聴診器をあてて聽き入つてゐた相田醫師が、片手の時計を見ながら看護婦に、
「眼をつぶらせて。」
と、しづかにいつた。
一糸も亂れてはゐなかつた。これが、葛西善藏氏四十二年の生涯の臨終であつた。
「午後十一時八分死去。死後體溫三十七度二分。」
と、看護日誌に記された。
休息所の方から、舟木重雄、舟木重信、光用穆、谷崎精二、宮地嘉六、佐藤

榮七の諸氏が、呼びにいつた嘉村氏とともに駈けつけたときは、臨終から數分を經過してゐた。

亮三君はじめ、おハナさんが、今は冷たくなつた唇を濕ほした。ユウ子ちやんと久美子ちやんのためには、私が代る代るに抱いて、杉の割箸に濡れた脫脂綿を挾んで、亡き父上の唇を濕めした。

令姉の番がすみ、舟木重雄氏が葛西さんの唇を濡らしをはつて、

「善藏！　ゆつくり休め。」

と、萬感をこめて呼びかけたとき、どこからともなく嗚咽の聲がおこつた。

——雨後、風のない靜かな晩であつた。

第十一章

深夜ではあつたが、新聞社關係の仕事に携つてゐる光用穆氏によつて、ただちに各新聞社へ電話で知らせられた。

「朝刊に間に合つた。」

白髮の多い光用氏は、遠くまで電話をかりにいつて、かへつてくると、みんなにさういつた。

はたして、明けやすい眞夏の夜あけごろ、早くも配達された都下の新聞に

は、葛西善藏氏の訃が寫眞入りで報ぜられたのである。

「長らく病床にあつた葛西善藏氏は、七月二十三日午後十一時八分世田谷三宿の自宅で逝去した。享年四十二。氏は青森縣弘前市に生れ東洋大學に學んだが、中途に於て退學した。後、志を文學に樹て德田秋聲氏に師事し、傍ら谷崎精二、廣津和郎、相馬泰三の諸氏と共に同人文藝誌『奇蹟』に據つて、その作品を發表した。大正七年三月『早稻田文學』に『子をつれて』を發表して、才能を文壇に認められるに至り、次いで『愚作家と喇叭』『馬糞石』『不能者』『椎の若葉』『湖畔手記』『醉狂者の獨白』等を發表した。篇々何れも彫琢鏤骨になれる苦心の作ばかりである。氏は醉狸州の稱をさへ得てゐるほどで文壇切つての酒豪であつた。といふよりも酒仙として通つてゐた。氏はその死の間際まで、酒盃を手から離さなかつた。」

——中には、そんな風につたへた新聞もあつた。

朝來、弔問客がしげく出入りする中に、故人の舊友諸氏によつて死亡通知、通夜、告別式の日程その他が、とどこほりなく進められた。私は谷中の天王寺へ電話をかけて、青木德順に來車をもとめ、讀經をあげる支度をしてくるやうにたのんだ。

やがて德順が見えたころには、もう葬儀社の手で、納棺もすみ、靈前が飾られてあつた。信州屋の爺さんもきて、何かと世話をやいてゐた。

天王寺の德順を中心に、葬儀委員が告別式の打合せをした結果、二十六日午後、天王寺で告別式を營むことに決定したが、その後に德順のはからひによつて、特別に大僧正が導師として出仕すること、役僧も規定よりは多くつけることが報告せられた。

で、通夜はその晩から二日つづけられた。酒を好んだ佛だけに、みんなも酒が何よりの供養だと、いづれかといへば明るい、にぎやかな通夜であつた。葛

西さんとは關係のふかい石坂洋次郎氏も横手から上京してきた。

『葛西善藏全集』は、すでに初期の作品を集めた第一卷を世におくり、第二卷も近く續刊されるはずであり、その初版の印税は遺言によりおハナさんに、再版からは鄕里にゐる奥さんの手にわたされることになつた。

そんなことが話題にのぼつてゐるとき、信州屋の爺さんが靈前に線香をあげたあとで、

「ちよつと御相談いたしたいことがありますのですが……。」

と、主だつた人々を見まはした。

「それなら、僕たちが伺ひます。」

と、谷崎精二氏と廣津和郎氏が信州屋と別室へいつた。――話は酒代千圓のあと始末であつた。結局、谷崎氏と廣津氏が一切のあとを引きうけ、月々三十圓づつ支拂ふといふことで、信州屋も諒解し、かつ大へんよろこんだのである。

新聞の文藝欄には、葛西氏追悼の文が掲載されたが、徳田秋聲氏は時事新報に『葛西君逝けるか』と題して、一文を寄せ、その中に、

「――葛西君の藝術境は或ひは狹かつたかも知れない。しかしそれゆゑに日本人特得の心境小説の極度に達してゐたことは言ふまでもない。今度の『新潮』月評會で、心境小説は芭蕉の俳諧のやうに狹い領土へ陷ちこんで、大衆藝術が是からの文藝の廣い領土を占めるといふ議論もあつて、葛西君が例に引かれたやうであつた。一應私もそれには頷いても可いと思ふが、今の大衆文藝に何ほどの存在的意義があるであらう。」

といひ、さらに、

「葛西氏の藝術がプロレタリア精神のものか、ブルジョア精神のものか、私は今それを調べてゐる遑はないけれど、或は大衆的精神をもつたものであるかも知れないのである。芭蕉の境地にしたところで、隱遁的ではあつたけれども、

むしろ一面大衆的な精神をもつてゐたと思はれる。」

——そのやうにも書いてゐられる。

七月二十六日、告別式に出棺するに先きだつて、靈柩の中——經帷子をまとひ、草鞋ばきに愛用の盃と二合瓶を携へた禪骨の足下に、折から製本ができてきた『文藝王國』の八月號を一冊、私たちは納めたのであつた。

かくて、午後一時から下谷谷中の天王寺に於て告別式が行はれた。導師福田大僧正、喪主長男亮三君、會するもの二百餘名、いづれも生前故人と親交あつた人々と文壇の諸名士であつた。參列者の主なるものをあげれば、德田秋聲、山本有三、久保田万太郎、宮地嘉六、加能作次郎、廣津和郎、宇野浩二、谷崎精二、舟木重雄、舟木重信、長谷川時雨その他の諸氏である。

德田秋聲氏は文壇を代表して、弔辭を讀まれた。

「葛西善藏君逝く、悲しい哉。惟ふに去年の夏、君病に倒れてより一年有半、或時は健康殆んど恢復したと見えしに、最近再び起つことが出來なくなつてしまつた。

君、藝術に身を委ねて茲に二十年、『奇蹟』に處女作を發表してより今日に至るまで、作家の生活として決して長いとは言へない。しかも其の藝術は初めから徹底した心境詩の三昧に入つたものであつた。それは餘りに孤獨的な藝術とも言へよう。けれども寂しさのなかに、人の追隨を許さない君獨得の詩境があつた。が恐らく葛西家の藝術として長く人に親しみを殘すであらう。君の生涯は酒と藝術に終始したが、生活は今の世には珍らしい清貧であつた。我等今、君に訣るるに當り、轉た人生の寂莫と荒凉とを感ぜずにはをられない。

弔問

頰髯や經帷子の凉しさう

つづいて、谷崎精二氏は友人代表として、つぎの弔辭を靈前にささげられた。

「葛西善藏君。

君の柩を送つて親族知己今玆にあり。君の遺骸を大地に還さんとする前、暫らく別れを惜む事を許し給へ。

文壇作家多しと雖も、藝術の爲に君の如く峻嚴なる努力と不屈の精進とを絞りたる者類寡かるべし。貧困と病苦との中に肉を殺ぎ、骨を削るの勞苦を敢へてしつつ君は多くの優れたる作品を産めり。其の苛烈なる人生批判と、冷徹氷の如き觀照と、之を包む高貴なる藝術的芳香とは正に文壇の至寶たり。

大正昭和の文壇に顯著なる一傾向を成せる所謂自己小說、心境小說に於て、

君の作品は其の絶頂を極め、最高の典型を示せるものとして永く後世に傳ふべきは言ふを俟たず。

信じて殪るる者に悔なしとは、生前君が屢々知人に説ける標語なり。まことに君の一生は信じて進み、信じて戰ひ、聊かも悔なかりし戰士の尊き一生なりき。君今長逝すと雖も、不朽なるべき君の作品の三巻の全集に收められて、嚴として存在するあり。君と時處を同じうして生れ、君の眞摯なる生活に接し、君の光輝ある作品を味讀するを得たるは、我等の歡びにあらずして何ぞや。而してまた君が最高の誇りにあらずして何ぞや。

さらば葛西善藏君、さらば長へにさらば。

昭和三年七月二十六日　　谷崎精二

その夕、暗々谷中葬場に送られた靈柩は、まだ温もりのある竈の中に滑るや

うに押し込まれ、僧侶の讀經のうちに、私たちは燒香をささげた。鐵の扉はやがて堅く閉され錠前が下ろされた。裏側へ案内する隱坊につれられて、硝子を嵌めた小さな覗き窓から見れば、暗い竈の一角から、すでに重油が凄まじい焔となつて吹きつけてゐたのである。

かくて、私たちは骨を拾ひあげ、つまみ合つては白い壺に納めた。薄暮のなかに雑木林では蜩が鳴いてゐた。

故鄕の土へかへる葛西さんの遺骨を上野驛に見送りをすましてからのち、私は『中央公論』に死の前の葛西善藏氏について書き、『改造』に臨終記を寄せ、『文章俱樂部』には、その晩年のあらましを執筆したが、改造社からは記者の深田久彌氏が依賴に見えたのであつた。

私は、故人にゆかりのある常陸の大洗海岸へ行き、故人が先年も滯留した小

林旅館の一室で、岩にくだける太平洋の荒波をながめ、千鳥の鳴く聲をききながら、哀切な思ひで筆をとつた。さうして、おのづと思ひうかんでくることは、葛西さんは、酒と藝術に生涯をささげ、まことに生前たびたび口にしたごとく、「信じて殪るる者に悔なき」一生ではあつたらうが、何としても、みづから死期を早めたことだけは疑へない事實であるといふ點であつた。——あるひは、それは一つの自裁に類するものではなかつたかと、そんな氣がしきりにされたのである。事情も異り、心境も別個のものにはちがひないとしても、同じ時代の苦悶にほぼ同じくらゐの年齢で遭逅したといふ點、同じやうに病弱であつたといふ點、大まかにそんなことだけで律してはならぬことながら、やはり、どこかに芥川龍之介氏の最後を思ひ合はさずにゐられないものがあつた。芥川氏が前の年のしかも夏季に、藥物によつて、みづから生命を絶たれたときに、葛西さんは病床で、大へんなことになるものだ、いつかはみんな、そんな

時にぶつかるのだ――さういふ意味のことをいひ、また「やられた」とも口にしたが、それやこれやを考へると、私には、葛西さんが臨終のちかくまで蟇口を手放さず一切をまかなつてゐたごとく、最後にはみづからの生命についてすら、みづから處置したと見えるところが、ほのかに感じられるのである。舟木重雄氏に勸められるまでは呼吸器の方の專門醫に診せず、近くの産婦人科内科小兒科といふ若い醫師だけにまかせ、しかも自分で醫者をことわり、民間の醫療器などにたよらうとさへした。いくらいつてもきかない、いはば私たち鄕土人通有の頑固さを失はない葛西さんは、藝術について、ペンを持つたらあなたまかせだといつてゐたやうに、すべてあなたまかせの心境でもあつたのであらう。さすればまた、故鄕の山小屋で自然療法をしたいと望んだことも、たとへば、鄕土に預言者は容れらずといつて歎くほどには鄕土に愛着してゐなかつたと同じやうに、やはり一種の藝術的夢想であつて、本心はすでに、最後の日を

覺悟してゐて、それを仄めかされず、ひそかに胸ふかく抱いてゐたのかも知れないのである。

ともあれ、私たちの『文藝王國』は、にわかに九月號の豫定を變更して葛西善藏追悼號として出すことにした。故人が書きかけてゐた『半折の半折』といふ未完成の小品をも、できたら遺稿として掲載したいと思つて、いろいろたづねてみたが、すでにいつのまにか破られてしまつたらしく、どうしても見あたらなかつた。

かくして、葛西さんの書いた自筆の原稿としては、私の『戀愛行』の長文の跋が絶筆となつたわけである。また書としては、例の「古岸何人」が最後のものとなつた。私は追悼號に、カツト代りに思ひ出ふかい掛軸を寫眞版にして揭げた。

卷頭には、德田秋聲氏、谷崎精二氏の弔辭も入れ、故鄕に於ける故人の風貌

を傳へた石坂洋次郎氏の文を旅の宿で執筆ねがひ、舟木重雄、廣津和郎の二氏にも寄稿を仰いだ。

舟木氏は、隱棲時代の葛西さんの書簡を抄錄し、これに註をほどこして奈良から原稿を送つてくれた。若き日の善藏氏の消息をつたへるものとして、意義ふかい記錄であつた。すなはち――

〇（手　紙）

お葉書を有難う。つひ御無沙汰してゐた。創作が出來つゝある君を羨む。豫て作家として尊敬してゐる、近頃どうして居るのかと思つてゐた志賀君の消息を、ちよつとでも聞き得たのが嬉しかつた。

僕は情けないことながら、やはり作にかゝれずに居る。毎日行きつ戻りつの苦しい思索を續けて居る。いろ〳〵な頭の引かゝりも、昨今やう〳〵稍整

頓しかけた氣もするが、それでゐてはつきりと摑めない。創作で進めるほか無いのだが、それが出來ないので、いろ〳〵な事を言ふ氣になれずに居る。それで鈴木（註。氏亨）君の方へもつひ御無沙汰してゐた。何れそのうち感想だけ書き送る積りで居る。

ほんの最近の消息だけ書きたい。

W（註。細君のこと）は手術後十日ばかしになる。後まだ二十日間位も入院せねばならぬさうだ。僕はまだ行つて見ずに居るが、一兩日中に子供等を伴れて行つて來る積りでゐる。やはり婦人科で痳藥にかゝつたさうだ、けれども僕の方からの原因ではない。素質的――自發的のものだから、その點では僕の良心に苦しいことは無い。

もう二十日間近く子供達相手の自炊生活である。淋しく靜かな生活である。一時村童を借りて來たが、窮屈だと見えて來なくなつた。女の兒は先日

腹を悪るくしたので、親達の方へ遣つてある。今は男の子と二人きりの生活だ。子供の寂寥と退屈に打悄れて居る態は不憫である。

君の感想には同感のほか無い。實際僕等の生活は悲慘である。併し尚對象を二三にして、一日も斯の世の中に生きてゐたいとは思はない。

靈的生活と云ふ境地には僕はまだ〳〵遠い。僕の現在は、強ひて云へば靜觀明徹――と云つた氣持に執して居る。この紛々雜駁な小自己を、大きな世界の眼に映して見たいやうな氣持で居る。大きな世界の心を心とせずに、この愛着憤懣の生を續けて行くと云ふことは堪へ難い事だ。

併し要するにこれは、態度覺悟を言つたやうなものだ。普通のことだ。

こゝまで書いて來ると、(夜八時)弟(註。勇藏)から小包が屆けられた。弟は引張り出されて、連中で弘前へ大演習を觀に行くので汽車で素通りしたのだ。小包の中には僕等が明日Wを見舞ふ爲めの旅費が入つて居るのだ。それ

でいとゞ心持が落付かなくなつた。が今夜書いて了ふことにする。子供は先刻から机の側の寢床で眠つてゐる。

弟も實に氣の毒である。資本が足りないので、常に惡戰苦鬪を續けて居る。自分が斯うして居るには忍びないと常に思つて居るが、併し斯う考へて來ると、弟ばかしへでは無いのだ。子供等に對する肉身的愛、細君に對する同情的愛——皆苦しく忍び難いものばかりである。併し藝術の欲求の前には忍ばねばならぬと思つて居る。私情（大きな意味での）に動かされてはならぬと思つて居る。斯う常に考へてゐて、覺悟を練つて來て居る積りで居るが、扨て然らばどんな作が出來る積りなのかと反問されては、失望に齒を喰ひしばるほか無いのである。僕は今、自分の主觀さへ出來て居ればどんなことを書いても作になると云ふ積りから、極めて手近かな平易簡單な短篇を第一歩として心懸けて居るが、それすら仲々容易でない。まして世界的な作家

や作品を思ふ時には、全く破砕されて了ふのだ。

僕は君に期待して居る。突き抜けて呉れゝばいゝと思つて居る。僕等の藝術は最早自分々々の功名利達の爲ではない。宗教的、信仰的世界の建設にある。これは自分自身の存在の爲めにも、藝術そのものゝ存在の爲めにも、當然そこまで進まねばならぬことゝ思ふ。僕は心からさうした眞藝術家の出現を望む。自分一個の如きは、小なる犧牲者として窮死した處で憾む處は無いのだ。

僕は君を信頼して居るから——適切に言へば他に信頼出來るやうな人を見出せないから——君の天分も境遇も僕に較べてすぐれて居ると思はない譯に行かない。僕は或點まで進み得たとしても、恐らくは最も狹い、影の薄い、悲慘な藝術家であらうと思ふ。併しこんな事は言ふ程のこともないが——。

僕は今切望に堪へないことは、僕の斯うした生活が、せめて二三年も續いて

與れゝばいゝと云ふことだ。僕の頭は實に粗末で、現實に無知で、心の眼がまるで開けてゐなかつたことを、つくづく感じて居る。此邊の百姓共のひとりひとりに比較しても、殆んど素質的には勝れた點が無いことを思はされた。當然であり得べき主觀の世界の大小と云ふことは別問題として――。僕は細君に對しても、自分の無知鈍感から顔を赭めたいやうなことが幾度もあつた。斯うした自分に作の出來ないのは當然のことだ。

惡るい書物、と惡るい刺戟から離れて、斯うして心の曇りを磨いて行きたいと思ふ。作の出來ないと言ふことがまだ恐ろしくないが、斯うした機會を失つて、不動な世界を持たない中に、再び擾亂の巷に彷徨して生を終らねばならぬと云ふことが恐ろしいのだ。

鈴木君の作に就ては何と言つたものか。ちよつとでも犯し難いやうな態度が見えるといゝと思ふが――。それにしても、世間にはいろいろな大層なこ

とを並べてゐて、それで一向犯し難いやうな氣持を與へない作ばかしの如何に多きことよ！

志賀君は『児を盗んだ話』以後發表して居らぬか知ら。發表して居るなら讀んで見たいと思ふ。白鳥の最近はどんな風か知ら？

取り止め無いことばかしを書いたが、今夜は氣持も落付かぬしするから止めにしよう。此邊はだいぶ寒い。綿入れを着て爐邊に坐つてゐねばならぬ。この三四日此邊も荒れて、僕の家などは陰惨なものだ。松本（註。恭三）君からは其後消息が無くて居るが君の方へはどうかしら。お身體を大事にし玉へ。僕も健康でゐるが氣管の方が餘りよろしくない。

いづれまた

葛西拜

（註。大正四年）十月二十一日夜十時

舟木兄（註。東京市麻布區材木町六九宛）

〇（端書）

繪本を有難う。心苦しいけれど頂戴して置く。窮困と混亂からかなり惨めな日が續いてゐた。新年來書き始めてゐたものも四五日休止して居た。一兩日中に書き續けるつもりだ。まだ二十枚ばかししか出來ない。自分の自炊生活が愚昧で、散漫で、不確實だから、いい作が出來やうが無い。實に書いてゐても厭だ。けれども他に手段もない。ブラ（註。勇藏氏）の方の賴みの綱も今や將に切れなんとする有樣である。

當地は近頃はほとんど雪が降らない。暖かだ。珍らしい冬だと云ふ。やはり僕には雪國らしく、戸外へ顏出しも出來ぬ程降つてゐる方が、氣持がだらけないでいゝやうだ。時ならぬ雪融けの點滴を聞いて引込んでゐるのは好い氣持でない。咽喉は其後格別のことが無い。やはり僕には當地方の氣候の方

がいゝやうだ。晩酌は連續してゞはないが、復活して居る。寒氣と不眠を凌ぐ爲めだ。泰三（註。相馬）君問題では君等にまで煩はしさをかけたさうで恐縮である。同君の憤懣に對しては實に申譯の言葉もない。賣友行爲――同君はさう云つたやうな氣持で僕を叱責するけれど、强ち僕もさう云ふつもりでは無いのだが、つい不德義な結果となり、僕も恐縮に堪へない次第だ。併し多少延引しても後は二、四、だけだから屹度返濟出來るのだが、何しろ同君の氣持を傷けたと云ふことでは恐縮である。

光用（註。穆）君の作は早く讀みたいものだ。僕は今擔ぐべき、人に誇示すべき何物も持たないので書けないのだ。自信が無いのだ。僕も遂にこの迷亂と困窮の裡に窮死すべき運命であらうか。僕は諸君の幸福が羨ましい。殊に今度の上京以來此の感の切なるを覺ゆる。君の創作の幸運を祈る。

年始のお返しもせず失敬してゐた。本年は友人へは皆失敬した。新年もの

は中央公論だけ讀んだ。（夕方から降り始めた。）

（註大正五年）一月十五日

葛西善藏

舟木重雄様

〇（端書）

お葉書拜見。こちらもこの十日許し前からめつきり暖かくなつた。すつかり春だ。子供は十町許し離れた、この村よりもまた一層小さな村の學校に通つてゐる。……さうしたやうなことが、多少氣持をやわらげる。併し何しろ現下の生活そのものが危機に瀕して居る有様なので、やはり日々刻々不安焦燥に襲はれて居る。

往來にも野山にももう雪がない。今たえて久しぶりで田圃から川緣など子供と散歩して居たところだ。

作は六七十枚でちよん切つてしまつた。これで濟んだと云ふ譯だが、餘り醜惡愚劣なもので書きかへするのも臆劫でほうつてある。諸君の批評に價するやうなものでない。……ヘンな謙遜などして居るのではないが。これから二つ三つも短いものを書いたら、またどうかと思つて居るが、今度のものは全く失敗ものだ。當然の天罰だと諦めるほかない。

書きかへたら御風（註。相馬）氏の處へ直接送つて掲載を依頼したいと思つて居るが、及落のほどは誠に覺束ないので、悲觀に堪へない。金がほしさに、斯うした情けないものまで依頼せねばならぬかと思ふと、恒産が欲しくなる。せめて多少の反響を喚ぶに足るだけの自信のあるものを書きたいと思ふ。明日の日のこともわからぬけれど、どうかして現在を最後の場所として踏み止まりたいつもりで居る。早文が落第したら、やぶいて了ふほかあるまい。諸君に讀んで貰ふのも厭なほどのものだから。——御風氏の現住所御面

倒ながら御一報願ひたいと思ふ。……光用君へ聞合せやうと思つてゐたのだが、序で故お願ひする。……早く次ぎの短いものにかゝりたいと思つて居る。ブラも誠に氣の毒なことになつてゐる。いづれまた

（註。同年）四月十九日午後三時

葛西善藏

舟木重雄様

〇（端書）

お葉書有難う。御健在何より。僕はやつぱし駄目だ——と云ふほかない。感謝したいなぞと云ふ氣持を起しては、現在の處却つて虛僞におちゐる。いろいろな問題が、日常生活と藝術との問題が、かなり苦しく頭を惱ます。結局日常生活の混亂した氣持から、もう少し廣い世界へ出なければならないのであらうが、今の處では容易でない。それ程現在の生活が危機におちゐつて

ゐる。それに自分のロマンチツクな(わるい方面に屬す)素質も非常にいけない。もう少し冷靜な組織的な考へ方の出來るやうになりたいと思つてゐる。

身體もよくないので毎日ゴロゴロしてゐる。久しく本を讀まないので讀みたいと思つてゐる。御面倒ながら貸して戴ければ何よりだ。拙稿に就ては特に批評を煩はす程のことは無い。藝術品としての無價値なことは僕にもわかる。唯僕としては、自分の踏むべき階段をさがすに多少のヒントとなり得たと云ふのである。原稿は先月初め御風氏から廻して呉れたと云ふだけで、其後の消息が知れない。

泰三君にも御無沙汰してゐる。お會ひの節はよろしく。

(註。同年) 七月十二日

葛西善藏

舟木重雄様

○（端書）

拜啓　御無沙汰してゐた。本をお送りした。道草（註。夏目漱石氏の著書）はそちらへ、他は東京の方へ――。

この夏はこちらは非常に暑かつた、雨がまるで降らない。東京の方とは反對だつたらしい。

かなり困迷してゐる。近いうち何等かの轉回が來るらしい。どう成行くことやら。不安なことだ。何れおたよりをしよう。いづれ

（註。同年）八月二十一日

葛西善藏

舟木重雄様（註。相州三崎町宛）。

以上の書簡について――

亡友との交友は明治四十四年三月頃からである。彼からの來狀は、そのをりをり面白いと思つたり、感銘したものだけを保存して置いたつもりだが、彼の歿後に捜して見ると、手紙や端書やが、長短のもの取りまぜ五十信以上もあつた。その何れを見るも、藝術についての懊惱苦悶が書かれてないものはない。彼は一生を通して、藝術の殉難者だつたのである。こゝに所載のものは、大正四年後半期から大正五年後半期までの間、妻子と共に鄕里なる靑森縣碇ケ關附近の藏舘村大字唐牛に隱棲してゐた頃、東京にゐた私宛に寄越した書信の一部である。」

と、舟木氏の附記がつけられてあつた。

廣津和郞氏は原稿紙十枚に感想を盛り、わざわざ一書を寄せて、「君の方に書いたものは書き足りなくはあるが、併し現在の僕の氣持を一番出してゐま

す。」と言つて來られたが、葛西さんの臨終直前に、作品のモデルの問題をめぐつて若干のいきさつがあつただけに、私は何か知られないでゐるものを、そこから汲みとることができさうな豫感を知りながら原稿を讀ませてもらつた。

と、はたして、いつさいの事情が明らかにわかつたのである。

『葛西と自分』といふ感想に、廣津氏はつぎのやうに書いた。

…………

〈谷崎精二が舊『奇蹟』同人の中で、葛西と廣津とが二人の我儘者だと云つた。葛西の通夜の歸りに、友人達が一緒に歩いてゐる時、精二は二度も三度もそれを云つた。

自分は葛西の我儘者である事は無論承認するが、併し自分はどうも葛西と並び稱せられるやうな我儘者ではないと自分では思つてゐた。一體自分はのはうづな我儘者だと人に思はれ自分でも一時それを承認してゐたが、又途中で考へ

直して見ると、自分ほど我儘者でない人間は珍らしいと思はれる筋がある。自分は人の我儘は相當に認める方だし、自分の思ふ通りに人を矯めようとは決して思はないし、どうも我儘でないと云つた方が、ほんたうのやうに考へられた。そこで『俺はそんな我儘者ではない』と、改めて自分で自分の事を思つてゐた。

ところが、谷崎精二が葛西と廣津とが二人の我儘者だつたと改めて云ふのを聞くと、自分はいろいろ考へて見た。そしてやつぱり自分は我儘者なのかな、と再び思ひ直すやうになつた。

といふのは、葛西と自分との友人關係である。葛西があの通りの我儘者で、彼自身一種の英雄である事を信じてゐて、そしてそれでもつて、彼は無理でも我を通さうとする。それが通りもする。それを一方で自分は或愉快さを以て眺めながら、他方で自分は始終多少ともそれを彼を矯めようとするやうな心持を

持つてゐた。そのために自分はよく彼と衝突した。併しその衝突には別段勝敗はなかつた。彼も負けたと思ふ人間ではないし、又自分も彼の我儘に負けるやうな事はなかつた。そこでどつちかが負けてでもしまへば、二人はもつと仲よくなれたのかも知れないが、彼の性格と自分の性格とは、或一點で、始終對峙してゐて、その對峙をどうも突破出來なかつたといふのが、ほんたうである。

自分は九月の『改造』に彼について書いた文章の中で云つてゐるが、彼にモデルにされた人間の大概が、片腕ちよん切られたり、片足ちよんぎられたりしてゐるが、併しその中で自分をモデルにして書いた或小説は、その彼獨得の『ちよん切り方』のイヤガラセ以上に、憎しみと敵意とをその底に十分ひそませてゐる。眞向から『惡意』をもつて書いてゐる。

自分はそれを書いた葛西に、嘗て自分が如何なる人間に對しても感じた事のないやうな不快と憎惡とを覺えた。自分は自分が彼にモデルにされたその事情

のために弱つてゐたので、同じ鎌倉に住んでゐた葛西に打明けて、始終いろいろ彼に相談してゐた。その相談に對して、彼はいろいろ慰めなどを云つてゐながら、その間に、自分が彼に打明けてゐたその事情を、三面記事的にその小說の中にさらけ出したわけなのだ。自分が彼に信賴をもつて、自分の閉口した樣を何も彼もあけすけに見せてゐると、そこをピシッと彼が一太刀自分の背後から浴びせたわけなのだ。探偵と三面記者との意地惡が（その小說は小說としては彼の全作中での駄作だ）そんなに自分の身近にゐようとは夢にも思はなかつた。

そこで自分の驚きと怒りとは爆發した。どうして葛西にこんな目に會はなければならないかといふ事は、自分には解らなかつた。今も尙解らない。併し解らないながら葛西の氣質、性格と、自分の氣質、性格との、暗默の對峙のためではなかつたかと、漠然と考へてゐる。そこには何の理窟もない。どうしても

葛西の我儘を（遠くの方からは承認しながら）近くでは承認しない自分が、谷崎の云ふ通り、やつぱり大きな我儘者であつたため、葛西は彼流の不意打攻撃を自分に喰はしたのではないかと思つてゐる。

その出來事はその後彼と會つて和解したが、併し後に退く事の嫌ひな彼は、何事にまれ『自分が惡かつた』と云ふ男ではない。又自分は一方彼が最後まで『自分が惡かつた』とこの人生で云つたりしない事を、彼自身のために望みながら、併し事自分の事に關すると、自分はやつぱり『自分が惡かつた』と一言彼に云はせたいやうな欲望を感じてゐた。

かうした氣持の喰ひ違ひが、彼と自分との間には生涯つきまとつた。自分が彼の小說に感心してゐる事が彼に傳はると彼は『廣津はやつぱり俺の親友だ。彼の友情は美しい』などと云つたりするが、一寸した事があると、直ぐ又自分の事を罵つてゐたらしい。

自分はそのモデル小説の事で（それは七八年前のことであるが）、彼の死ぬ一ヶ月前後から、再び彼に腹を立て始めてゐた。それは彼がそれを彼の『全集』に入れたからだ。彼は自分に向つて、その作で一時的な毒氣を吹きかけたのではなく『全集』に入れる事によつて、永遠に自分に毒氣を吹つかけようとするのだ、――自分はさう思はずにゐられなかつた。

自分はそれまで病中の彼の生活について、經濟的に奔走してもゐたし、或算も立ちかかつてゐた。が、自分は『改造』の豫告で彼の『全集』の目次を見、その惡意に充ちた小説の名がそこにあるのを見ると、彼を轉地させようとして計畫してゐた事を投げ出してしまつた。もう葛西の死ぬまで彼に會ふまいと考へた。

そこで『危篤』の電報が來ても、自分は彼の枕頭に行かなかつた。併し、自分は二三の人々に自分の氣持を話して、そして自分の行かない理由を述べて置

いた。

ところが、彼の死ぬ二日前だ。自分は他の人々にその話をしながら、當の葛西に向つてそれを云はないと、自分流の考へ方で考へ始めた。すると、彼が生きてゐるうちに一言彼にその事を云はなければならないと云ふ氣がして來た。

自分は世田谷にタクシイを飛ばした。彼はまだ生きてゐた。

『君に話したい事がある。人を拂つて欲しい』と自分は云つた。

『よし』彼はさう云つて、人を拂ひ、それから『一昨日と昨日は苦しんだよ。もう死ぬのかと思つたら不思議に生きてゐる。多分今夜か、明朝の汐時だらう』

『さうか、まあ止むを得ないさ。來る時が來たんだから』と自分は云つた。

『實はこの一ケ月程、僕は君に腹を立ててゐた。もう生涯君の顔を見まいと思つてゐた。併しその事を自分は他の友人に話した。それで、君に話さない法は

ないと思つた。そこで、今をはづしては話す時がないから話すんだ』
自分はその小説の話をした。
『それは困つたな』と葛西は云つた『校了になつてゐるし、今更徹回も出來ないからうが……』
『それでいい、もう徹回はしなくつてもいい。俺の氣持が君と和睦出來れば、それでいいんだ』
自分は改めて葛西を見た。彼は瘦せ細つた脛を立てようとしてゐた。
『怠儀か？』
『うん。なかなか苦しいもんだよ』
『どうも困つたな。併し仕方がないよ。君は兎に角、仕事もちやんと完成してゐたから、まあいいや』
『完成もしてないさ』輕い苦笑が、骨ばつた彼の顔にチラリと浮んだ。

『何か云ひのこす事はないか』

『さつき舟木に云ひ遺して置いたから、彼から聞いてくれ。君と舟木とに後始末を頼むと云つて置いた』

自分はそこで『左様なら』と腹の中で云つて、彼の枕許をはなれた。それが彼に會つた最後だつた。

自分はそれで自分だけの氣持で、その出來事に一つの解決をつけた氣であつた。自分は他の友人達と一緒に葬式その他の後始末に手傳つた。

自分はそれから半月ほど經つてから、葛西が死ぬ前の日、(丁度自分が彼に向つて話した翌日)自分を罵つてゐたといふ事を聞いた。自分はそれを聞くと、淋しい氣がしないで、やつぱり死ぬまで『自分が惡かつた』とはたうとう云はずに行つた彼の面影を、彼らしいと思ひながら思ひ浮べた。

死ぬ間際に、自分の心持を彼に向つて云はずにゐられなかつたのは、自分の

論理だ。併し葛西には自分の論理は通じなかつたらしい。死際になつて、うるさい、イヤな事を云ひに來た奴だと思つたに違ひない。

葛西の論理と自分の論理とは、永遠に喰ひちがつてゐたものらしい。

どうも葛西は我儘者だが、谷崎精二の云ふ通り、自分も彼と對立すべき我儘者なのかも知れない。

どうも人間と人間との間は仕方のないものらしい。もつとも、そこで互に何か學んで行くのかも知れない。

………

第十二章

藝術院善巧酒仙居士

――眞新しい位牌とともに、おハナさんはユウ子久美子の幼な子をつれて、同じ三宿のささやかな家に居を移した。清蔵君も、しばらくいつしよに暮らすことになつた。生活を支へていくものは『全集』初版の印税のみである。信州屋の老主人は、おハナさんに荒物雜貨と煙草を賣る店でもやるやうにすすめた

が、やがて、さういふ恰好の店の賣りものが近くに見つかりさうな風聞があつたのである。——それは信州屋酒店のすぐ隣り、氣が少しをかしくなつたとかいふ內儀さんのゐる荒物屋で、三宿へ越したそもそも最初に葛西さんの入つた家の近くでもあつた。いつか私の家に年賀の挨拶に見えると ふとき、葛西さんが半紙を買つて筆をかりたその店であつた。

『全集』は第一卷、第二卷をすでに世におくり、第三卷もやがて製本出來を間近かにひかへてゐた。葛西さんの歿後、新たに企畫が變更され、隨筆感想の一卷と日記書簡の一卷が追加になり、全五卷に改められたのである。

その第三卷の檢印が、なかなか來なかつた。が、いつのまにか本は書店の店頭に飾られてゐた。見れば他の檢印が捺されてゐる。ふしぎに思つて改造社へいつて訊ねると、過ぐる日、青森縣の鄕里からわざわざ某氏が上京して、版權一切を賣りたいとのことで讓渡してかへつたといふのであつた。

ことここにいたつては、今さら何をしようにも方法がない。私は病中の葛西さんにたのまれたればこそ、一巻から三巻までの初校をお手傳ひしたのである。私は、いさぎよくこの際身をひき、爾後の初校は出版社にゆだねることにした。そして、たとへ荊棘の道であらうとも『文藝王國』を力のつづくかぎり育てることが、何よりの手向けであると心に思つた。

その年、十二月も暮ちかくになつて、久しく旅にあつて消息のなかつた福士幸次郎さんから、一篇の原稿がとどいた。發送されたのは甲子園からであつたので、私はそれで、福士さんが鳴尾村の佐藤紅綠先生のところにゐることを知つた。

………

S——君

不意にこの六月末東京を出て九州の果てまで二三ケ月廻るつもりで出ましたた

ら、本當に思ひも掛けぬ事でこちらに當分ゐる事になりました。殘念な點もないではないが、將來の仕事のためもあることではあり、それにこちらのK——先生の御懇情にも何よりも先づ打たれる。詳しい事は申上げられぬが、折角貴方とはお馴染にもなり、住まゐも近くなつたのにと、つく〴〵惜しい氣が貴方に對して湧くを禁め得ない事は、申し上げて置きたいです。

わたしの前述の旅は、東京から大阪まで來るのにも一ヶ月かゝりました。信州松本では永い間無沙汰した親友を訪ね、伊勢では日本古代史蹟をちと踏査しました。これらの土産話はいろ〳〵ある。だがそれより寧ろ貴方に言ひたい事は、貴方に宿緣の木曾福島を見物した事だ。私は貴方の小說に出てくる下駄屋は何處だらうと、好奇と懷しさとで町中を見て歩いた。看板娘は旣に昔の事で今は見られなくてもせめて看板その物ぐらゐはと、眼を皿にして兩側の店屋を

見い〳〵歩いた。旅へ出ると私ほどの者でもこんな彌次氣分、茶目氣分が出る。でないと一人旅は憂鬱になつてやり切れないのです。

兩手には重いシウト・ケースを一つ宛下げてゐた。そして自分でも、

『物ずきだなア』

と笑ひつゝスタ〳〵歩いた。何軒か下駄屋があつたが立ち止まるではなかつた。そして行く先きにまた下駄屋が新たにあれば、その店の中にズイと目をやつて、然も足は休みなしに前へ、前へと運んだのであつた。

わたしは其の前知つてゐる人が居はしないかと、木曾御料林の役所を訪ねたのであつた。お互に吾れ等の郷里は日本一流の山林國、その關係でわたし等の國出身の役人さんは、彼處の役所にはよく赴任してゐる。運惡くこの頃はゐなかつた。わたしは退廳過ぎのひつそり閑とした綺麗な小使室で、小使からその

事を聞いて、他の話を暫くして後、また元の路へ戻つた。

話の中には貴方が木曾にゐる頃、どの官舍にゐるかを聞いて、その屋根を指さして貰つた事も一つある。役所の直ぐ裏の山の腹に、すく〳〵延びてゐる立木の木立を、これこそは日本名代の木曾檜だと聞かして貰つた事も一つある。今ひとつは木曾溪谷の上流に見える山の名を聞いた事であつた。この山は木曾冠者に緣がある山だと記憶する。だが今その名を記憶しない。

わたしはこの日の暮れ方になつて、一人の詩論家が此處に住んでゐるのを偶然見つけて、その人を訪ねた。中學校の先生であつた。運惡く東京の講習會に出てゐて留守だつた。闇は垂れ下がる。アテにする人は一人もない。わたしは全然 étranger になつてしまつた。センチメンタルな話だが旅愁が鼻ッ風邪ひいた時のやうに、心のうちに擴がり出した。私は橋を幾つか渡つて左岸の暗

い細い町をどこまでも歩いた。そして木曾福島を書いた今一つの小說、島崎藤村さんの『家』を思ひ出しつゝ、そこの特徴ある家々の建て振りを懷んだ。

この方面は日中わたしの見て廻つた町々が、大火あとの新建の家々で出來て居つて新開町くさいのと違ひ、いかにも昔のままである。木曾川の高い斷崖に臨んで、其れ等の家々は至極古風な、そして住み心持の好ささうな座敷を一つ宛有つてゐるのが、家の中の燈火で外からは見とほしである。一方また、狹い往來を隔てた向ひ側には、山の淸水の水槽がところどころ設けられてあるのも、私には木曾の町特有のものとして面白く思はれた。これは先刻行つた御料林の支局の沿道にもあつたが、兎に角その水槽はかなり大きく、水がどれも溢るゝばかり豐かに與へられてゐる事なぞ氣持がよい。

木曾福島の人には他國に流浪しても、恐らくこの水だけは一生は忘れられまい。それは何でもない水といふ物の問題である。でも生れ故郷を慕ふ人間の心

理は、この何でもないものが深く強く動かす事に、われ等をして考へしむるものがあるのである。

わたしの旅愁はここへ來て初めて慰められた。そして町端の手前の橋を渡つて、停車場下の低地へ出た。そして停車場に出て暫く汽車を待ち、十何年前の馴染みの土地、中津へ向けてこの晩下つた。

故郷の話が出たので、わたしは、吾れ等の同鄕の不幸な葛西善藏君の事を語りたい。彼も死んだ。實に、其の存在を死がムシリ取るやうに持ち去つてしまつた。

わたしは彼の死は松本滯在中に新聞で知つた。そして其の死の意外なのに驚き、その不幸に一生を終へたのを悲しんだ。たゞしわたしは死者には何時ゝ我

讃者である。貴方を通じて一ぺんの弔詞も故人の靈前に供へず、またこのよい先輩を失つた貴方に慰めの手紙もあげず、今まで過ぎてしまつた。でも貴方も知つての通り、わたしは故人の藝術の稱讃者である。この人の事はその後何度も考へてゐる。その一生がわたしに與へた暗い感慨を幾度も咀嚼し反芻して考へてゐる。

逢つて話をしたことはこの十何年間にたゞの二度で、しかも眞に膝を交へて語つたのは、貴方も御承知の通り世田谷のその死歿の家で今年の春たゞの一回きりだが、この人の心持はわたし等同鄕人にはたしかに肉身の心持であつた。したがつて之れからとてもこの感慨はわたしから離れる事はあるまい。

一體わたし等同鄕人は他の地方の人のやうには結びつかず、互に孤立し合つてゐる。たゞし恁ういふ運命はわたし自身の身の上から考へても決して簡單な事情からのものではなく、實にその人それ〴〵が相接する事を容易に容さぬと

いふ氣むつかしい心が其の人の文學的成長と伴つて養はれるからでないかしらんと思はれる。十何年か前、宇野浩二君が、『藏の中』を書いて賣り出した頃、宇野君の室で故人と落合つて、紹介を受けたのが初對面だが、二人はお辭儀するなんてソンナ社會上の儀禮はそつち退けで、鳥渡うなづいたぐらゐのものだつたと覺えてゐる。そして其れよりそれを云ふべくより大切な事は、恁うしてうなづき合つた後で、双方暫く目も放たず眺め合ひ、そして彼が遂に一と言放つて、

『うむ、君ならいゝ。』

と云ひ、同時にわたしがこの言葉に苦笑したことだ。……貴方の作は拜見してゐますとか、……貴方の事は誰れ君からよく聞いてゐますとか、そんな馬鹿げた社交語は言はなかつた。そして恁んなシーンで間もなく別れた。わたしは之れを追憶すると、今涙が湧いてくる。

西洋の言葉で「同じ腹の仔」といふ意味の言葉――日本語では一と言葉で何といふだらう――である。人間の子ではなくて、獸類の仔に對していふ事である。わたし等の沒社交的な、野蠻なその時の出會ひには、この同じ腹の仔の親しさが、或は憎しみがムキダシに出て來たのであらう。

あゝ、彼も苦節十何年、わたしも苦節十何年！………

その後十何年かの間に、彼を訪ねる機會が二度あつた。わたしが二十年振りで故郷に歸り、彼の第二の故鄕たる山間の溫泉地碇ケ關で假住まゐをした時が一度、その翌くる年わたしが弘前から三里向ふの青女子村に居を据ゑた夏一度である。

前の場合には氣が進まなかつた。後の場合にはわたしが自分の家で講習會な

ぞをやつてゐたりして、一日延ばしに延ばしてゐる内に、一ヶ月位の月日がたつて、彼は東京に歸つてしまつた。その後弘前に出たとき、彼がこの滯在中を書いた小說の舞臺に出てくる女學校々門際の揭示板のまへを通りかゝり、其處に未だ書かれてあつた一茶の發句を讀んだ。

吾れに來て遊べや親のない雀

しかし逢ひたいといふ心が痛切であれば、逢へない事がないのであつた。實は逢ひたくない氣持が底にかたく蟠り、それで臆劫であつたといふのが私の本當の心であらう。彼はその當時底なしの爛醉の人であつた。執筆には何時も書けぬ〳〵で行き詰まつてゐたときだ。それに三里こつちにゐるわたしの耳に仔細あつて筒拔けに聞えてゐた彼の今度の歸鄕の眞目的、恁ういふ事も承知してゐる。これまでも心得てゐて彼の宿を叩き、その酒の相手になるだけで、彼の其の『積年の惡』の報ひをナガシ眼で見るやうな事して何になる。わたしは葛

西君のやうに泥沼に沈んで限りのない事も嫌ひだが、高慢ちきな君子面するのも虫唾の出るまで嫌ひな性分である。病ひ膏盲に到れる吾が同郷の年長の友よと、わたしはその頃幾度か弘前の方の空を見た事か……

ここでわたしの罪深い思ひ出が一つある。實は故人に逢つたのはたつた二度と言つてゐるが、これは貴方に話した事があると記憶するが、故人とは今一度ッと鼻先きで出逢ひ、しかもわたしは一と言も物言はず、單に傍觀してゐた事がある。

東京大震災後二た月ばかり過ぎた或る夜、わたしは本郷のとあるレストオランでウイスキイを長い間呑んでゐた。

ここで其の十二時近く故人が酒呑みの痛ましい劇を一つやつて、その作品で有名なおせいさんが迎ひに來て、わたしは其れを狹いホールの奥から默りこく

つて見てゐた。實は兩方その頃はすつかり面變りしてゐて、最初解らなかつたのだ。唯だわたしの方が彼が其處に居合せた酒客に對し、怒つて叫んだ言葉でふと目を止めてつら〳〵見、この男何物ぞと思つて眺めてゐるうちに、つひに葛西君である事が解つたのである。

その彼の醉餘の叫んだ句は曰く、

『貴樣ア、おれを誰れと思つてゐるか、』彼はテーブルを文字通り叩いて、叱咜した。

わたしは或る時は微笑み、或る時は脣を嚙み、彼の醉態をウイスキイを吞みながら默つて見てゐた。

今思へば罪である。だが、わたしは酒を吞んでドナリ散らす趣味は嫌ひである。

奇妙にもこの二た晩ばかりあと、當夜おせいさんと覺しい婦人と連れだつ

て、このレストオランに顔を見せた書生がわたしの處にそんな事とは少しも知らず訪ねて來た。關西訛りの二十歳位の青年であつた。彼は私が、

『君の顏は知つてゐる。君はこの間本郷の○○で之れ／＼だらう』

と言つたら暫く呆ッ氣にとられて私を見まもつた。

S——君

わたしは今にして君に葛西善藏君を失つた君の悲しみを問はんとす。わたしも前述木曾福島の夜の町を歩いてゐる中にも、君の事や、故人の事を思ひながら歩いた追想を、今思ひ泛べてゐます。

『文藝王國』、これは葛西君がつけてくれた名であつた。（十二月十八日　關西甲子園寓にて）

………

―

文中のSはいふまでもなく私、K先生は紅綠先生、そして關西訛りの青年とは、三宿へ貸家さがしのときも同道した岡村君——すなはち『弱者』の口述を筆記した人である。

葛西善藏追悼號に福士さんのものが載らなかつたことを物足らなく思つてゐた私も、ここに『手紙一つ』といふ題のつけられた一篇を得て、これで「私たちの葛西善藏」が、ひとまづまとまつた感じを抱いた。遲ればせながらこの一篇を加へることは、創刊二年目を迎へる雜誌のためにも意義ふかいことであり、かつは多事なりし昭和三年を送るにも相應しい編輯の仕事ともなつたので、私は急いで印刷所へ持つていつて、新年號の組版をすでに了へたあとへつけ加へることにした。

さうして將棋盤と卓上ベルとが故人の遺愛の品として私にのこつた。私もこれから孤獨の道を行かなければならなかつたが、せめて病床での約束をはたす

ために、葛西さんの晩年記を書ける日のくるまで、人生の訓練に堪へなければならないのである。

私は、いまは絶筆となつた思ひ出ふかい「半切の半切」の軸を床の間に飾つて新しい年を迎へた。

古岸何人把釣竿明月蘆花君自看

（完）

昭和十八年六月　五　日印　刷
昭和十八年六月　十　日發　行　(5000部)

葛　西　善　藏

定　價 [illegible] 貳圓四拾錢
特別行為税相當額　拾參錢
合　計　貳圓五拾參錢

出版會承認 い10026

(會員番號106503號)

著　者　佐佐木千之　東京市世田谷區野澤町1—88
發行者　廣田義夫　東京市京橋區銀座西8—5
印刷者　大河内健二　東京市芝區濱松町1—13

發　行　所
東京市京橋區銀座西8—5
合資會社　學　藝　社
電(銀座)1444. 振替東京54955

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

(ヤマモト印刷)　東京1062

昭和十九年十月五日

上京の途 読了

丁度 [illegible]

[illegible]



巌南堂書店
TEL.(261)0.396
東京·神田神保町二ノ二

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03055 8274